

再建主義ウォッチング掲示板 過去ログ（最後）

2005年12月1日(No.948)～2006年1月25日 (No.1200)

米国のキリスト教新右翼思想である「キリスト教再建主義」(Reconstructionism, Dominion Theology, Kingdom Now Theory, Theonomy) に対して、真剣な憂慮を表明する立場に立つ人たちのための、情報交換・意見交換・問題提起のための掲示板です。なお、この掲示板の趣旨と関係がないと管理者が判断した書き込みについては、書き込んだ方への事前の承諾を求めずに、一方的かつ独断的に削除することがありますので、ご了承ください。

再建主義ウォッチング掲示板は、2006年1月25日をもって終了させて頂きました。
お問い合わせの方は、下記のメールまでご連絡くだされば幸いです。

makoto.yamaya@salvationarmy.or.jp

■1200 ありがとうございました

HN - 2006/01/25 02:07 -

山谷先生、長い間、ありがとうございました。

■1199 ?

? - 2006/01/24 22:31 -

山谷先生、長い間この掲示板を楽しませて戴きました。最初はROMっておりましたが、途中からsurgeon、そして?で乱入させていただきました。これからの先生の働きの上に神様の豊かな祝福がありますように。お疲れさまでした。突然小隊にお邪魔するかもしれません。その時、新来者カードには名前「?」住所「?」電話番号「?」と書きます。そういう新来者が来たら、それは私です。w。これからも宜しくお願い致します。

■1198 再建主義ウォッチング掲示板 終了のお知らせ

[山谷](#) - 2006/01/24 22:02 -

富井氏との再建主義論争から生まれた、このウォッチング掲示板ですが、ログ数が千を越える膨大なものとなりました。

省みるに、小生の論点は、いつも「天使的国家権力論／ストイケイア」という、同じ説明の繰り返しばかりになって来た感があります。さらにまた、「ゲネア問題」や「自然法」や「ガラテヤ書問題」や「コモンロー再建主義」や「カルヴァン申命記講解説教」や「リバータリアニズム」など、検討すべき課題も、あらかたすべて検討し尽くした感じがいたします。

小生は、日本において、米国のごとく、リバータリアニズムの影響力が拡大して行くのではないかという漠然とした危惧を抱いておりました。しかし、「米国産牛肉」「耐震偽造建築」「証券不正取引」という、天啓的な事件によって、日本が進むコースは、リバータリアニズムではなく、より穏健な、未来に希望が持てる方向へと、舵を切り始めた感じがいたします。

今後、このウォッチング掲示板を続けるとするならば、再建主義の監視というよりは、リバー

タリアニズムへの監視というテーマに、重心を移して行くことになるであります。

そこで、近日来、日本のリバータリアニズム論者のサイトをいろいろ調査しておりました。ところが、そこに出て来るのは、教養の度合いこそ異なるものの、本質的には、フリッツ・スプリングマイヤーやユースタス・マリンスやテックス・マーズや太田龍などの「悲観的前千年期王国論的陰謀説」と大差ない、「陰謀史観」の列挙であったのです（！）

これには、小生は、心底落胆いたしました。

結局の所、再建主義／リバータリアニズムの行き着く所は、「陰謀史観」であったのです。

小生は、かつてのハリー・ポッター大論争での経験以来、「陰謀史観」は「鬼門」と心得るようになっておりましたが、どうやら、このまま、リバータリアニズム・ウォッチングを進めて行きますと、当然のことながら、「陰謀史観との対決」を迫られることになるのは自明である、と気づかされました。

そこで、ライブドア関連のログをきっぱり捨てられた、ドクター・ルークの潔さに小生も倣い、当再建主義ウォッチング掲示板を、これをもって終了することと決めました。

おそらくは、この日本においては、よもや、再建主義が、キリスト教界に影響力をふるうような事態には、今後はないまいと、信じております。しかし、もしこの楽観的予測が、遠い将来に裏切られるような事態になりましたら、小生は、ふたたび「御言葉の剣」を身に帯びて、戦いに出たいと思っております。

長い間にわたり、ウォッチング掲示板をウォッチングしてくださったみなさま、投稿してくださったみなさまに、心から感謝し、神の祝福をお祈り申し上げます。

なお、一週間後の1月30日（火）をもちまして、この掲示板を削除させていただきます。本年1月30日までのログは、当方にて保全の上、アーカイヴ化して、親サイト「再建主義大論争を回顧する」から参照できるよう、リンクを貼らせて頂く予定です。

父と子と聖霊の恵みが、みなさまに、ゆたかにありますように。アーメン

■ 1195 今日の聖句

[山谷](#) - 2006/01/23 21:56 -

自宅の壁に「日めくり聖句カレンダー」が掛けてあるのですが、今日、1月23日（月）の聖句は、箴言10:16でした。

「神に従う人の収入は、生活を支えるため。
神に逆らって歩む者の稼ぎは、罪のため。」

このところの日本での「米国産牛肉」「耐震偽造建築」「証券不正取引」の出来事は、いずれも、再建主義／リバータリアニズムが思い描く「後千年王国の青写真」に対して、大きなクエスチョンマークを投げかけるものとなったと思います。

国家によるすべての経済規制が撤廃される再建主義社会／リバータリアニズム社会においては、「米国産牛肉」の輸入を禁止するすべはなくなりますし、「耐震偽造建築」を取り締まるすべもなくなりますし、「証券不正取引」を処罰するすべもなくなります。そこでは、一切が、国民の「自己責任」とされてしまうのです。

「自己責任」というのは、実に不思議な言葉で、ある種の「マジック」の力を秘めています。みんなが自己責任で牛肉を食べれば、狂牛病は、問題にはならない。みんなが自己責任で家を建てれば、地震で壊れる家は、問題にはならない。みんなが自己責任で投資をすれば、風説で判断を誤って大損をしても、問題にはならない。それは、「個人の問題」なのだから、あなたが自分で責任を取るべきだ。社会の問題でも、国家の問題でも、ましてや、神の指が人間の良心に刻みつけた「衡平」の問題でもない。わたしたちが収めた貴重な十分の一税を、どうか、あなたの個人的な問題のために「悪用」しないでくれ、というわけです。

ジャン・カルヴァンは、「われわれが、神への敬虔を損なわずに、儀式律法を廃棄することが出来るように、われわれは、隣人への愛を損なわずに、司法律法を廃棄することが、確かに出来るのだ。諸国の政府は、『愛』という律法の本質を達成するために、刑罰の程度においては司法律法から異なっても、国家が置かれたその時々状況に応じて、必要な法を正当に制定することが出来るのだ」ということを、『キリスト教綱要』第四編で論じています。つまり、カルヴァンは、国家が法によって統治するその第一動因は「隣人への愛」だ、と宣言しているわけです。

わたしたちの政府は、「隣人への愛」ゆえに、狂牛病のおそれのある牛肉を輸入禁止とし、倒壊の恐れのある建物を規制し、人をだますような悪質な商売を処罰しているわけです。

しかし、再建主義／リバータリアニズムの社会においては、「隣人への愛」が、国家から完全に消滅してしまうことになる。「隣人への愛」もまた、完全なる「自己責任」となり、個人が個人の努力だけで対処すべき問題となります。「後千年王国の悪夢」でありましょう。

■1193 ?

? - 2006/01/23 19:38 -

ライブドアは、IT企業ではなく、投資信託だと思います。

私は、本業が忙しく、これまで、生まれて一度も株というものを購入した事がなく、また、その他の先物取引など、所謂、投資というものを行ったことは全くありませんので、門外漢の戯言とお聞き流し下さい。

新聞や、雑誌で得られる情報からだけで判断すると、LDは、楽天のように確実に日銭を稼ぐ事のできる本業というものが全くなく、実態は、ITを看板に、株の分割、増資などを繰り返して、個人投資家から巨額の金をかき集め、それを投資する、投資信託業務がその本業ではないかと思っています。我々に見えるLDの表の顔は、レンタルサーバーがあれば、誰にでも作れるHPのみであります。

投資信託であれば、元本割れも覚悟の上の投資ですから、無知から出たとはいえ、LDとその関連企業の株を購入した人々は、元本割れ(=株価下落、上場廃止)のリスクを個人の責任で負うべきです。先に提示したサイトは、既に、昨年の夏には知られていたブログであり、その後も、LDに投資し続けたとすれば、情報収集の欠如と言われても、仕方がないと思います。

いずれにしても、クリスチャンは、宝くじは別として、ハイリスク、ハイリターンへの儲け話には乗らずに、地道に、額に汗して働くのが「主のみこころ」ではないでしょうか？

■1191 教会をたてる

HN - 2006/01/23 17:46 -

富井氏も、再建主義に立つ教会を始めれば良いと思います。そうしたら、それがどんな実を結ぶかがわかります。現代は、どんな過激なキリスト教でも、サボナローのような目に遭うことはありませんから、富井氏も新しい教会を設立したら良いのです。ただネット上でくだ巻いてるだけじゃ、なんかねー。。。。。

■1190 キリストの精神から外れた再建主義

HN - 2006/01/23 17:35 -

米州と欧州のキリスト教の違いについて、山谷先生のレス、ありがとうございます。
ところで、再建主義者の話を聞いて「神は愛です。私はイエスが歩まれた道を、すなわち、神を愛し、人を愛する道を聖霊とともに歩みます」と涙ながらに決意する人が何人いるでしょうか？

再建主義は、キリストの精神から、あまりにも逸れているので、到底良い実を結ぶことはできませんまい。再建主義は、冷酷な人々の集まりです。特に彼らはクリスチャンに対して冷酷だと思います。

■1189 新自由主義のアイオーンすら、あきれるかも

山谷 - 2006/01/22 22:48 -

ご紹介くださったサイトを見させて頂きました。ただ、ただ、呆れ、ため息が出るばかりです。これは、新自由主義／リバータリアニズムというような「高尚」な次元のものではなく、単なる「詐欺」なのではないか、と思ってしまいました。新自由主義の「アイオーン」すら、あきれて、怒りだしてしまうのではないのでしょうか（苦笑）

ところで、キリスト教再建主義は、聖書律法を司法制度に厳格に適用するよう要求しはするものの、いったいどういうわけか、聖書律法を経済制度に適用することに関しては、ただ、「経済を国家の規制から完全に解放せよ」という、一点張りなのです。

「？」さまが聖書を引照してご指摘くださったように、聖書律法には、古代パレスチナ社会の経済制度に関わる規定が幾つもあるわけですから、再建主義者は、それらを根拠にして、「再建主義的商法」を編み出す努力をしても良さそうなものなのですが、まったくしていない。

そうしますと、再建主義者のパラダイムの中では、最初から、「経済」は、主権者たる神すらも手をつけることができない「神聖不可侵」の領域となっているのかもしれませんが。

そうであるとするならば、再建主義は、聖書の神に仕えようとするものではなく、はなから、「マンモン」（富の神）に仕えようとするものであった、と看破することができるでしょう。

このような再建主義社会が到来した暁には、今回のライブドアの手法などは、まったく問題の無い、「合法的経済活動」ということになります。いや、「無法的経済活動」と言うべきか。なぜなら、再建主義社会には、経済を規制する「法」が存在しないのですから、「合法」か「不法」か、という議論すら、意味をなさなくなってしまうのです。ですから、「無法社会」である、ということになってしまいます。そう言えば、ライブドアの社員が、社内で、「おれたちはアウトローだ」という言葉が、よく交わされていた、と述懐しておられましたか・・・

小生は、東京地検特捜部のゆえに、キリストに感謝します。国家の「剣」の権能に属するこの公共機関は、位の天使、主権の天使、支配の天使、権威の天使といった、諸権力の秩序であり、キリストによって創造され、キリストの十字架によって打破され、キリストの頭首権に従属させられ、現経綸において、キリストの王権的宇宙支配のエージェントとして、奉仕させられているのです。

東京地検特捜部が「仕事」をしている限り、「バビロン」の到来は、未然に阻止され続けることでありましょう。

■1188 ?

? - 2006/01/22 21:01 -

今回のライブドア騒動を、旧約聖書のみ言葉を通して考察すれば、「不正な商人は呪われる」という事になるのでしょうか？

レビ記19章35節～

あなたがたはさばきにおいても、ものさしにおいても、はかりにおいても、分量においても、不正をしてはならない。正しいてんびん、正しい重り石、正しいエバ、正しいヒンを使わなければならない。わたしは、あなたがたをエジプトの地から連れ出した、あなたがたの神、主である。あなたがたは、わたしのすべてのおきてとすべての定めを守り、これらを行ないなさい。わたしは主である。」

申命記25章13節～

あなたは袋に大小異なる重り石を持っていたてはならない。あなたは家に大小異なる枡を持っていたてはならない。あなたは完全に正しい重り石を持ち、完全に正しい枡を持っていなければならない。あなたの神、主があなたに与えようとしておられる地で、あなたが長く生きるためである。すべてこのようなことをなし、不正をする者を、あなたの神、主は忌みきらわれる。

?列王記8章32節

あなたご自身が天でこれを聞き、あなたのしもべたちにさばきを行なって、悪者にはその生き方への報いとして、その頭上に悪を下し、正しい者にはその正しさにしたがって義を報いてください。

詩篇第1篇6節

まことに、主は、正しい者の道を知っておられる。しかし、悪者の道は滅びうせる。

詩篇第146篇9節

主は在留異国人を守り、みなしごとやもめをささえられる。しかし主は悪者の道を曲げられる。

http://blog.goo.ne.jp/yamane_osamu

☐ 1187 北米キリスト教と欧州キリスト教

[山谷](#) - 2006/01/21 20:30 -

どうも最近の北米キリスト教は、わたしたち日本人が知っていた、かつての北米キリスト教から「変質」して来ているのではないかと。そういう疑問を、キリスト者、非キリスト者を含め、あちこちの方々が、抱いているようです。

欧州キリスト教と北米キリスト教を比べてみた場合、小生の「感性」にストレートに訴えかけて来るのは、欧州キリスト教なのです。

なぜなのか、このところ、考えているのですが、次のようなことが、頭に浮かんで来ています。

19世紀後半の欧州キリスト教は、社会ダーウィン主義的社会哲学に半ば迎合して、進化論をキリスト教弁証論に採用し、「宗教発展史学」のようなものを説きました。これは、原始的なアニミズムから出発して、先祖崇拜、英雄崇拜、多神教、二元論、一神論、ユダヤ教、そして、キリスト教に至って完成する、という「進歩史観」です。これにより、世界の諸宗教に対するキリスト教の優位性・最終性を、弁証しようとしたわけです。このような自由主義神学は、社会ダーウィン主義の社会哲学との親和性が高いため、「欧州文明が、世界の諸民族を支配して、人類の進歩を指導する」という、当時の「帝国膨張政策」を支えたパラダイムとなったわけでした。

これは、わたしたち非欧州人からするならば、とてつもなく肥大した「自我」であるわけです。

そのためか、どうか、わかりませんが、欧州キリスト教は、その後、第一次世界大戦と第二次世界大戦という「大災忌」を通過させられ、国家も社会も教会も焼土と化して、その「自己同一性」が、徹底的に砕かれてしまったのでした。

第一次大戦と第二次大戦という「十字架による対処」を受けて、欧州キリスト教は、「小さき者と共に歩もうとするキリスト教」として、再生を遂げることが出来たのでありましょう。その意味で、「成熟」したキリスト教であるわけです。

これに対して、ピューリタニズムの純粹形態が移植されて開始された北米キリスト教は、南北戦争のような「災忌」を通らされましたけれども、米西戦争も第一次大戦も第二次大戦も朝鮮戦争もベトナム戦争も湾岸戦争も、遠い異国の地で行われた戦争であり、アメリカの国土が直接戦火にさらされたり、ましてや焼土と化すような「十字架」は、通らされなかったものでした。欧州に比べますと、非常に守られた、保護された、安全な環境の中で、「純粹培養」のキリスト教が、ずっと成長し続けて来たわけです。

ドクター・ルークの表現に、「エジプトで鍛えられる」という表現があります。個人の霊性のレベルでも、成熟のためには、艱難を通して修練される必要がありますが、国家のレベル、キリスト教文化圏のレベルでも、過去に大きな艱難を通ったか、通らなかったか、艱難を通して砕かれたか、砕かれなかったか、によって、キリスト教の「成熟度」が、異なって来るのではないか。

そんなことを、このところ、考えています。

■1186 チルトン

?? - 2006/01/21 16:20 -

彼については富井氏はこう言っていますね：

<http://tak0719.hp.infoseek.co.jp/qanda2/73BDrmW94Xw6630633.htm>

ゲイリー・ノースも辛辣に批判したが、異端のまま召されたと。神学的痴呆だそうです。どうも富井氏のフルプレテリストに対する姿勢などを見ても、自分と反する者は再建主義の内外を問わず、とにかく異端かつアナテマとなるようです。再建主義の内部だけを見ても、かつての赤軍派が内部抗争して、ついには互いに自己批判を要求し合って、総括（殺）し合ったのと似ている感じがします。

■1185 地獄の人をクリスチャンとして扱う富井氏

HN - 2006/01/21 14:51 -

「私たちは、神の祭司として、他の兄弟姉妹、ノンクリスチャン、世界全般のために祈り、和解を促します。」

なにか、いつもの富井氏ではないような文であります。

日ごろの彼の文章は、博愛とか理想主義といったものとは程遠い感じがしますよね。

では、彼は山谷先生のために祈ったのか？といえば、答えはNOでしょう。彼が、立場のことになるクリスチャンやノンクリスチャンのためにする祈りとは「裁きに委ねる」ということしかないように思います。そしてその真意は「呪われよ、呪われてしまえ！！」というものです。師の一人であるチルトンに習って。しかし、チルトンの場合、呪いはチルトン自身に返ってきました。彼はどういうわけか異端に陥り、靈的盲目となり、若くして死にました。チルトンは富井氏の立場から考えても、死後地獄に行っている筈なのに、なぜ、富井氏は、地獄の人の生前の文章を引用するのでしょうか？ 普通、そんな人の書物は使いませんよね。悪い交わりは、良い交わりを損ないます。

■1184 ここですね！

？？ - 2006/01/21 13:05 -

？さまが富井氏の発言の「部分」にアーメンされている。これが再建主義に社会的強者が同調する理由です。再建主義の基盤は明確に聖書と矛盾しているが、その上の構築物だけを見ると、特に知性に訴えるのです。姉齒物件が基礎はぼろぼろなのに、上物だけは豪華絢爛であるのと同じです。目に見えるところで判断すれば容易に、しかも知性の高い人々ほど騙されるのが再建主義です。

■1183 ？

？ - 2006/01/21 12:51 -

私は、他の部分は良く解りませんでした。以下の部分はアーメンと言えます。

>それまでは単に数学を教えていた先生がクリスチャンになると、
>神の作られた世界が数学で説明できることを生徒に教え、
>神の御心を伝えることができるようになります。

>世の科学者は、世界を神と無関係に解釈しますが、
>クリスチャンの科学者は、世界を神の目的によって
>作られた世界として説明し、人々の知性を
>神と和解させることができます。

>いわゆる宗教行事や宗教行為という日常と隔絶した
>世界の中でしか神を感じることができなくなって
>しまっているのは残念です。

■1182 雑感

？？ - 2006/01/21 12:15 -

1180のアップールはすごいですね。富井氏は「邪悪なものを内に秘めている」と言うよりは、心のビョウキなのでは？ビョウキの人は自分がそのようなものを撒き散らすことに気がつきませんから。ライブドアの件でも最初は「これは陰謀だ。堀江をつぶすな。」と叫んでいたのに（ふと出る言葉、これが彼の本音なのでしょう）、ある時からコロっと変わって堀江氏を糾弾している。一方で山谷氏を初めとする主にある兄弟たちを、再建主義を批判する者は悪魔の者であると異端宣告し、再建主義の中でも孤立している。一方で和解のとりなしの務めをせよとアップールする。このブレの大きさ、発言と行動の食い違い、何だかますます激しくなっている感じがします。多分聖霊の照明の中で、自分を客観的に見つめることができなくなっているのでしょう。彼の今後がむしろ心配ですね。ルーク氏は分裂病的に自己崩壊していくと診断しておられるようですが、それこそ彼のためにとりなしの祈りが必要かもしれませんよ。

■1181 社会主義的スローガン

HN - 2006/01/21 00:34 -

>1180

こうなると、共産主義国家の自己宣伝みたいな感じですね。
富井氏は、聖書に立脚しているとはいえ、非常に邪悪なものを内に秘めているような気がしてなりません。富井氏に「愛」を語る資格があるのか？ 富井氏はクリスチャン同士の兄弟愛に生きることが出来ない人だと思います。

それから？さん、レスありがとうございました。

■1180 我不可理解

HG - 2006/01/21 00:01 -

tomi 2006/01/20(金) 23:10

とりなしについて

私たちクリスチャンは一人一人が「神の祭司」です。

クリスチャンは、神の預言者・祭司・王という三重の使命を与えられています。

祭司は、民のために祈ることによって、また、祭儀を行うことによって、神と人間を仲介するために働きました。

民の罪を許すために、祭壇に供え物を捧げ、血を祭壇に注ぎかけました。そうすることによって、民の罪の許しを乞い願うことができました。

私たちは、神の祭司として、他の兄弟姉妹、ノンクリスチャン、世界全般のために祈り、和解を促します。

私たちがとりなすというのは、単に祈りだけではなく、行動によって、神と人、人と人の間を和解させ、平和を作ることです。

また、神と被造物を和解させる働きもあります。私たちが神中心の気持ちで仕事をすることによって、あらゆる領域を神と和解させることができます。

たとえば、それまでは単に数学を教えていた先生がクリスチャンになると、神の作られた世界が数学で説明できることを生徒に教え、神の御心を伝えることができるようになります。

世の科学者は、世界を神と無関係に解釈しますが、クリスチャンの科学者は、世界を神の目的によって作られた世界として説明し、人々の知性を神と和解させることができます。

このようにして、クリスチャンは、毎日の行動において、神と被造物、神と人、人と人を和解させる働きをするのです。

何か特別にとりなしの集会に出ることだけがとりなしなのではなく、日々の生活そのものがとりなしなのです。

残念ながらこのようなことを教えている教会は少なく、人々は御言葉に飢えています。

そして、いわゆる宗教行事や宗教行為という日常と隔絶した世界の中でしか神を感じることができなくなってしまうのは残念です。

氏は、どうも言っていることと、やっていることが乖離しています。解離性人格障害的傾向の兆候・・・か？

■1179 私の立場

? - 2006/01/20 22:20 -

私は、文字通りの24時間を1日とした6日間でこの世界が創造されたという立場をとっております。ただし、世界が創造されてから、現在まで何年経過しているか？という問題に関しましては、系図の省略等もありますので、6000年よりは、もう少し長いのではないかと思います。長くても1～2万年位ではないかと考えております。

<http://life7.2ch.net/test/read.cgi/psy/1130245199/65>

■1178 独逸の聖書信仰に立つ宣教団

? - 2006/01/20 21:34 -

山谷師へ、

意見の一致点を見出せてホッとしております。

HNさんへ、ドイツには逐語靈感説に立つ教会は勿論あります。

リンク先をご参照下さい。オランダにも存在していますが、URLを見出すことが出来ませんでした。英・独・蘭語以外の言語は私の語学力では検索出来ません。

<http://www.liebenzell.org/cms/>

■1177 ヨーロッパ大陸の聖書無謬説

HN - 2006/01/20 20:07 -

ヨーロッパ大陸において、聖書無謬説や逐語靈感説に立つ教会は、現在でもたくさんあるのでしょうか？アメリカから逆輸入された教派・教会ではなく、ヨーロッパ伝統の教会、つまりルーテル派や改革派などにおいて、聖書無謬説は現代でも信じられているのでしょうか？

■1176 アメリカのキリスト教

HN - 2006/01/20 19:59 -

あまりに感覚的といわれるかもしれませんが、アメリカのキリスト教と、ヨーロッパ大陸のキリスト教の「醸（かも）し出す雰囲気の違い」。これはいったい何なのでしょう？たんなるリベラルとか正統主義といった問題ではないと思います。ハンガリーの改革派の牧師（名前は忘れましたが）など、すばらしく深みのある説教をしておりました。

■1174 フリーター問題

[山谷](#) - 2006/01/20 17:08 -

「？」さま

お互いの間に一致点を見出すことが出来て、安堵しております。

ドイツ、フランス、オランダは90年代から、パート労働者に厚生年金を適用し、それに対して企業負担が行われる方向に動いて来ているようです。これは、独仏蘭がいずれも、正規労働者とパート労働者の差別を禁じる「国家の公法」を制定したことによります。

これに対してアメリカは、市場の自由に任せており、パート労働者の二割から三割程度が、厚生年金の適用を受けるにとどまっているようです。まさに、「新自由主義」でありましょう。

独仏蘭と米の中間に行くのがイギリスで、法律上、正規労働者とパート労働者の差別を禁じているようですが、パート労働者に厚生年金を適用するかどうかは、市場の自由に任せるようです。しかし実際には、ほとんどの企業が、パート労働者に厚生年金を適用しているようで、「小さな政府」と「企業の徳目」が、上手く組み合わされている感じでしょうか。

興味深いことに、パート労働者に厚生年金を適用し・かつ・企業負担分を出すかどうかで、大陸の自然法国家と、英米のコモンロー国家と、対応が二つに分かれる、ということのようです。

これは、ヨーロッパと英米の「自然法かコモンローか」という法文化の違い、社会哲学の違い、そして、「ストイケイア」の違いを、如実に現しております。

わたしたちの政府は現在、パート労働者に厚生年金を適用するかどうかについて、上述の独仏蘭米英各国の状況を研究分析し、政策立案過程に入っているようです。

小生としては、新自由主義やリバータリアニズムにつながりやすい北米圏の「新しいキリスト教」よりも、健全なカルヴァン主義の政治神学を保持しているヨーロッパ圏の「古いキリスト教」の社会哲学を好みます。ですから、わたしたちの国は、ぜひ、英米方式ではなく、独仏蘭方式に倣った政策立案をして欲しいものだと、祈っている次第です。

□1171 柔和な者

[山谷](#) - 2006/01/20 16:07 -

小生の理解では、柔和な者とは、「敵を呪わずに、祝福を祈る者」です。

ところで、再建主義者は、教会の祈祷会における「呪いの務め」の回復を主張します。

よって、小生の理解する限りでは、再建主義者は、柔和な者ではない、ということになります。

聖書信仰については、小生は、天地創造紀元前4004年説を信奉しておりますし、聖書正典の逐語靈感説を信奉しておりますし、また、キリストの処女降誕、奇跡、贖罪死、復活、昇天、再臨を文字とおり信じておりますし、また、現代における癒し、異言、預言、悪霊追い出し、死者の復活、瞬間移動も信じております。

さて、その上で小生が信じていて、しかし、再建主義者が信じていないことは、現経綸において、主イエス・キリストが、十字架によって打破された天使的国家権力を使役して、その頭首権的・王権的宇宙支配を行っておられるということです。

この「聖書信仰」を保持しているゆえに、小生は、再建主義者には、なり得ません。そうして、この「聖書信仰」を無視しているゆえに、再建主義者は再建主義者たり得るのです。

□1170 柔和な者は幸いだ@富井氏

?? - 2006/01/20 15:39 -

富井氏いわくー

今回の事件で我々が学ぶべきことは、「金とか武力だけで得た力は、力ではない」ということだろう。

聖書が主張している権力の獲得法とは、「柔和になること」である。

「柔和なものは幸いである。地を相続するからである。」

とイエスが言われたように、支配するには「柔和、謙遜」が必要である。

神は柔和な人とともにおられる。

柔和とは、ただ人間の前で腰が低いということの意味しているのではない。

聖書が教える柔和とは、「神と神の言葉の前に従順である」ということだ。

・・・

「聖書が何を言おうと、俺はこう信じる」というような人は、いかに人の前で謙遜であっても

傲慢なのである。

人間の目では、どの人が謙遜で、どの人が傲慢かはわかりにくい。神の基準と人間の基準が違うからである。

...

それに対して、ヴァン・ティルやラッシュドゥーニーは、御言葉のみに依存する神学を奉じているので謙遜なのである。

聖書に完全には依存していないアルミニウス主義のキリスト教も傲慢である。聖書が「神は救われる人を永遠の昔に予定された」とはっきりと記しているのに、それを信じない。

このように書くと「tomiは人を裁いてばかりいる」と言われそうだが、本当に人を裁き、見下しているのは、「聖書にのみ頼ることをしない」人々である。

聖書の定義によれば、そうなのである。

いかに謙遜に見えても、「処女降誕？復活？空中移動？瞬間移動？こんなの信じられませんか！」というような人々は柔和ではなく、傲慢な人々である。

自分の知恵に頼って聖書を捨てる人々には未来はない。

彼らは、地を相続できない。

彼らは、地から追い出される。

最終的に、聖書信仰のクリスチャンが地を支配することになるのである。

地球は徐々に聖書信仰のクリスチャンの手に移っていく。

いかに頭がよくて、金があっても、聖書に従わず、倫理的に間違ったことをしている人間は、一夜にして破滅するのである。

ここの聖書信仰のクリスチャンとは再建主義者のことであろう。

それは空中移動・瞬間移動を信じる聖書に忠実な人々であり、カルヴァンが否定している聖書律法の司法適用を信じるカルヴァンに立脚していると主張する再建主義たちであろう。

真の聖書の語る「柔和な者」とはどういう属性を持つ人々のことなのであるだろうか？

1169 フリーター問題に関して

? - 2006/01/20 12:02 -

フリーター問題に関しての短信です。

我が国の雇用形態が欧米型に変化して、雇用コストが安くて済むように、常勤職員採用を出来るだけ控えて、短期雇用、必要なときだけ雇用する派遣社員など、社会保険料の負担を企業がしなくて済む(社会保険料の半額は雇用者が負担する)ようになって来ています。我が国には、幕藩時代から、終身雇用という古き良き伝統がありました。昨今の経済優先・人間軽視の流れは、この伝統的良慣習を破壊し、若者の常勤職員としての就職を阻み、勤労意欲を殺ぎ、無気力怠惰な大量のフリーターと言われる人々を生み出しました。彼らは、社会の犠牲者です。多くの働きたくても働けないフリーターは、本質的には「蟻」であり、山谷師の提案は、彼らの就業意欲を高めるための一助となるでしょう。雇用コストが上昇し、国際競争力が低下しても、次世代の同国民である若者を守るためにも、早急に改革せねばならない事だと思えます。

1168 再建主義の魅力

[山谷](#) - 2006/01/19 22:58 -

ライブドアの企業風土として、「市場のルールで決められていないことは、すべて自由」という考え方があったとのこと。小生は、これは、「聖書律法で禁止されていないことは、すべて自由」という再建主義の考え方に似ていると思われました。これに反して、従来の常識的な投資家たちの間では、ルールで明確に決められていないからといって、何でも好きなよう

にやってよいわけではない、という暗黙の了解が存在していたそうです。それがいまや、新自由主義のアイオンによって破られたかに見えたわけですが、ところが、ケインズ主義のアイオンがブローを食らわせて、新自由主義のアイオンが慌てている、という構図のようです。

小生が聖書律法を読みますと、「社会的弱者が落ち穂拾いをする事ができるよう、束を刈り尽くさないようにしなさい」ということが、きちんと命じられています。主の家系図の中のひとりであるルツなどは、実際にその恩恵を受けたことによって、生き残ることができ、そのようにして生き残ることができたからこそ、主イエスに至る家系が生まれ出ることができたわけです。再建主義者は、どうしてこれを根拠に「聖書的生活保障制度」を論じないのか、不思議でなりません。ルツを救った落ち穂拾いとしての「聖書的生活保障制度」が、単にルツを救ったのみならず、畑で出会ったボアズとの婚姻を通じて生まれ来るであろう、その子々孫々までもを救った、と考えることができないでしょうか？ それとも、憐れみのない地主が、すべての束を刈り取ってしまって、ルツが野で飢え死にしたとしても、主は、石ころからでもアブラハムの子孫を起こせるのだから、それは別に、どうでもよいことだったのだろうか？

小生には、聖書は、最低限の生活保障を、社会的弱者に対してきちんと行うよう、律法においても、詩編においても、預言書においても、福音書においても、明瞭に命じていると思われます。

しかし残念ながら、再建主義者の主張は、「聖書律法が命じていないことは、すべて自由だ。それゆえ、すべての経済規制を撤廃せよ」という一点に、尽きるのです。

いま、再建主義に対して、最も魅力を感じる事の出来る人物がいるとしたら、それはおそらく、ライブドアの堀江氏ということになるでありましょう。なぜなら、もし、再建主義社会が到来したならば、堀江氏の今回の市場での手法は、何ら問題なし、ということになるからです。「フェイク」がフェイクではなく「本物」になれてしまうわけです。

■1166 フリーターとフェアトレード

[山谷](#) - 2006/01/19 22:20 -

年金制度危機とフリーター問題がリンクされて、現在浮上してきているわけですが、これを解決するには、企業が、パート労働者に対しても、正規労働者と同様の厚生年金制度を適用すればよいと思われます。

つまり、国内においては、パートであれ正規であれ、いかなる就労形態であっても、事業所は必ず厚生年金制度を適用しなければ、「違法な就労」になる、ということにするわけです。

これにより、年金制度上、「フリーター」の問題は、解消されることになります。

この「改革」を行いますと、事業所には、厚生年金の事業所負担分が重くのしかかって来ることになりますが、これは「持続可能な社会を維持するために必要なコスト」なのですから、経営者には我慢していただくほかないでしょう。もちろん、厚生年金の事業所負担分が支払われない「ヤミ就労」や「ヤミ労働市場」が出現することが予想されますから、労働基準監督署への予算配分を大きく付けて、機動性のある「労働Gメン」を組織し、抜き打ち検査による取締を行えば、相当程度は抑えられると思われます。

事業所負担分の増加は、当然のことながら、商品価格なりサービス価格なりに上乗せされて、間接的に消費者が支払わなければならないことになります。これもまた、消費者が、「持続可能な社会を維持するために必要なコスト」として、我慢して受け入れるしかないでありましょう。

このことによって、国内の商品価格やサービス価格は、軒並み上昇することとなります。そうしますと、発展途上国から入って来る安い商品との価格競争に、激しくぶつかることとなります。

ここにおいて、日本の消費者が、マインドセットを完全に変えなければなりません。

つまり、日本が、持続可能な社会として維持発展して行くためには、企業も消費者も必要なコストを負担せざるを得ない。それと同様に、世界の貧困や経済的格差を解消するためにも、発展途上国から「価格の安い商品」ばかり買うのではなく、フェアトレードによる「価格が公正な商品」を買うように、心がけなければならない。そういうマインドセットに、切り替えて行く必要があるでしょう。

すなわち、企業と消費者が、「日本と世界の持続可能な発展のために、多少高くても、必要なコストと考えて、売る／買う」という新しい企業行動／消費行動へマインドセットを切り替えて行くことにより、国内の労働市場における「フェアトレード」へシフトすると同時に、発展途上国からの輸入市場においても「フェアトレード」へとシフトするわけです。

このためには、現在の「市場原理万能主義」が提唱する「勝ち組・負け組」というものの考え方ではなくて、「フェアトレード」が提唱する「発展に必要なコストをみんなでシェアする」というものの見方が、どうしても必要です。

このような「パラダイムシフト」が可能かどうかは、国家の徳目の問題というよりは、企業の徳目、消費者の徳目の問題、ということになってくるであります。

もちろん、「商売に道德など、要るものか！」「消費に道德など、要るものか！」という考えの企業や消費者が、大多数であれば、上記のようなパラダイムシフトは、とてもとても、不可能、ということになります。

いまや、団塊の世代が大量退職を迎え、1965年から1980年の間に生まれた「X世代」（ジェネレーション・エックス）が、社会の中堅層の位置を占めるようになってきたわけですが、この世代には、「ホワイトバンドをつけて、スターバックスコーヒーではフェアトレード商品を選んで買う」ような行き方を好む人たちが、ある程度おりますから、小生は、まったく希望がないわけではない、と思っております。

「勝ち組」とされていた堀江氏が、ドクター・ルークの表現で言うところの「フェイク」であったこと。「勝ち組の塔」とされていた六本木ヒルズが、評論家・吉田司氏が言うところの「バベルの塔」であったこと。そしてまた、「市場原理万能主義」とされていた当の市場が、適切な注意や管理やチェックや介入を欠いたために、「市場停止」になってしまったこと。

これらを考え合わせますと、わたしたちはいまや、重大なターニングポイントに来ているのではないかと思わされます。

□ 1165 サードパーティの感想

?? - 2006/01/19 22:14 -

どうも一連の流れを拝読しておりますと、?さまの高収入（税金などで800万）の立場に対して、ひとつのフィルターがかかってしまっているようです。互いに相手の立場に立ち会わないと、特に文字の交換だけの掲示板では真の交流はできません。ルーク氏のBlogにおけるカキコから推測しますと?さまは血の流れる修羅場の現場を知っておられる方で、その目を通した医療福祉の現状を訴えておられる。ところが山谷氏はじめとする反再建主義のみなさんは、机上

の聖書的理想論を展開しておられる。ここですでに議論がすれ違っています。多分再建主義に学者や医者や弁護士など、社会の強者と見えるクリスチャンが多いのは、このためです。「小さき者」を自称する人々が実はかなり計算高く、その小さき立場を巧妙に利用していることは現場を知っている人であれば身にせまって分かること。再建主義の富井氏はそのような欺瞞をズバリと指摘する故に、実に社会の強者クリスチャンにアピールするのです。このあたりをよくよく理解しないと、福音主義は再建主義に対して、理論武装の面だけでなく、社会批判のレベルにおいてもかなわないことでしょう。？さまの覚えておられるフラストレーションこそが再建主義に燃える原動力となり得るのです。なぜなら？ご自身も、ご自分を「小さい者」と感じておられるからではないでしょうか？現在の福音主義では？さまのような「小さい者」がむしろ排除されるからです。この辺に気がつかないと再建主義は本当にマイナーな存在からメジャーに躍進するかもしれません。一部の有力なクリスチャンの政治家も注目しているようですよですし。ちょっと横レスで失礼しました。

□ 1164 ?

? - 2006/01/19 18:45 -

生活保護制度は縮小する必要もないし、ましてや廃止する必要はありません。私が、ここで申し上げているのは、生活保護を必要としている人に、生活保護費が十分に支払われ、生活保護費が有効に使われるためには、「ギリギリス」が、生活保護を受けないようにする必要があると申し上げているのです。

そのためには、生活保護被受給者と面識のない、地域コミュニティに関係のない人が、生活保護支給の可否を決している、現在の制度上の欠陥と、その盲点について、生活保護費を不正に受給している確信犯的ギリギリスの排除が必要です。

年間3万人の自殺者のうち、生活保護を受けていれば、自殺をせずにすむ人々に福祉が行き渡るために、現行の制度を続けるならば、地域コミュニティが生活保護資格の審査に携わる必要があると思います。

理想的には、所得税が10%未満に抑えられ、持てるものが、持たざる者へ弾力的支援が出来るよう、宗教の中の相互扶助がギリギリスの排除には有効であると考えられます。

□ 1163 制度と運用と誤用

[山谷](#) - 2006/01/19 16:31 -

良い制度であっても、運用がまずければ、法が意図する「衡平」の目的が果たせないでしょうし、また、可能な限り運用が最善になされたとしても、制度を悪用しようとする人を、完全になくすことは、むずかしいでしょう。なぜなら、わたしたちは、キリスト初臨と再臨の間の「中間時」を生きているわけで、その間は、わたしたちは、自分を含めての「不完全な人間」がもたらす苦しみを、耐え忍ばなければならないからです。

三つの事例をご紹介くださいましたが、これらの事例だけでは、「生活保護制度」を縮小せよ、とか、廃止せよ、という結論には至らないように、小生には思えます。

それはちょうど、診療点数を水増し請求する医師が三人いたからといって、すべての診療所を閉鎖せよ、という話にはならないし、また、無免許運転をするドライバーが三人いたからといって、すべての自動車の使用を禁止せよ、という話にはならないのと同じかと思います。

つまり、制度の問題と、運用の問題と、誤用の問題を、分けて考える必要がある、ということです。

現在、わたしたちの国では、毎年、約100万世帯が生活保護を受給し、3万人がホームレス生活を送り、3万人が自殺しています。

この100万世帯のうち、本来なら生活保護を受給する「資格」にはないはずの世帯が、どれぐら

いあるのでしょうか。

有効な統計調査のためには、最低でもサンプル数が700以上は必要ですから、面接調査なり資産調査なり実態調査なりをして、700世帯中70世帯以上が「無資格受給」をしているのであれば、100万世帯のうちの10万世帯前後が、「無資格受給」をしている可能性がある、ということもできるでしょう。

しかし、このような調査をわたしたちが行わずとも、実際には、中央政府からの「生活保護の適用を可能な限りひきしぼれ」という命令に沿って業務を行っている各地方政府の官僚が、面接調査・資産調査・実態調査を行って、「多数の申請の却下」を行って来ているわけですから、わたしたちとしては、その判断を信任するほかは、ないでしょう。

「多数の申請の却下」が、3万人というホームレスと、3万人という自殺者に、そのまま直接結びついているわけではありませんけれども、しかし、3万人というホームレスと、3万人という自殺者の膨大な数は、生活保護支給の可か否かを決める地方政府の判定が、けっして右から左に適当に行われているのではない。いや、むしろ、非常に厳しい判定が行われている、ということ十分にうかがわせるものです。

現状においても、これだけ厳しい判定を、さらに厳しくするのであれば、確かに、生活保護受給者総数は減少して行くでしょう。しかし、年間の受給数が50万世帯に減ったとしても、それでホームレスが13万人、自殺者が13万人になったとしたら、わたしたちは、果たして、「再臨の主イエス・キリスト」に対して、説明責任が果たせるのでしょうか？ はなはだ疑問です。

小生の考えとしては、現状において、国内総生産に対する生活保護支給総額が、0.3パーセントしかないわけですから、わたしたちの政府が、もし今後イギリスのような、「小さな政府」のもとでの競争社会を目指して行くのであれば、最低でも、現状のイギリス政府と同じレベル、すなわち、「国内総生産に対して4パーセント程度」の支給総額まで、予算を拡大しても、おかしくはない。いや、むしろ、拡大すべきであろう、と考えます。

□ 1161 ?

? - 2006/01/19 11:54 -

山谷師へ、

解説ありがとうございました。

私は、人間の価値が市場原理で決定され、「非生産的人間」とレッテルを貼られた人は「野垂れ死ね」とは言っていない。私が野垂れ死にを切望する人々は、確信犯的キリギリスたちです。

???さんへ、

判らないことは、独断と偏見で曲解するのではなく、直接本人に尋ねるのがディスカッションの原則です。特に、キーワードのterminologyが異なると、それ以降のディスカッションが無意味なものになってしまいます。判らないことは聞く。知ったかぶりや思い込みは良くないと思いますよ！

□ 1160 ?

? - 2006/01/19 11:46 -

「非生産的人間」のterminologyが、「人間の価値を、生産的であるか生産的でないかという『市場価値』だけで決めようとするような、社会ダーウィン主義、自由放任主義、共産主義、新古典主義、新自由主義、リバタリアニズム、キリスト教再建主義の『諸霊』に共通した人間観です」という事が解りました。

すると、富井氏が定義する「キリギリス」とは、全く異なっているという意味に解させていただきます。再述しますと、「キリギリス」とは、市場価値で決められた定義ではなく、市

場での価値に係わらず、ここが大切なところですが、『将来に対する備えをする能力があるのに、意図的、確信犯的に将来に対する備えを行わなかった人々』と言えましょう。

従って「ハンディキャップのある人々」「肉体的or精神的な病を得た方」はギリギリには含まれていない事は自明の理です。

私が日常接する機会のある生活保護受給者の方々の特徴は、1139のリンク先に詳述してありますが、リンクをクリックする勇気の無い方のために抜粋を以下に記します。

【生活保護＝極貧 ではありません。働くより『生活保護』を貰う方がたくさんもらえるし、楽だから。そのような理由で働ける身体なのに受けている方がいます。

私と同じ年代でもです。

何故？受けられるの？

疑問に思われる方も多いと思います。

『アルコール中毒』の診断がつけば比較的簡単におりるようです。＜事例1＞

・50代男性、生活保護歴10年。

家族は戸籍上いないはずだが妻も子供もいる。

一人だけ別住所にして申請。

実際には多少の財産はあるが申請した住所、名義には無いのでおりた。おりたお金で昼間からパチンコ&酒。

余ったお金は奥さんにわたし貯金。病院に来ると『俺が生保だからきちんと対応しないんだろ～！！』と迷惑行為を行う。実際には予約もせずに指ちょっと切ったから痛み止めくれなどの用事で来る（バンドエイド貼ればいい程度の傷）ため予約患者様が優先されるだけの事。二言目には入院させると大騒ぎする。大変困った方。

＜事例2＞

・20代男性。

高卒で就職が無かったため（就職活動がめんどくさくてしなかつただけ）生保を受けることにした。『うつ病』と診断をつけてもらい受給。味をしめたので、働くのを放棄。酒に酔って殴られ、顎骨折で入院。すぐに怒鳴り散らす。保護歴が長くなり、それに伴い社会性低下、非常に意思疎通が計りづらい。

＜事例3＞

・40代女性。

母親に完全に依存しておりバイト程度しか働かずに生きてきた。母が亡くなり遺産も食い潰し生保へ。特に病気も無く、学歴も大卒。働こうと思えば清掃やレジがある…。議員に知り合いがいるらしく口ききしてもらったらしい。生保にも関わらず、なぜか車も携帯も高級ブランド品も持っている。どうやら隠し財産？

『睡眠薬欲しいだけなのになんで1時間も待つのだ！！』

心療内科は一人当たりの診察時間が長く（話を聞かないといけない）予約患者様から順番に診察。急に来て薬だけ欲しいのに！とご立腹される。本当に必要か判断しないと処方出来ない（転売する人も多い）事を説明するがずっと職員に当り散らす。

今回、複数の事例を混ぜて紹介しました。このままの人は実在しませんがこんな感じで税金が無駄に使われているんだ...という事を知ってください。この人達は医療費、払わなくていいんです。

（医療は現物支給）生活保護費ももらって病院代もただなんです。普通の貧乏人より（うちの家みたいな）、楽な生活をしています。どうおもわれますか？

制度に問題がある気がしませんか？

受けなくても暮らしていけるのに受けている人がいます。

国が景気が良かった時代はそれで良かったでしょうが今は5人に1人がフリーターの時代です。この人達が歳を取ったらおそらく生保になるでしょう（貯金する余裕が無いため老後の蓄えは無いでしょう）。国は破綻してしまいます。どうか、生活保護は必要な方が利用してください。働くのだるい！という理由では申請しないようにお願いします。男性ならパチンコ店やガソリンスタンド、工場、女性ならレジ、ウォータービジネス、なんかは不景気の今でも募集している事が多いです。生保受ける前にやるだけやってみましょう！！働かざる者食うべから

ず。働いて税金を納めている人間がいるから社会は成り立っています。道路も水道も税金が使われています。より良い社会にするために『労働の喜び』を感じる事が出来るように、子供さんのいる方は『楽しんで儲ければ人の事なんてどうでもいい』という人間にはしないようにお長居したいです。】

□1159 繁栄の福音

[山谷](#) - 2006/01/19 11:43 -

さて、「主イエス・キリストは、市場原理を超越しておられるかたであり、このキリストに結ばれた人間は、だれでもすべて、市場原理を超越して生きることが可能とされる」というのが、正しい福音理解であるとするならば、小生は、メガチャーチが説く、いわゆる「繁栄の福音」というのには、クエスチョンマークを付けざるを得ないのです。

特に、再建主義の亜流である「王国神学／使徒的宗教改革」で説かれている「繁栄の福音」は、「キリストの大宣教命令における『全世界に出て行って、あかしせよ』という意味は、キリスト者が神から経済的祝福を受けて繁栄し、その豊かな富を、貧しい未信者に見せつけて、羨望の念をを起こさせることにほかならない」という理解をしています。

これではまるで、聖書の福音が、新自由主義の「アイオーン」が説く「市場原理万能」の偽福音によって、換骨奪胎されているようなものではありませんか？

□1158 訂正と補足説明

[山谷](#) - 2006/01/19 10:57 -

ログNo.1153で、国内総生産に対する生活保護支給総額を「0.1パーセント」としましたが、「0.3パーセント」の誤りでした。おわびして訂正いたします。

なお、「非生産的人間」という表現を補足説明しますと、これは、人間の価値を、生産的であるか生産的でないかという「市場価値」だけで決めようとするような、社会ダーウィン主義、自由放任主義、共産主義、新古典主義、新自由主義、リバータリアニズム、キリスト教再建主義の「諸霊」に共通した人間観です。

小生の考えでは、「非生産的人間」というのは、聖書の人間観に照らすならば、「小さき者」ということになりましょう。

聖書の使信の偉大さは、王の王・主の主であるキリストが、受肉して「小さき者」となってくださった、ということ。そして、主キリストは、「小さき者たちの王」「小さき者たちの王国の王」として再臨なさる、ということです。

それゆえ、主イエス・キリストは、市場原理を超越しておられるかたであり、このキリストに結ばれた人間は、だれでもすべて、市場原理を超越して生きることが可能とされるのです。ガラテヤ書が「この世の諸霊」「律法制定の諸霊」から解放されて、聖霊に満たされて生きる「神の子の自由」を説いているのは、まさにこの「超越」のことであろうと思います。

これこそがまた、「市場原理万能」という偽福音を説く「アイオーン」（時代の霊）に対する、ほんとうの福音であろう、と小生は、思います。

そして、国家と社会（ストイケイア）は、主イエス・キリストに仕える「奉仕者」に過ぎないので、国家と社会が「小さき者」を、けっしてないがしろにしてはならないのは、当然のことであろうと、小生は思うのです。

■1156 ???

??? - 2006/01/18 19:52 -

???の疑問が氷解しました。

山谷氏の発言に激しく同意2.

言葉尻にこだわるのではなく、今回の議論の文脈全体を読み返し、安易に質問するのではなく、熟読・熟考することをお勧めいたします。

■1155 ?

? - 2006/01/18 19:42 -

山谷師へ

国民総生産は一定期間に国民経済が生産した財貨・サービスを市場で評価した価値額から、その生産に要した原材料などの中間生産物の価値額を差し引いた総額です。従って、サービスなど『地の産物』に属さないものも含まれています。

さて、『非生産的人間』とは穏やかでない表現だと思います。山谷師の仰る『非生産的人間』とは、具体的に誰の事を指すのでしょうか？私は、富井氏も含めてキリスト者が『非生産的人間』という表現を使うのを見たことはありません。どういう人々を想定した言葉なのか、そのterminologyを是非とも教えていただきたいと思います。

■1154 ありがとうございます

HN - 2006/01/18 17:24 -

山谷先生の書き込みに「激しく同意」致します。
ありがとうございます。

■1153 非生産的人間の生死（2）

[山谷](#) - 2006/01/18 17:06 -

このような「生活保護制度」ですが、「支給総額」は、先のログで述べましたように、「国内総生産」に対して0.1パーセントしかありません。

もし仮に、「国内総生産」というものを、モーセ律法が言う「地の産物」だと解釈できるなら、わたしたち日本人は、国内総生産額530兆円のうち、十分の一を取りわけて、税として国庫に収めればよい、ということになります。

しかし、近年の税収は40兆円程度ですから、わたしたちが「地の産物の十分の一」を国庫に収めたことになるには、まだ13兆円程度の税の上増しが必要、ということになります。いまや、与党も野党も、行財政改革断行の後に、最大13兆円程度の消費税大增税を予定しているようですが、その数字は聖書に照らしてみても、あながち的を外れたものでもない、ということになりましょうか。

さて、「生活保護制度」自体は、財政赤字と何の因果関係もないにもかかわらず、1980年代半ばの行政改革審議会は、どういうわけか、「生活保護制度」を、厳しくひきしぼるよう、注文をつけ、その結果、憲法上・法律上は「先進国中最高レベル」にあるこの制度が、現実の運用においては、非常に制限されることとなりました。

これは、法律の詳細な運用手続きまでも「法の本体」で定めようとする諸外国とは異なり、日本では、法の現実の運用の部分は、省庁の省令なり通達なり通知なりで取り決めてしまうという、「官僚の解釈運用の幅」が大きい制度になっているため、可能となったことです。

これにより、「生活保護を必要とする人に、いかに適用するか」という視点ではなく、「生活

保護を必要とする人に、いかに適用しないか」という視点に立って、制度が運用されることとなっていました。

悲劇であったのは、生活保護申請の窓口が、ドイツの教区救済委員としての聖職者や福祉専門職とは異なって、日本の場合、「純然たる官僚」であったことです。つまり、前年は土木課や水道課や経理課で勤務していたような人が、人事異動で生活保護申請の窓口にやって来て、業務にあたり、次の年はまた別の課に異動する、というような環境において、生活保護の申請が、取り扱われたのです。

このため、申請への対応が、「強い人には弱い態度で、弱い人には強い態度で」行われざるを得ないことは、いたしかたありませんでした。

官僚の側としては、生活保護を必要とする人のニーズに応えるよりも、むしろ、生活保護の適用を厳しくひきしぼるようにとの中央政府の命令を遵守することが優先されますから、窓口での対応が、本当に生活保護を必要とする人の自尊心を、深く傷つけるものとならざるを得なかったことは、容易に想像がつきます。このため、90年代においては、絶望して、生活保護の申請を取りやめたり、自殺によって抗議する人が、見られるようになったのです。

そこへ、わたしたちは、あのバブル経済の崩壊を経験したのです。景気の後退局面に入っただけで10年以上が経過し、ようやく上昇局面に入ってきていますが、その間、わたしたちの国の企業は、大胆なリストラを断行し、さらにまた、莫大な額の不良債権を抱える金融機関は、強力な手段で債権回収を行って来ました。

この、リストラと債権回収によって、生活の途を失った中高年の人々が大量に生まれましたが、本来ならそうした人々をきちんと受け止めるべきはずの「生活保護制度」は、上述したような、新自由主義・リバータリアニズムの霊とも通じる、過酷な「時代の霊」に覆われてしまっていましたから、「救い」には、ならなかったのです。

本当に追い詰められた人は、ホームレスになるか、車中生活を送るか、それとも、自ら命を断つしか、ありませんでした。

この10年、毎年三万人近くの人が、自ら命を断っています。10年で三十万人が死んだことになります。これは、太平洋戦争の日本将兵戦死者数の「七分の一」という実に莫大な数字で、わたしたちは、いわば、「戦争のただなか」にあると言っても、けっして過言ではないでしょう。

この戦争は、おそらく、ケインズ主義の「アイオーン」という「時代の霊」が、いまや、新たに到来しつつある、新自由主義の「アイオーン」と、正面から衝突する、日本を舞台とした、激しい戦いなのです。

□ 1152 非生産的人間の生死（1）

[山谷](#) - 2006/01/18 16:54 -

「非生産的な人間は死ねばよい」という考え方は、わたしたちの国に古来からあった「時代の霊」に通じるものを感じます。日本史においてこの考え方は、「口減らし」「身売り」「姥捨て」というかたちで頻繁に現われ、農村部を中心に、太平洋戦争前まで存在していました。

度重なる冷害と、地主による搾取の中で、飢餓状態に置かれ、どうしても家族が生き残るためには、悲嘆の涙を流しながらも、働けなくなった高齢者を山中に捨て、娘を売春宿に売り、新生児を水にひたした和紙で窒息死させるしか、手段がなかったのです。

このような、「非生産的な人間は死ねばよい」という「時代の霊」に対して、心底怒りを抱いたのが、二、二六事件を首謀した東北農村出身の青年将校たちでした。彼らは、情け容赦ない「時代の霊」に対抗するため、法華経に基づく「王道楽土」のユートピア建設を目指す国柱会の革命思想に拠って、体制打倒に立ち上がったのです。

歴史に「もし」は、ありませんけれども、もし、戦前の日本において、「先進国中最高レベル」にある現下日本の生活保護制度が存在していたならば、東北農村の「口減らし」「身売り」「姥捨て」の悲劇は、相当程度防げたはずですし、そうであれば、青年将校たちの義憤に駆られて命を賭した行動も、起きなかったはずですし、二、二六事件が起きなかったとするならば、国家滅亡に至るあの大悲劇も、避けられ得たかもしれないのです。

わたしたち日本人は、「非生産的な人間は死ねばよい」という「時代の霊」を、日本史の舞台から退場させるために、あの「戦争」という、大勢の若者たちの血を流す「痛み」を経なければならなかったのです。主権の天使、位の天使、支配の天使、権威の天使の闘争というのは、かくも、過酷なものです。

そうであるなら、今日の「生活保護制度」は、「若者たちの血であがなわれた尊い賜物」だと考えることは、出来ませんか？

■1151 ?

? - 2006/01/18 12:25 -

山谷師へ、

真に保護の必要な方が受給される限りにおいては、生活保護制度自体は何の問題もありません。財政赤字と、生活保護は何の関係もありません。生活保護制度は当然必要な制度です。

しかし、ここで問題にされるべきは、確信犯的に年金保険料を納付しなかった連中が、堂々と生活保護を受給出来る制度の欠陥、あるいは、年金制度で集められた、本来ならば年金の原資となるべき資金が、年金官僚によって浪費され、我々の世代は、場合によっては、必要十分な年金を受給できなくなる恐れがある点です。年金官僚の浪費を許した制度的な欠陥や、その責任所在や責任の主体を明らかにしないこの国のあり方に疑問を感じます。富井氏ではありませんが、ホリエモン叩く前に、年金官僚の首を取れと検察官僚には言いたいところです。

いずれにしても、このような欠陥だらけの年金制度で、若者の納付者(保険料を確信犯的に納めない輩)が増加し、彼らの本音は「将来は生活保護を受ければ良い」であり、あるいは、何らかの切っ掛けで、生活保護受給の旨みを知った若年者が、そのままズルズルと生保依存者になってしまっている現状を見ると、そういうギリギリのような連中の面倒まで税金で見る必要があるのかどうか疑問が残ります。そういった連中は、野垂れ死ねば良いのです。我々の貴重な税金が浪費されている現状を知って戴きたいと思います。

■1150 生活保護について

山谷 - 2006/01/18 10:10 -

わたしたちの国の「財政赤字」の問題は、「生活保護」の問題とは、まったく関係がないと思います。

世界の先進国の中で、「国内総生産」に対する「生活保護支給総額」の割合は、わたしたちの国は、0.3パーセントです。これは、先進国の中で、最低ランクです。

サッチャリズムの行財政改革で「小さな政府」の先端を走っているイギリスでさえ、「国内総生産」に対する「生活保護支給総額」は、4.1パーセントにもなっています。

また、世界の先進国の中で、「国内総人口」に対する「生活保護受給者総数」の割合は、わたしたちの国では、0.7パーセントです。これもまた、先進国の中で、最低ランクです。

これに対して、「小さな政府」のイギリスは、「国内総人口」に対する「生活保護受給者総数」は、15.9パーセントにもなっています。

これを見てわかることは、わたしたちの国における「生活保護」は、憲法上・法律上の規定としては「先進国中最高レベル」にあるとしても、現実の統治の運用上においては、支給総額においても受給人口においても「先進国中最低レベル」にある、ということです。

それゆえ、国による「生活保護」を廃止すれば、財政赤字が解消するとか、「小さな政府」に改革すれば、経済が活性化して、「生活保護」の必要がなくなるなどの考えは、間違っていることになります。

世界の先進国の先端を切って「小さな政府」に改革した当のイギリスにおいて、生活保護支給総額も受給人口も、かくも多いのですから、「新自由主義・リバータリアニズム社会」が到来すれば、万事上手く行く、というのも、幻想でありましょう。

□1146 主日公同礼拝

HN - 2006/01/17 22:29 -

「けっしてキリギリスではありません」と言われて、少し自信がつかしました。(笑)
私は、富井氏がどんな説教をされるのか、聞いてみたいように思います。もし富井氏が日曜礼拝で説教されるとしたら、どういう話になるのか？ 福音的な話なのであるのか？ それともミレニアムにあるような、刺々しい社会批評をされるのか？ 富井牧師の説教者としての資質は如何に？

□1145 ?

? - 2006/01/17 21:58 -

1140～1141さんへ

どこにでもいるようなのんびりした人はキリギリスとは言いません。彼らは蟻です。私が、日常出会う生活保護受給者は、キリギリスの成れの果てがほとんどです。確信犯的年金保険料未納者です。出世する人も、出世しない人も、社会の中では当然出てきます。それは、能力や努力や、色々な要因が複雑に絡み合って、結果が分かれたのです。しかし、両者ともに蟻です。決してキリギリスではありません。

さて、この掲示板が再建主義を憂慮する掲示板であることは百も承知です。私は再建主義神学ではなく、穏健派カルビン主義に立っています。「坊主憎けりや袈裟まで憎い」という態度では、再建主義を聖書の光で照らして正しく考察することは出来ないと思います。山谷師が明らかにされたように、再建主義陣営も、フルプレとパーシャルプレに分断されているではないですか。再建主義も聖書を基に考察するのはやはり「不完全な人である」という制約(David Hume; リンク先参照)下にあるのですから、聖書は完全でも、主はご自身を否めない方であっても、み言葉の解釈、適応に於いて人は誤りうる存在なわけですから、 $\alpha \sim \omega$ まで再建主義神学は総てが誤りであるという偏見に立脚して考察するならば、何の実も得ることは出来ない、不毛な論議の掲示板と化してしまうでしょう。むしろ、ルーク師のように、是は是、否は否という態度で、虚心坦懐に富井氏の主張に耳を傾け、その是非を聖書で議論していく態度が要求されるのではないのでしょうか？

さて、最近富井氏が、氏の掲示板に於いて、小さな国家、利権が蝕まない福祉を主張していますが、福祉の現場を垣間見ている私からすれば、その点に関しては、彼の主張に納得できるのです。私が納めている税金、保険料800万が、200万ですめば、残りの600万円は、少なくとも、お水のお姉ちゃんの成れの果てには回しません。しかるべきところに回します。キリスト者の良心が、最大限発揮できるお金の使い方が出来ると思います。その点に於いても、富井氏の主張はアーメンと言えます。

<http://www.utm.edu/research/iep/h/humelife.htm>

□1143 Luke氏ホリエモンを斬る

アンチヒルズ族 - 2006/01/17 21:50 -

落ちたホリエモン New!

勝ち組負け組の話をしていたら、この事件です。彼についてはここでも苦言を呈していたが、やられましたね。ちょっと舞い上がり過ぎたようです。私は彼が「人の心は金で買える」と言った時に神の手を感じました。黙示録のバビロンでは、人の魂すら売買対象とされています。人間の尊厳に対する重大な挑発です。

ちなみに再建主義の富井氏は、これは検察のいいがかりであり、ホリエモンをつぶすなど力説していますね。ここに見かけ上似た国家モデルを持っている私との本質的違いが見えます。面白いことです。

□1142 リバタリアニズムへの代案

[山谷](#) - 2006/01/17 21:44 -

新自由主義／リバタリアニズム社会の到来を目論む「キリスト教再建主義」（セオノミー）に対して、福音の光に照らされて統治する「福音的国家統治」（セオクラシー）の可能性を考え、小論にまとめてみました。ご笑覧くだされば幸いです。

なお、わたしたちの国、日本については、個人の「会計」の明確化、国庫の「会計」の明確化、国庫支出金によって運営されるすべての事業の「会計」の明確化によって、「国庫に入るべき納付金を増やし、国庫から出過ぎている支出金を減らす」ことが、相当程度可能であろうと、小生は考えます。

この場合の、個人の「会計」の明確化とは、源泉徴収制度によって所得を完全に把握されて納税率100パーセントの「給与所得者」だけではなく、確定申告によって納税している、納税率が100パーセントに至っていない自営業者、農業者、株売買によって収益を得ている個人と事業者などなどの「会計」が明確化され、納税率を可能な限り100パーセントに近づけることを意味します。

[小論「福音的国家統治としてのセオクラシー」](#)

□1141 ?さんへ

HN - 2006/01/17 21:21 -

やくざ屋さんのようなものまでは、想定していませんでした。
やくざのような世界は、不労所得があろうがなかろうが、それ自体地獄のような社会です。あの世界に漬かっているだけで既に罰を受けているようなものです。普通の人間が耐えられるような社会ではありません。

私がイメージしていたギリギリ人間とは、どこにでもいるようなのんびりした人です。勉強もさほど優秀ではなく、仕事もなんとかこなしはするが、決して出世するタイプではないといった部類の人間です。要するに非エリートがギリギリ人間です。たとえば、40人学級で、上位10人以外は、みなギリギリ人間ではないでしょうか？ 私も、しかりです。

□1140 ???

??? - 2006/01/17 21:17 -

背中に絵を書いている人やお水のお姉ちゃんは、生活保護受給者の何パーセントぐらいなんで

しょうか？

国の責任としての福祉と企業や、お金持ちが自由意志をもって行う福祉行為とは質が違うのでは？

あまりにも富井氏の説に入れ込みすぎでは？

ここは再建主義について憂慮する立場に達人のための掲示板です。

■1139 HNさんへ

? - 2006/01/17 20:36 -

>キリギリスのような生活をしていた人が野垂れ死にするのを見て、面白いですかね。

あなたのイメージの中にあるキリギリスはどのような人々でしょうか？1133で私が列挙しているのは、背中に絵を描いているような人々や、お水のお姉ちゃんなど、不労所得は、私のような給与所得者よりずっと高級を得ていながら、社会保険料（健康保険料や年金保険料、失業保険料）は一切支払ったことがなく、しかもパチンコ、連日の酒席、贅沢な生活三昧で青壮年期を過ごし、病氣を得て、働けなると、それまでの所得実績がないので、堂々と生活保護や医療保護を受け（月20万円）るような輩のことです。病を切っ掛けとして、

一方、まじめに40年間国民年金を納めた零細商店主は、老後月10万円の年金で、医療費も含めてすべてを賄わなくてはなりません。我国の利権屋に寄生された歪な福祉は、蟻に厳しく、キリギリスに優しいのです。

リンク先の本を購入して、是非、歪な福祉の現実を勉強して下さい。

<http://plaza.rakuten.co.jp/noiznoiz/diary/200510270001/>

■1138 ホリエモンが正義なのか？

HN - 2006/01/17 20:14 -

ライブドアの不正については、捜査が進まないといえませんが。

しかし、富井氏が今の段階から「ホリエモンをつぶすな」などと書くとは、ちょっと軽率。それとも、この程度の経済犯なら律法に適っているということか。富井氏の社会改革論は、マキアベリ主義者のもっとも喜ぶところだろう。彼はそのうち「ダビデもやったことだから・・・ソロモンにも許されていたことだから」などと言って、デタラメを言い始めるかもしれない。それが行動に移るとき、彼は罠にかかる。彼の邪悪な心は、やがてそれにふさわしい実を結ぶことだろう。

■1137 下流社会

HN - 2006/01/17 19:47 -

三浦展著「下流社会」という本が良く売れているそうです。このような本が好んで読まれるご時世だからこそ、富井氏にもある程度のファンがつくのでありましょう。

それはそれとして、最近の富井氏の書き込みは、いったい何なんですか。いわゆる「強者の理論」で生きている私のような者でさえ、「無茶を言うにもほどがある。いい加減にせんかっ！」と怒鳴りたくなるような内容ではありませんか。キリギリスのような生活をしていた人が野垂れ死にするのを見て、面白いですかね。右翼のオッサンでも、ここまでひどいことは言わない。これが「福音」なのですかあ？これで本当にクリスチャンと言えるのか？富井氏は、確かに「主よ、主よ」と言いますが、実際は天国から追い出される類のニセモノだと思います。「悪事を働く者どもよ、行ってしまえ！」

**1136** ルークさんの見解

二宮金次郎 - 2006/01/17 18:23 -

二宮金次郎再考 New!

前に金次郎の徳政にふれたが、リバータリアニズムの長所（自立性）を生かし、その過酷さ（1か0か）を避ける絶妙のバランスを彼は見せたようですね。案外ややこしい政治哲学などではなく、人の情が鍵なのは。

<http://www.kingdomfellowship.com/cgi-bin/blog/index.cgi?no=974>**1135** アイオンの交代について（2）[山谷](#) - 2006/01/17 10:57 -

自由放任主義という「アイオン」の支配のもとでは、大変悲惨な状態が「負け組」の中に生じていました。

ですから、世界管理者としては明らかに失格とみなされて、世界史からの退場を命ぜられることとなったのです。自由放任主義という「アイオン」の退場のためには、第一次世界大戦と欧州各国王室の廃止という「痛み」が伴いました。

自由放任主義という「アイオン」の次に入場して来たのは、マルクス主義という「アイオン」と、ケインズ主義という「アイオン」と、ナチズムという「アイオン」です。

マルクス主義という「アイオン」は、「国家が市場を完全に支配して計画経済を行えばよい。かつ、国家が国営で福祉と医療と社会保障を行えばよい」としました。

ケインズ主義という「アイオン」は、「国家が市場に適切に介入して調整経済を行えばよい。かつ、国家が半官半民の福祉と医療と社会保障を公的資金で運営すればよい」としました。

ナチズムという「アイオン」は、「類人猿よりも劣っている犯罪者、怠け者、社会の脱落者、非生産的人間、ユダヤ人を、地上から抹殺し、優性保護を行って、優秀なアーリア人種のみで構成された社会を建設すればよい」としました。

ナチズムという悪鬼的な「アイオン」を退場させるには、第二次世界大戦という「痛み」が伴いました。主権の天使、位の天使、支配の天使、権威の天使の「戦い」というのは、かくも壮絶なるものなのです。

ナチズムの「アイオン」が退場させられた後は、マルクス主義の「アイオン」と、ケインズ主義の「アイオン」が、地球の東西を分割支配して来たわけです。そして、1990年代に、マルクス主義の「アイオン」の失敗が明らかとなり、世界史から退場させられることとなりました。

「アイオン」の交代の先例を考えれば、そこで「第三次世界大戦」のような「痛み」が伴っても、おかしくはなかったわけですが、世界の人々の平和への祈りと、各国の政治的指導者たちの英知によって、「痛み」は回避されることができました。わたしたちは、神に感謝すべきでありましょう。

そうして、いまや、ケインズ主義の「アイオン」が、「失敗だ」と言われており、新自由主義の「アイオン」が到来すべきだ、と言われているのです。

それは、そのようになるしか、ないのであります。

しかし、新自由主義の「アイオーン」の支配のもとで、万事上手く行くというのは、このアイオーンの潜在的な悪鬼的本質を見落としている、明らかに楽観的過ぎる見方です。

わたしたちは、自由放任主義の「アイオーン」の支配のもとでの、もろもろの悲劇、痛み、矛盾、悪を、もういちど19世紀の社会史からきちんと学びなおすことにより、新自由主義の「アイオーン」の悪鬼化を、防いで行かなければならない「世界史的責務」があると思いますが、どうでしょう？

■1134 アイオーンの交代について（1）

[山谷](#) - 2006/01/17 10:56 -

マルクス主義という「アイオーン」とケインズ主義という「アイオーン」が、世界管理者の任務に失敗したので、世界史の舞台から退場を命ぜられ、いまや次の「アイオーン」が入場しつつあるわけです。

新自由主義という「アイオーン」が、いまの時点で圧倒的に有力なようです。

この「アイオーン」の到来を積極的に後押ししているのが、聖書律法に基づく主張されている「キリスト教再建主義」であり、社会ダーウィン主義に基づくとされている「リバータリアニズム」であるわけです。

キリスト教再建主義とリバータリアニズムは、その描く社会構想が同一なので、「再建主義／リバータリアニズム」と、ひとくくりにして捉えることが適当であります。

「再建主義／リバータリアニズム」の主張は、（1）国家は犯罪者を処罰する警察国家であればよい。（2）国家は福祉と医療と社会保障を行うべきではない。（3）福祉と医療と社会保障は完全に市場原理にゆだねるべきである。（4）市場原理は万能であるゆえに国家はすべての経済規制を撤廃すべきである。・・・というものであります。

さて、新自由主義という「アイオーン」が、このような「再建主義／リバータリアニズム」の路線で登場して来た場合に、ほんとうに、すべてのものごとが、言われているように、上手く行くのでしょうか？

上手く行くかどうかは、新自由主義という「アイオーン」に近似した、自由放任主義という「アイオーン」が支配していた19世紀のイギリスを見れば、わかるでしょう。

自由放任主義という「アイオーン」が支配した19世紀のイギリスでは、（1）国家は犯罪者を公開処刑で罰する夜警国家であり、（2）国家は福祉と医療と社会保障をほとんど行わず、（3）福祉と医療と社会保障は教会が管轄する救貧院と慈善団体だけであり、（4）市場原理は万能であるとみなされ、それゆえ、国家は経済規制をほとんど行いませんでした。

経済規制をほとんど行わなかったために、鉱山会社は四歳の幼児を炭鉱内で働かせることが出来ましたし、薬屋は水銀入りの強壮ドリンクを販売することが出来ましたし、マッチ工場は有毒物質でアゴの骨が溶けた労働者に何の保障も賠償もしなくて済みました。

このような「理想的」な19世紀のイギリスでは、次のような光景が、都市のスラムで見られました。

「読者諸君。バラバラの髪の毛をした恐ろしい目つきで、野獣のような口をした女が、半裸体

を引きずって来て、ふしだらな、なんとも比較し得ないような恐ろしい姿を見、しわがれ声で話す毒々しい言葉を聞き、彼らの言う言葉によってその胸中を察したら、人類の性質が、進化の初期、最も野蛮であった時代にでも、決してこれほどひどくはなかったであろうと思うであろう。彼らは人類とまったく異なっている、あの類人猿ぐらい違っている。彼らは進歩の道にはない。初めから人間ではないのだ。人類の名誉のために、彼らを人間として受け取ることはできない。」

上記は、ハロルド・ベグビーという19世紀のイギリス人が書いた、当時の下層階級の悲惨な生活を描く一文です。

□1133 ?

? - 2006/01/17 08:49 -

再建主義神学的に言えば？w、教会が経済的弱者救済に関して不十分な働きしか出来ないのは、国家に10%以上収奪されているからです。富井師も書いておられますが、国家が個人の所得を吸い上げて再配分を行う場合、『そこには、無駄な手当て、カラ出張、カラ残業...、こういったガラクタのためにパンパンに膨れ上がった歳出...、本当に福祉をやりたいならば、国主導ではだめだ。こんな大雑把な組織に任せると、フジツボのようにびっしりと利権を求める役人や業者がへばりつく。』ということになってしまいます。しかも、アルコール片手にパチンコに明け暮れた「キリギリス」のような輩のなれの果てにも、働けるのに、引籠もりのニートにも、水商売で現役時代は高級を得ていたのに、確信犯的に年金保険料を納めなかった連中も、老齢になって病気になれば「医療保護」「生活保護」が支給されてしまいます。

一方、母子家庭で、母親が一生懸命仕事をして、爪に灯を点すような生活をしている家庭には、国や地方自治体の福祉はお寒いのが現実です。

しかし、私たちが、国家に10%以上収奪されず（私の場合800万円以上収奪されています）、主の御心に従って使用できるならば、教会の弱者救済事業に有意義に捧げることが出来ますし、主が必要と認める人々にそれらのお金が行き届くシステムが出来るはずで、そこに携わるのは、利権を求めてフジツボのようにへばりつく役人や業者ではなく、クリスチャンボランティアです。そうすれば、自分の責任で「キリギリス」として若い日々を過ごした連中（極端な事を言えば、野垂れ死んでも構わない人々）に、無駄なお金が流れることもないでしょう。

年金も、福祉も不十分な時代でも、人々は何とかうまくやってきました。私が理想とするのは、『大草原の小さな家』に見られる、暖かい地域コミュニティです。村の小さな教会を中心とした、地域のキリスト教的良心に支えられた、地域完結型助け合い社会です。目の不自由な方、手足の不自由な方...が、無くてはならない器官として教会の中に存在している、そんな社会も、国家の収奪がなければ可能になると思います。

コリント12章21節～そこで、目が手に向かって、「私はあなたを必要としない。」と言うことはできないし、頭が足に向かって、「私はあなたを必要としない。」言うこともできません。それどころか、からだの中で比較的弱いと見られる器官が、かえってなくてはならないもののなのです。また、私たちは、からだの中で比較的尊くないとみなす器官を、ことさらに尊びます。こうして、私たちの見ばえのしない器官は、ことさらに良いかっこうになりますが、かっこうの良い器官にはその必要がありません。しかし神は、劣ったところをことさらに尊んで、からだをこのように調和させてくださったのです。それは、からだの中に分裂がなく、各部分が互いにいたわり合うためです。もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、もし一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのです。あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとは各器官なのです。

□1130 7年分の総括

ただのおじさん - 2006/01/17 00:58 -

私が思うに、新自由主義（者）の欠陥は弱者の気持ちが分からない、頭がないことです。逆も成り立ちます。

心の中で愚か者と思っているから「愚か者」と口に出るのです。

この2つのことをなぜいきなり私が言ったのか分からない限り、この文章全体も、他の私の文章も誰にも理解されないと考えています。

正直、この場所で勝ち組、負け組、という言葉が出るまで、この言葉を私は意識したことはありませんでした。多分私の辞書の中になかったのでしょう。私は弱者を多く見てきました。当然日頃から弱者のことを意識しています。ですから勝ち組、負け組、という言葉が頭の辞書に載っていないのは何の不思議でもないと考えます。

これからの教会はもっともっと弱者の気持ちが分からなければいけないと思います。なぜなら、現実の牧会の現場では弱者ほど教会に来るからです。そしてその弱者への教会の対応が不十分だからです。それは弱者の気持ちを理解しようとする気持ちがクリスチャンたちに足りないからです。クリスチャンたちが、弱者の気持ちを理解しようと思えば、自ずと人は教会に定着するでしょう。弱者の気持ちを理解することは愛なしではできないからです。そしてその愛こそが私たちが神を信じていない人に示す証だからです。

何かと物質的であれ、精神的であれ、満足を求めて何かをしてもらおうとする世の人々、それは新約聖書の群衆たちがしるしを求めたのと同じです。しかし本当に大事なものは、何かをしてもらうことではなく、その人とともにいてあげることです。そして本当にともにいるべき存在がイエス・キリストなのです。弱者に対して少なくともこの程度のことが理屈でなく心情のレベルで分からなければ弱者の気持ちは分からないのもしょうがないでしょう。この心情のレベルで分かることこそ愛なのですから。

そしてこのことを再建主義者もワグナーの一派も分かっていないのです。

これをまとめとして対外的な発言は減っていくでしょう。
ではこの辺で。

■ 1129 ?

? - 2006/01/16 22:38 -

ただのおじさんへ、

聖書のどのみことばをどのように解釈すれば、「勝ち組負け組み」という言葉は、「クリスチャンが使うべきでない」という結論が出るのでしょうか。是非とも該当する聖書箇所をご提示下さいませんか？

なお「勝ち組負け組み」という言葉はログ1083で既出の言葉です。

■ 1128 世界のキリスト教の二大潮流について

[山谷](#) - 2006/01/16 22:10 -

世界のキリスト教の潮流は、いまや、到来しつつあるリバータリアニズム社会を歓迎する「繁栄の福音を説くメガチャーチ群」か、豊かさの公平な分配と地球環境への配慮を説く「小さき者と共に歩もうとする伝統的教会群」か、この二大潮流に分かれつつあるようです。

ヨーロッパは後者が大勢のようですが、北米では福音派が前者、メインラインが後者に、分かれつつあるようです。このことは、昨年末に、連邦政府が貧困者への給食券支給予算をカットして、企業の設備投資への減税を行ったことに対して、福音派が賛成にまわり、メインラインが反対にまわったことに、象徴的に現れていたように思います。

小生が考えますに、聖書、特に、旧約聖書の詩編と預言書には、政治的統治者の義務としての

貧困者救済が明記されているにもかかわらず、聖書の無誤無謬の権威を信じる建前の福音派が、なぜ、また、どうして、新自由主義／リバータリアニズムに同調的傾向にあるのか、大変理解に苦しみます。詩編と預言書を、読んでいないのではないのか、とすら、思ってしまいます。

北米の福音派の誕生は、プリンストン神学校の保守グループが、1920年代の一般恩恵をめぐる神学論争を原因に、プリンストンを離脱して、独自にウェストミンスター神学校を設立したことをもって始まるとされるわけですが、このウェストミンスター神学校から、かの「キリスト教再建主義」が生み出されたわけでした。

そうして、「キリスト教再建主義」は、1980年代に宗教右派を誕生させて、米国のキリスト教史と政治史に重大な変化をもたらしました。

さらに、「キリスト教再建主義」は、「王国神学／使徒的宗教改革」という、きわめて問題性の高い神学に姿を変えて、今やメガチャーチ群に影響を与え、そのメガチャーチ群は、アメリカの古き良き地域共同体を破壊して、新自由主義／リバータリアニズム社会の到来のために「環境整備」を着々と進めているわけです。

ここまで来ている流れに対して、福音派は、有効な対抗が出来ていないどころか、むしろ、新自由主義／リバータリアニズム社会の到来に迎合的な論調が見られます。

このところ、小生の頭を去来して離れない言葉があります。それは、「福音派は死んだのか？」というものです。

新自由主義に対抗しようとする、世界教会協議会に属する「古き良き時代」の教団教派の諸教会は、来月、ブラジルのポルトアレグレで第9回総会を開催しようとしています。そこでは、新自由主義のグローバリズムに対して「別の選択肢」が提案されようとしています。ポルトアレグレ総会の提案に対して、世界の福音派、そして、北米の福音派が、何らかのレスポンスを求められることになるでありません。

それによって、「繁栄の福音を説くメガチャーチ群」と「小さき者と共に歩もうとする伝統的教会群」という二大潮流は、これまで以上にはっきり分かれることとなるでありません。

問題は、日本の福音派のレスポンスですが、小生が思うに、近年の北米の傾向に対して懐疑的な向きが多い日本の福音派は、ヨーロッパの福音派と共に、どちらかと言えば、「小さき者と共に歩もうとする伝統的教会群」に近いラインへとシフトして行くのではないかと思います。そうしますと、すでに起きている、北米の南部バプテストの教団当局と、日本の南部バプテスト系教会・大学との間の「関係悪化」のような事態が、北米系ミッショナリー・ボードによって誕生した日本の諸教会にも、続いて起きて来る可能性が憂慮されます。日本の福音派にとっては、悩み多き年月が、これから当分続くのではないのでしょうか。

☐ 1127 世間で使われているからと言って

ただのおじさん - 2006/01/16 22:07 -

クリスチャンが口にして良いとは言えません。
それが分からないですか？

☐ 1126 ?

? - 2006/01/16 21:48 -

1125さまへ

1097のリンク先、最下段に【AΩ】というアイコンがあります。

そこをクリックすると、本リンク先（所謂ホームページ）に飛びます。そこに上げられています。
なお、湖の森教会の1年間の『収益』は5500万ドルで、Joel Osteenは、9000万ドルで集会場を建築したそうです。
山谷師へ、ありがとうございました。

<http://www.gospelgrace.com/main.htm>

□1125 1099の偽預言者リストについて教えてください。 こぶた - 2006/01/16 21:26 -

1099のそうそうたるメンバーの偽預言者リストですが、あれの出所はどこなのでしょう
か？
確実に偽預言者といえる根拠などは明らかにされてるのでしょうか・・・？

□1124 ログの削除について [山谷（管理者）](#) - 2006/01/16 21:22 -
「？」さまの要望により、ログNo.1108および1112を削除いたしました。

この削除は、頭首権者キリストに由来する「社会の分散主権」の数あるひとつである「管理者権限」を根拠とし、小生の良心に神の指によって刻印された「衡平」の法感覚に照らした判断に基づいて、行ったものです。

なお、管理者としての小生の判断の是非を論じる投稿は、この掲示板に対しては行なわれませんよう、関係諸氏にお願い申し上げます。このお願いにもかかわらず、判断の是非を論じる投稿が行われた場合には、管理者の独断によって事前事後の通告なく一方的に削除することを申し上げておきます。ただし、このことは、関係諸氏が、ご自分の掲示板なり、ほかの神学掲示板なり、2ちゃんねる掲示板なりに、小生の判断の是非を論じる投稿をされることを、何ら制限するものではありません。なぜなら、ほかの掲示板は、キリスト頭首権に由来する「ほかの分散主権」によって管理されているのであって、何ら小生の関与するところではないからです。

関係諸氏のご理解とご協力を感謝申し上げます。

□1122 ? ? - 2006/01/16 21:02 -

ただのおじさんへ

「勝ち組負け組み」という表現は、既に人口に膾炙した表現です。何がご不満なのですか？それと、あなたの発言を削除依頼する権利が？にないのと同様に、「？の発言削除依頼」を、あなたが「削除しないよう願う権利」はあなたにはありません。

□1121 COPY フジツボ - 2006/01/16 19:45 -

tomii 2006/01/15(日)15:57

格差拡大は批判の理由にならない

(1)

TVに出てくるコメンテーターの反小泉政権の論理は、「所得格差が広がりつつある。社会的弱者に負担を強いる政治になっている。」というものばかりだ。

こんな論理がまかりとおるならば、永遠に日本から不満はなくなる。なぜならば、集団がいれば、かならずそこに格差は生まれるから。

どんなに優秀な（もしくは、優秀ではない）高校でも、テストをすれば必ず、抜群に優秀な生徒と、抜群に劣った生徒が出てくる。

大体の生徒は、正規分布のベル型曲線の真中の平均付近の山の中に入るが、曲線の両端付近に少数の生徒がいる。

現在、日本の貧困者は、世界の中で金持ちの部類に入る。大多数の途上国では、家にテレビがあるだけでも金持ちとみなされる。

相対主義的な批判をしてもはじまらない。

今の政府が間違っているのは、「貧困者に負担を強いて、格差を広げている」点ではない。

格差は避けられない。格差をなくそうとしても永遠に実現しない。

そうではなく、政府が間違っているのは、「貧困者にも富裕者にも同じ税率を適用していない」ということだ。

これは公平の原則にもとる。法のもとにおいて国民は平等のはずではないか？

(2)

政府は、今後の増税の目的は、福祉財源を確保することにある、といっている。

ホントウ？

国民は気付かなければならない。福祉は、増税を正当化するための都合のよい理由だということ。

「今、高齢化が進み、これから福祉を維持するためには、今の歳入ではやっていけません。だから増税が必要です。」と役人や政治家は言う。

国民は、「福祉のためならしょうがないか。」と考えてしまう。

しかし、実際は、この国において福祉国家とは、役人のための福祉の国という意味なのだ。役所では、手当での項目を増やせる人間が「仕事のできる人」とみなされるという。

無駄な手当で、カラ出張、カラ残業...、こういったガラクタのためにパンパンに膨れ上がった歳出にメスを入れずに、なんとか歳出入バランスを保つには、と考えて出た結論が増税なのだ。

本当に福祉をやりたいならば、国主導ではだめだ。こんな大雑把な組織に任せると、フジツボのようにびっしりと利権を求める役人や業者がへばりつく。

福祉であっても、チェック機能が有効に働く市場に任せるべきだ。

「働きたくない者は食べてはならない。」(2テサロニケ3・10)

❑1119 私の発言を私に独断で削除願いしないで下さい ただのおじさん - 2006/01/16 19:21 -
勝ち組、負け組という言い方をしたことが問題なのです。ですからこの言い方をしたことが不適切だったとすればいいだけです。

❑1118 山谷さんへ ただのおじさん - 2006/01/16 19:14 -
1110は絶対に削除しないように願います。1108も1112も残さなければ1110を残す意味がないので削除しないよう願います。
発言を削除することこそ心穏やかでなくなることであるので3つの発言の削除は絶対にしないで下さい。

❑1117 ? ? - 2006/01/16 14:06 -
「中流」というのは、所詮、支配者が被支配者をマインドコントロールするためにマスコミを操作して、植えつけた言葉に過ぎません。少なくとも、本当の勝ち組は上手な節税をして、給料天引きなどというアホらしいシステムから外れたところに存在している筈です。

「人は、たとい全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら、何の得がありましよう。そのいのちを買い戻すのには、人はいったい何を差し出せばよいでしょう。」

この世の富は確かに魅惑的で、サタンは巧妙に私たちの弱いところを攻撃してきます。上を見ればキリがありません。しかし、豊に与えられている人を見て羨むのは愚かな事です。同時に、豊に与えられている人に、そうで無い人が規制するのではなく、また富の分配システムに、フジツボの如く役人が群がるのでもなくw、もてるものが、主から与えられた慈しみの心で、豊に惜しみなく持たざるものに用いていただけるような、心の変革と社会の改革を希望します。

山谷師へ、具体的な金額を書いた事で、心が穏やかで無くなる人が出現したようですので、お手数ですが1108、1112、及び可能ならば他の人の発言ですが1110の削除をお願い致します。削除キーを入れていなかったなので削除できないようです。

□1116 使徒的原則

[山谷](#) - 2006/01/16 13:12 -

もしある人が、あえて誇るなら、小生も聖パウロに倣い、愚か者になって、あえて誇ることにしましょう。（コリント後書11:21）

小生は救世軍士官として第15年目の奉仕をしています。年収は夫婦合わせて200万円台。不動産資産は無し。手取り18万円から月定献金と諸献金合わせて3万円を毎月ささげていますので、家族四人が15万円で生活していることになります。[森永卓郎氏](#)が言う、ニッポンの「負け組」とよぶ「年収300万円時代到来」を、小生は、すでに先取りして長年生活して来たわけですから。その中で、どのようにエンジョイして生きるか、小生は、究めて来ました。ですから、「平民の福音」ならぬ「負け組の福音」を語り得るのは救世軍であろう、と勝手に確信している次第です（笑）

また、小生が責任を持っている教会は、礼拝出席が毎回6人前後で、近い将来の閉鎖も検討されるような、リバイバルならぬ、サバイバルの状況です。メガチャーチの出現によって、軒並み会員流出・閉鎖・会堂売却に直面しているアメリカの地域の中小教会の窮状は、小生にとっては、とても他人事とは思えません。おそらくこのことが、小生の「メガチャーチ批判」「使徒的宗教改革批判」「王国神学批判」の陰にある動機なのかもしれません（笑）

さて、主は、聖パウロに語りかけられたように、小生にも、語りかけられるのです。すなわち、「わたしの恵みは、あなたに対して十分である。わたしの力は、弱いところに完全にあらわれる」と。（コリント後書12:9）

それだから、小生も、聖パウロのごとく、「キリストの力がわたしに宿るように、むしろ、喜んで、自分の弱さを誇ろう」と思うのです。「キリストのためならば、弱さと、侮辱と、危機と、迫害と、行き詰まりとに甘んじよう。なぜなら、わたしが弱い時にこそ、わたしは強い」のだからです。（コリント後書12:10）

しかし、そうは言っても、弱さのただ中にあるときには、「メガチャーチ」の説く「繁栄の福音」は、確かに、大変な魅力をもって聞こえて来ます。毎月15万円ですべての生活を賄うことが出来るのであれば、神様の祝福によって年収2000万円を得たときには、いったい、何にお金を使えばよいのだろう！ あれこれと夢がふくらんで、時がたつのも忘れてしまいます（笑）

しかし、小生は、「メガチャーチ」の「使徒」たちの後についていこうとは思いません。

なぜなら、聖パウロが、コリント前書4:15-16でこう言っているからです。

たといあなたがたに、キリストにある養育掛りが一万人あったとしても、父が多くあるのでは

ない。キリスト・イエスにあって、福音によりあなたがたを生んだのは、わたしなのである。そこで、あなたがたに勧める。わたしにならう者となりなさい。

これを小生にあてはめれば、確かに、ウォッチマン・ニーもキャサリン・クールマンもC. ピーター・ワグナーもジョン・ウィンバーもカルロス・アナコンディアもベニー・ヒンもジョン・アーノットも、小生にとっては、キリストにある大切な養育掛りであったわけです。小生は、彼らのひとりひとりに、心から感謝しています。そして、今もなお、彼らの教えから学ぶべきことが、多くあるのです。しかし、彼らは小生の父ではありません。

むしろ、キリスト・イエスにあって、福音により小生を生んでくれたのは、ビリー・グラハムなのです。（コリント前書4:15）

それゆえ小生は、ビリー・グラハムにならい、ビリー・グラハムが信任して紹介してくれた先である救世軍に、今日まで忠実につらなっているわけです。

「福音によりあなたを生んだのは、だれですか？ 生んでくれたひとに、ならいなさい。それ以外のひとは、たとえどんなにすばらしくても、養育掛りに過ぎません」・・・小生は、これこそが、新約聖書正典に明示された「使徒的原則」だろうと思うのですが、どうも今日の回復された（自称）使徒たちは、「限度をこえて他人の働きを誇る」（コリント後書10:15）という傾向が強いようです。

☐ 1115 ?

? - 2006/01/15 21:53 -

Joel Osteen's false teachingsを糾弾するサイト”パート2です

<http://www.av1611.org/osteen.html>

☐ 1114 ?

? - 2006/01/15 21:47 -

Joel Osteen's false teachingsを糾弾するサイトです

<http://www.iconbusters.com/iconbusters/current/joel.htm>

☐ 1113 ?

? - 2006/01/15 21:40 -

L a k e w o o d教会のHPです

<http://www.lakewood.cc/site/PageServer>

☐ 1111 アイオーンの力を目の前にして

[山谷](#) - 2006/01/15 19:39 -

アイオーンの圧倒的な力を目にすると、ただただ当惑させられるばかりです。しかし、「この世の支配者」（アイオーンのアルコーン）は、十字架によってすでに打破されていることを、おぼえたいと思います（ヨハネ12:31、14:30）。

新しいアイオンが到来しつつあるこの時にあって、わたしたちキリスト者がなすべきことは、次のようなことでありましょう。

「力を捨て、静まって、主を知ること。『小さき者』として『狭い道』を生きるとは、どういうことかを、黙想すること。」

「霊を識別する賜物を祈り求めること。聖霊とアイオーンとストイケイアを見分けること。」

「『これらの最も小さい者にしたのは、すなわち、わたしにしたのである』という主の言葉、『強い者は強くない者の弱さを担え』というローマ15:1の命令の意味を、リバータリアニズム社会の中で、黙想すること。そうして、主の言葉と、ローマ15:1の命令を、自分の生活の全領域で実践すること。」

「『アイオーンとストイケイアは、キリストの十字架によって打破され、キリストの頭首権に従属させられ、キリストの王権的世界支配のエージェントとして奉仕させられている』という、聖書の世界観に、ふみとどまること。」

「キリスト者の世界的連帯において、アイオーンとストイケイアの悪鬼化をたえず監視し、預言者的声を挙げ、必要な場合には非暴力不服従による抵抗を行うこと。」

「国家主義というアイオーンも、ナチズムというアイオーンも、共産主義というアイオーンも、かつては、圧倒的な力を誇っていたとしても、ついには世界史の舞台から退場させられたように、新自由主義というアイオーンも、やがては、退場させられるときが来ると信じ、希望を持つこと。」

主の初臨から数えて第三の千年紀にわたしたちは入っているわけですが、そのはじめにあたり、小生は次のような詩をしたためたことがありました。これが、こんにちのアイオーンの圧倒的な力を目の前にしたときの、小生の祈りの言葉でもあります。

「今日からはじまる、あたらしいミレニアム」

これからの千年
いったいどんなことが、おきるのだろう

きっと

さまざまな王国の興亡があり
さまざまな賢人が難局を開き
さまざまな工房が新奇な発明品を送りだし
さまざまな詩人が新たな古典を紡ぎ
さまざまな軍人が功なり名を上げ
さまざまな帝国が版図を拡大し
さまざまな学者が歴史書に章を書き連ねるだろう

そのなかで

教会は、矛盾をかかえ、弱さをかかえつつも
みずから小さきものとなり
つねに小さきものと共にあり
小さきものと共に歩み
小さきものの痛みと悲しみを担い
破れ口に立って、とりなしの祈りをささげ
神の助けを涙をもって叫び求める

そういう存在であり続けていてほしいけれど

どうか

新しい千年に

教会が力の哲学に幻惑されることがありませんように

兄弟姉妹であるユダヤの民を冷酷に扱うことがありませんように

肌の色の違いや貧富によって礼拝座席を仕切ることがありませんように

異端者を火刑に処すことがありませんように

若者たちを聖戦に送り出すことがありませんように

どうか

新しい千年に

教会が、飼葉桶のそばから離れることなく

自らの力を捨て、静まって、ただ神を求めることが

できますように

□ 1110 ?さんは随分お金持ちですね

ただのおじさん - 2006/01/15 17:33 -

?さんへ。

私の教会へ来てみて下さい。私の教会の会員に年収1900万円なんて人1人もおりませんから。たちまち勝ち組になりますよ。

何タラント儲けたかではなく、自分のタラントをきちんと用いたかが問題なのではないですか？

もしそうではないという意味でこのコメントをしたのであれば、私の教会の教会と教会員に対して、失言をしたことになります。

やっと年収が1900万円なんて、一体何タラント与えられたと考えれば出る台詞でしょうか。

□ 1109 小牧者訓練会もアイオーンが支配していると思います.....

? - 2006/01/15 13:44 -

以前、私の属している教派のいくつかの教会の牧師が、下在昌や尾山令二らの主催する小牧者セミナーに出席して、牧会の視点が変化して、何時の間にか、「信徒は牧師に従え！」となり、最終的に牧師と信徒が対立し、（私たちの教派は会衆制で、牧師の任免は教会総会が決定しますので）何人もの牧師たちが教会を去って逝きました。牧師が去る前に、多くの傷ついた信徒が、教会を去ったのは歴史的事実です。当時は、小牧者セミナーや下在昌等の主張に漠然とした違和感や生理的嫌悪感を感じていましたが、一信徒であった私は、聖書に基づいた検証をすることもなく、彼らの主張を詳しく調べることもありませんでした。

いま、山谷師の考察を通して、彼らにも、やはり特定のアイオーンであったと見る視点が与えられました。ルーク師も仰ってる通り、「罫は非常に巧妙に仕掛けられています。『リバイバル音頭』のニッポンキリスト教の節穴的眼ではまず見抜けられないでしょう。ずっぽりハマリ、はまっていることにすら気がつかないでしょう」「時代（アイオーン）を見抜く眼」を日々のデボーションにおける御言葉の学びを通して、確実に自分のものとし、且つ、教会員一人一人が、共通の土台（＝聖書）に立つ必要を、強く感じさせられました。

<http://agape-tls.com/ministry/kunrenkai.html>

■1107 言いたいことは山ほどあるけれど・・・ ただのおじさん - 2006/01/14 23:10 -

私の教会はここ数年、信徒の成長のため明確な目標を立てて集会を行っています。
まずこの数年、そして今も目標として立てているのが、クリスチャンなのだから聖書に徹底的にこだわろう、ということです。
聖書翻訳の歴史に始まって、聖書の教理の学び、そして聖書緒論&聖書概観の学びと数年に渡って続けていますし、聖書通読は教会を挙げて行っています。
更にこの上に、礼拝の意義の再確認と充実した礼拝をささげること、更に今年はそれに賛美の意義の再確認と充実した賛美をささげることが目標に掲げました。
その観点から見てメガチャーチの、聖霊派の礼拝や賛美は本当に礼拝や賛美と呼ぶに疑問を持ちます。
聖書の教えを蔑ろにして人に媚び、サロンかコンサートのような集会を開いて、これが真の信仰者の礼拝の、伝道のありようでしょうか？
そしてその結果、教会に人が集まったとして、聖書の教えを蔑ろにした人たちが真の信仰を保ち続けることができるのでしょうか？
そして何より、このようなことが神様が喜ばれる、神様に栄光を帰す行為なののでしょうか？
とても、とっても疑問です。

「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」（ローマ人への手紙12章1～2節）・新改訳聖書

■1106 これは面白い 学び人 - 2006/01/14 22:18 -

ルーク師もほとんど同じ様なことを言っていますね。

■1105 新自由主義という「アイオーン」（2） [山谷](#) - 2006/01/14 21:58 -

新自由主義の「アイオーン」は、アメリカでは、リバータリアニズム社会+メガチャーチというコンビネーションを作ろうとしているわけですが、先のログで述べましたように、日本にはメガチャーチのようなものは存在しません。そうしますと、リバータリアニズム社会の重圧によって個人が自滅してしまうことがないよう、個人をつなぎとめ、保護する、「ストイケーア」の働きが、新たなかたちで、しかも、これまでになく大きな規模で、出て来なければならないことになります。

もしかしたら、かつての創価学会や立正佼成会のような巨大教団が新たに出現して、崩壊した共同体に代わる新しい「共同体」として機能することになるのかもしれませんが。

あるいは、アトム化した個人に超越的な「意味」を与える機能を、アニメなどのポップカルチャーが担わせられることになるのかもしれませんが。かつての「新世紀エヴァンゲリオン」のような、自己・他者・超越・世界・意味をテーマにした新たなアニメがヒットして、疑似宗教として機能することもあり得るでしょう。

そうでなければ、メガチャーチの代わりに、「国家共同体」が、アトム化した個人をつなぎとめて、生きる「意味」を与えることになるであります。

わたしたちは、この国において、国家主義の諸霊による支配を過去に経験したわけですが、そ

の時には、国旗・国歌・神社が、国家共同体のシンボルとして、非常に効果的に使われたのを見たのでした。現憲法下においても、すでに、公教育の場において、国旗と国歌が「踏み絵」として使われ始めています。わたしたちは、この60年間というもの、日の丸と君が代が「踏み絵」として使われるような光景をついぞ目にしたことがなかったのですが、ここ何年かで急激に空気が変わって来ました。それは、今上天皇からすら「やはり強制ということでないことが望ましい」という心配の御言葉が発せられるほどの、急激な変化でありました。ここにも、「アイオーン」のもうひとつの“しるし”を見ることが出来るでありましょう。

わたしたちは、共産主義という「アイオーン」が世界管理者としての任務に失敗して、世界史の舞台から退場させられるのに、80年ほどかかったのを見ています。新自由主義という新たな「アイオーン」が、アメリカで、そして、日本で、果たして成功するのか、失敗するのか。結果が出るには、やはりこの先80年ほどかかるのかもしれませんが。

教会は、新たに到来しつつある「アイオーン」に対して、積極的に軍門に下るのか、受動的に迎合するのか、本質を失わずに柔軟に適應するのか、是々非々で行くのか、別世界で無関心に生きるのか、預言者として監視するのか、それぞれで、いろいろに、対応が分かれて来ることになるでありましょう。

□1104 新自由主義という「アイオーン」（1）

[山谷](#) - 2006/01/14 21:57 -

アメリカは、日本も新自由主義に行くよう、年次要望書を通して要求して来ているわけです。これに応えるかたちで、郵政民営化法案が先日成立するに至った、とすることができます。ここに、「アイオーン」（時代）の“しるし”を見ることができると思います。

日本がさらに新自由主義に進むには、行財政改革を行って、「小さな政府」を実現して行かなければなりません。

今後、公的福祉と公的医療が縮小され、最終的には完全民営化されることになるでありましょう。今はいろいろと分かれている公的年金制度も、一旦整理して一本化した上で、民営化に移行する可能性が大きいと思います。

政府を小さくするためにもうひとつ重要なのが、政府が使えるお金の総量を憲法で規制することです。明治天皇の御世から今日まで、日本は大量に国債を発行することによって、事実上政府が際限なくお金を使える仕組みを続けて来ました。今議論されている憲法改正試案では、「財政均衡」を国家に義務づける条文を盛り込む動きが「静かに」進んでいるようです。小生が思うに、九条問題のケンケンガクガクの議論というのは、「財政均衡条項」をすんなり通してしまうための「煙幕」なのではないでしょうか？

「財政均衡条項」が憲法に盛り込まれることによって、政府は確かに小さくなりますが、それは、政府の縮小に比例して個人の「自己責任」が増大することを意味しています。これまでは福祉国家が、国民をそれこそ揺りカゴから墓場まで面倒みてくれていたわけです。まさしく「一般恩恵」だと思います。しかし、憲法に財政均衡条項を盛り込むということは、もはや「福祉国家を止める」という明白な宣言にほかなりません。

これまでの憲法下では、わたしたち国民は、生存に窮すれば、国民の「権利」として、公的福祉を受けることが出来たわけです。

新しい憲法下では、わたしたちは、民間の福祉と契約を結び、相当の対価を支払ってサービスを利用する、ということになるでありましょう。すでにして、現憲法下の福祉制度においても、「利用契約」の明確化や、「サービス」という言葉への言い換えが進められて来ていま

す。

これは、事実上の「権利概念の縮小」と言ってもよいわけです。しかし、権利概念が縮小されては、国民は怒ります。それはどうしても避けなければなりませんので、「権利概念が事実上縮小されているにもかかわらず、そうは見えないようにする工夫」として「個人情報保護法」が引き出されて来たのでありましょう。いまやメディアも企業も、個人情報の漏洩に細心の注意を払っています。一見すると、これにより国民の権利概念は拡大強化されたかのように見えます。この「煙幕」を思いついた人は凄いと思いますが、小生としては、そこに人間の知恵を超えた、天使的知恵の照明があるように思えてなりません。ここにも、「アイオーン」のもうひとつの“しるし”を見ることができるとありましょう。

■1103 メガチャーチというトレンド（4）

山谷 - 2006/01/14 16:59 -

もし、ワグナーのトレンド分析が正しかった場合、そうして、ワグナーの提唱する再建主義の亜流のパラダイムが、メガチャーチの「使徒」たちの大多数によって、正当なものとして受け入れられた場合、これはまったく悪夢ですけれども、「今後メガチャーチは、再建主義の政治的アジェンダを実現するために、投票行動を行う」ということになります。

つまり、ワグナーのトレンド分析が正しければ、今後アメリカは間違いなく、リバータリアニズム／新自由主義の路線を進んで行く、ということになります。そしてこのことは、アメリカと強い結びつきを持っているわたしたちの国、日本にも、多大な影響をもたらすでしょう。つまり、わたしたちの国もまた、望むと望まないにかかわらず、アメリカと共に、リバータリアニズム／新自由主義の路線へ引きずり込まれて行くであろう、ということになります。

社会ダーウィン主義的な生存競争によって、人々が「勝ち組」と「負け組」にはっきり分けられてしまうリバータリアニズム社会においては、アトム化したバラバラの個人が、とてつもない重圧にさらされることとなります。

アメリカの場合には、そうしたバラバラの個人をつなぎとめて「意味」を与えてくれる「メガチャーチ」がありますから、救いがあります。

しかし、アメリカを模倣して日本がリバータリアニズム社会につき進んで行った場合には、いったい、どうなってしまうのでしょうか。アメリカと同様、日本においても、すでに、地域共同体は崩壊しています。地域共同体の代替物であった「会社」も、いまや、能力主義の導入によって、共同体としての機能は喪失しています。もちろん、日本には、アメリカのようなメガチャーチは、ありません。そうしますと、バラバラの個人は、むきだしの裸の状態で、寒風の中に放り出されることとなります。そうなりますと、日本では、メガチャーチの代わりに、「国家共同体」が前面に登場して、バラバラの個人に生きる「意味」を提供するという道しか、残されていないように思われます。

■1102 メガチャーチというトレンド（3）

山谷 - 2006/01/14 16:58 -

さて、問題は、この先です。

メガチャーチがアメリカの新しい「共同体」となったとき、メガチャーチをリードする「使徒」の政治的見解が、共同体メンバーの投票行動に決定的影響力を持つようになる、ということです。

ビリー・グラハムが活動した50年代から80年代を通じて、グラハムは細心の注意を払って「政教分離」のスタンスを取って来ました。もちろん大統領宣誓式で祈祷したり、大統領に対する

牧会的カウンセリングをしたりということ、グラハムは行って来ました。しかし、グラハムは、そうした機会を利用して政治に影響を与えることは決してなかったのです。それはまた、北米の福音派の大部分も同様でした。福音派も政教分離の立場、あるいは、政治への無関心の立場を取って来たのであり、政治活動や政治的発言を積極的に行って来たのは、主流派（メインライン）のリベラル派であったのです。

ところが、80年代のレーガン政権登場に際して、「福音派の変質」とでも呼ぶべき事態が起きたのです。宗教右派の登場です。

宗教右派の登場の背後には、ラッシュドゥーニーが設立した再建主義シンクタンク「カルケドン」の活動があった、とゲイリー・ノースは回顧しています。

再建主義は、「地を支配せよ」を理論の中核として、現代国家に「聖書律法」を適用することを目指す「再建主義アジェンダ」を掲げ、福音派に対して政治的行動への門を開きました。こうして、それまで政治に無関心であった福音派の中から、確固とした信念を持って一貫した投票行動を行う「宗教右派」の層が生まれて来たのです。

上述したように、アメリカでは、地域の中小の教会の消滅に伴い、古き良き共同体が崩壊し、いまや、メガチャーチがそれに代わる「共同体」として出現して来ています。そうして、メガチャーチのトレンドをリードする（と称する）ワグナーの「使徒円卓会議」は、ワグナーが提唱する「王国現在論／使徒的宗教改革」のラインで動いているわけです。この「王国現在論／使徒的宗教改革」は、これまでこの掲示板で見て来たように、再建主義の亜流としての内容を持っているわけです。

ブッシュ大統領が再選を果たした前回の選挙では、勢力がほぼ拮抗していた民主党と共和党の対決構図の中で、キャスティングボードを握っていたのが、「宗教右派」でありました。そして、この宗教右派から投じられた票の相当な部分が、「メガチャーチ票」であった、と言われています。

現代アメリカの新しい「共同体」であるメガチャーチの莫大な数の会員がどのような投票行動をするかは、メガチャーチをリードする「使徒」の政治的見解によって左右されるわけですから、ある意味で、ブッシュ再選を可能にしたのは、「メガチャーチ」であり、さらにまた、「使徒」である、といっても過言ではないでしょう。

■1101 メガチャーチというトレンド（2）

[山谷](#) - 2006/01/14 16:57 -

ビリー・グラハムは、決して自分を「使徒」とは称しませんでしたし、各地のクルセードで多数の回心者を得ても、自分のリーダーシップを各地の教会の上に及ぼそうとは夢にもしませんでした。グラハムはあくまで、地域の中小の教会に仕えることを、自分の働きの分限としていたのです。ですから、カトリックやギリシャ正教が主流の土地でクルセードを開催する場合は、グラハムはカトリックにも正教会にも大きな敬意と配慮を払っています。もっともこのことが、一部の狭量なファンダメンタリストによるグラハム批判の原因となってしまったのです。

これに対してメガチャーチは、最新のマーケティング手法を用いて、徹底して消費者ニードに応える、情け容赦のない（ある神学者の表現によれば、「露骨な」）伝道を展開します。広大な駐車場、映画館並みの高級座席、マルチメディア機器を完備した巨大礼拝堂、プロ水準の演奏技術を持つワーシップバンド、各種ショップ、レストラン、ゲームセンター、遊園地、託児サービス、自己実現や人間関係や夫婦生活や教育問題や依存症などあらゆるニードに応える「セミナー」「セラピー」「コース」「セル」の提供。こむずかしい神学を徹底して排除し

た、日々の生活に便利に使える「TIPS」を提供することだけに特化した説教。それはまるで、ディズニーランドのようだ、と、よく評されます。

このようなメガチャーチの出現によって、地域の中小の教会は、教会員の流出に直面し、教勢低下、閉鎖、教会堂売却へ追い込まれています。北米では毎年4000近くの中小の教会が閉鎖されている状況です。売りに出された教会堂は、メガチャーチが豊富な資金を使って購入し、フランチャイズ化されることになります。

結果として、開拓時代以来、地域の中小の教会を核として形成されてきた古き良き「共同体」が、根本から破壊されることとなりました。地元の商店などは、巨大ショッピングモールの出現ですでに衰退していたものの、教会を核としたコミュニティは、それでも細々と存続していたのです。しかし90年代以降のメガチャーチの出現によって、残存していた最後のコミュニティの「根っこ」が破壊されてしまいました。今後アメリカでは「メガチャーチ」が、アトム化したバラバラの個人をつなぎとめて「意味」を与えることのできる「共同体」としての役割を、ひとりで担うこととなるのでありましょう。

■1100 メガチャーチというトレンド（1）

山谷 - 2006/01/14 16:56 -

ご紹介くださった写真、すばらしい光景ですね！ 1980年のビリー・グラハム後楽園クルセードで回心した小生としては、大会衆が集まる礼拝は、根本的に好きなのです。写真を眺めながら、グラハム・クルセードとメガチャーチの違いは何なのかを、考えさせられました。

クルセードの場合、地域の教団教派の中小教会が協力して開催し、伝道の実として得た回心者は地域の教会に紹介される、というシステムでした。小生も当時中学二年でしたが、自宅の近所の救世軍を事務局を介して紹介されて通い始め、今日に至っています。今思うと、もし近所の教会が長老教会だったら、今の小生は長老教会の牧師かもしれない。もし近所の教会がバプテスト教会だったら、今はバプテストの牧師かもしれない。不思議な感じがします。結局、クルセードというのは、地域の教会の「協力伝道」という性格が本質であると思います。最近すっかり耳にしなくなった言葉ですが、「教会に仕える」という働きであったわけですね。

しかし、80年代半ばから、聖霊の第三の波の運動が起こって来ました。小生もワグナーの『聖霊の第三の波』を読んで夢中になり、カルロス・アナコンディアの聖会にも通ったりして、自分でも異言で祈るようになりました。異言は現在も続けています。

不幸なことに、聖霊の第三の波の運動は、福音派に分裂を生むこととなってしまいました。結果として、追い出された側、あるいは、出て行った側の意識として、「教団教派への批判」が強くなったと思います。小生が北海道で伝道していた頃、トロント・ブレッシングが始まったばかりで、小生も非常な関心を持ち、ミニストリーのテープを購入してよく聞いたものです。テープの中に、教団教派に所属している牧師のあかしが出て来たのですが、どのひとも自嘲気味に「教団教派の教会から来ました」と自己紹介しますと、会衆から失笑が漏れるのです。90年代前半には、その失笑に象徴される、「教団教派は、聖霊の働きに対する妨害物」という意識が、聖霊の第三の波の中にいる人たちに広がっていたように思います。

90年代後半になりますと、ワグナーは「ポスト・モダン」にひっかけて「ポスト教団教派」を宣言しました。これは、「教団教派への批判」を通り越して、もはや「教団教派は終焉した」と見なすことにほかなりません。ワグナーがそうした判断を下したのは、実際のところ北米のメガチャーチのほとんどが、非教団教派の、伝統的神学に対するコミットメントを欠いた、実践神学至上主義の教会ばかりであったからです。ワグナーは教会成長学者ですから、当然「最も成長している教会が良い教会である」（黒い猫でも白い猫でも鼠を捕る猫が良い猫だ）とい

う目でしか観察しません。メガチャーチの大部分が非教団教派の教会であって、かつ、メガチャーチが世界宣教のトレンドを決定するのだと考えるのであれば、ワグナーが言う「教団教派は終焉した」という宣言は、けして間違っているわけではないことになります。

しかし、「ポスト教団教派」という言葉は、教団教派の教会から反発を食らうこととなりました。そこで、ワグナーはこれを「第二の宗教改革」あるいは「使徒的宗教改革」と呼び変えることとしたのです。

この時期にワグナーはフラー神学校を辞して、独自の世界宣教センターを設立しました。そして、教団教派終焉後の「新時代」をリードする新体制を構築する仕事に着手したのです。ワグナーの考えによれば、「新時代」においては使徒と預言者の務めが回復され、教会は使徒と預言者のリーダーシップに服することによって、爆発的教会成長を経験することが出来る、というものでした。そして、「だれが使徒か？」という問題については、ワグナーは「自分の経験で言うと、礼拝出席700人以上の教会の牧師が、その都市の使徒である場合が多い」というのです。そうなりますと、礼拝出席3千人以上の「メガチャーチ」の牧師は、使徒の中の使徒、大使徒ということになります。実際ワグナーは、世界のメガチャーチの牧師たちを集めて、「使徒円卓会議」を開催しています。この円卓会議に集まった使徒たちが、「新時代」における世界宣教のトレンドを決定し、指導する、というふれこみです。

こうなりますと、グラハム・クルセードとメガチャーチは、まったく異質なものである、と感じざるを得ません。

■ 1099 笑いました ？？ - 2006/01/14 14:16 -

1098のリンク先の山本さんの表情とパフォーマンスって、千人、三千人教会を目指している牧師センセイたちみたいって思ったのは僕だけかな、、、

たまには、ここでもこういった一発芸もいいかなと、、、

1097のリンク先の偽預言者リスト見たら、すごいですね、今の聖霊派のスーパースターがゾロゾロと。

Charles Fox Parham 1873 - 1929
& Topeka Bible School
Aimee Semple McPherson 1890 - 1944 &
International Church Of The Foursquare Gospel
William Branham 1909 - 1965
Kathryn Kuhlman 1907 - 1976
Demos Shakarian 1913 - 1993
& Full Gospel Businessmens Fellowship
Jimmy Swaggart 1935- ?
John Wimber 1934 - 1997
& Vineyard Fellowship
David Mainse
& Crossroads Communications
Chuck Smith 1927 - ?
& Calvary Chapel
Paul Crouch 1934 - ? & Jan Crouch
- Trinity Broadcasting Network
Pat Robertson & 700 Club

John Arnott
& Toronto Airport Fellowship
Rodney Howard Browne
& Revival Ministries International
Jim Bakker 1940 - ?
Rex Humbard 1919 - ?

□ 1098 ?

山本直純 - 2006/01/14 13:43 -

「大きいことはいいことだ」という昔のキャッチコピーを思い出します。私は、ピーターワグナーの教会成長論には憑いて逝けません。

<http://www31.ocn.ne.jp/~goodold60net/yell.htm>

□ 1097 ?

? - 2006/01/14 13:39 -



毎週2万人が礼拝を捧げている大規模教会を皮肉った記事です。

<http://www.gospelgrace.com/mcChurch/McChurch.html>

□ 1096 ?

? - 2006/01/14 12:15 -

ありましたね。
確か、コバルト爆弾かなんかを
人類の子孫たちが崇拝しているような場面でしたね ^▽^

□ 1095 ??

?? - 2006/01/14 11:46 -

ありがとうございました。見ました、スライド。Age of MegaChurchですか（感動の滝汗）。しかし、何ですね、これを見てふと感じたのは、チャールトン・ヘストンの『猿の惑星』シリーズで、こんな場面ありませんでした？

□ 1094 ?

? - 2006/01/14 11:10 -

参照HPのURLの写真をクリックすると
他のアメリカのメガチャーチの写真と解説を
次々に閲覧出来ます。

■1093 >>1092

Lakewood Churchです - 2006/01/14 11:07 -

16000人以上の人々が同時に礼拝できる
ヒューストンにあるLakewood教会です。

<http://www.slate.com/id/2127615/slideshow/2127739/fs/0/entry/2127729/>

■1092 ??

?? - 2006/01/14 10:07 -

この壮大な光景はどこなんでしょうか？

■1091 ?

? - 2006/01/13 23:09 -

アメリカのメガチャーチ？逝っちゃってますね！

■1090 米国のメガチャーチ（3）

[山谷](#) - 2006/01/13 10:41 -

カール・マルクスは、19世紀に、「共産主義という亡霊が放浪している」と言いました。

わたしたちは、この21世紀に、「新自由主義という亡霊が放浪している」と言うべきでありましょう。

共産主義にせよ、新自由主義にせよ、これは、「この世を支配する諸霊」（ストイケイア）であるわけです。

20世紀の「時代」（アイオン）が、いま、まさに、21世紀という次の「時代」（アイオン）に、とって代られようとしている。それが、いま、という時なのでありましょう。アイオンもまた、諸霊なのです。

わたしたちは、新たな「主権の天使」が、国家と社会の領域はおろか、教会の領域にまで力を及ぼして来つつある「いま」という転換期にあたって、祈りつつ世界を注視しなければならないと思います。そうして、「キリストにあって、ストイケイアの支配から解放されている生き方」とは、どんなライフスタイルであるのかを、ひとりひとり、静かに考えなければならないのだらうと思います。

■1089 米国のメガチャーチ（2）

[山谷](#) - 2006/01/13 10:29 -

メガチャーチの中で最先端を走っているサドルバック教会は、「パーパス・ドリブンな生き方」（登録商標）を提唱していることで知られていますが、その指導者リック・ウォレン師は最近、「第二の宗教改革」を宣言しました。これは、今後の「トレンド」をメガチャーチが決定し、メガチャーチを核とする世界的ネットワークが形成され、これにより、古い組織神学が新しい実践神学にとって代られ、守旧的な教会と国家のリーダーシップが更新され、さらに、社会福祉と医療と途上国開発の領域にメガチャーチ・ネットワークが進出するという、壮大な構想です。

この「第二の宗教改革」という「トレンド」を、教会成長学者の眼で分析して、新しい神学的

構想で描き出したのが、C. ピーター・ワグナーの「王国現在論／使徒的宗教改革」でありましょう。「リック・ウォレンのメガチャーチ運動イコール王国現在論／使徒的宗教改革」というわけでは決してありません。しかし、リック・ウォレンのメガチャーチ運動に代表される「トレンド」を分析して、新しいモデルを作り、「これでどうだ？」と提案して来ているのが、「王国現在論／使徒的宗教改革」であるわけです。

再建主義の亜流である「王国現在論／使徒的宗教改革」は、当然ながら、「国家の規模縮小」という、リバータリアニズムの「小さな政府論／夜警国家論」につながる論点を持っています。これが、今後のメガチャーチ・トレンドを通じて福音派のキリスト者の政治目標に具体化した場合には、次のアジェンダになります。すなわち

- (1) 連邦政府は、公的福祉と公的医療の社会保障制度を段階的に縮小する。
- (2) それにより、連邦政府の規模を大幅に縮小して、富裕層への大規模減税を実施する。
- (3) 富裕層は、大幅に増加した余剰所得を、教会系諸団体が運営する福祉と医療に献金する。
- (4) 最終的に、福祉と医療は完全に教会系諸団体による運営に移行し、連邦政府は夜警国家とする。

これは、再建主義本流が描く構想と同じであるわけですが、このような「リバータリアニズム社会」を良しとする考え方は、今後のメガチャーチが決定する「トレンド」の進み方次第では、アメリカの福音派に相当の影響力を及ぼすことになる、と予想されます。

現に昨年末、連邦政府が貧困者への給食券支給予算をカットして、企業法人の設備投資への減税を実施した時には、メインラインのキリスト者は抗議しましたが、福音派のキリスト者からは、むしろ、肯定的意見が多かったのです。福音派シンクタンクのアナリストの一人は、「連邦政府は福祉と医療の分野から引くべきだ。連邦政府が人を救うことが出来ない事実は、ハリケーン・カトリーナの災害に際して連邦緊急事態庁(FEMA)が無力であったことで実証済みだ。福祉と医療は教会系諸団体がやればよい」とのコメントを出しています。

☐ 1088 米国のメガチャーチ (1)

[山谷](#) - 2006/01/13 10:29 -

C. ピーター・ワグナーは80年代から教会成長学者として、マーケティング的手法を使ってメガチャーチを評価分析し、「成功モデル」を導き出し、それによって発見した「教会成長原理」を用いて教会コンサルティング業務を行って、成功を収めて来ました。

いまアメリカでは、モール（巨大ショッピングセンター）のようなメガチャーチが次々に建設され、不動産業・建設業の活況を招いています。広大な駐車場、映画館並の高級座席、マルチメディアの礼拝システムを完備した巨大礼拝堂はおろか、各種ショップ、託児所、レストラン、ゲームセンターまで揃えたメガチャーチが出現しています。

これは、「消費者としての『信者』のニーズに徹底的に応える」という「新実践神学」がもたらした、大いなる成功です。

アメリカのキリスト者の多数は、教団教派への忠誠、伝統的神学への服従、所属する共同体への愛着を、もはや重視しなくなっています。重視するのは「自分のニーズ」なのです。そうしますと、自分のニーズを満たしてくれるメガチャーチに、何のためらいもなく移ってしまう、ということになります。

実際メガチャーチの出現に伴って、地域の教団教派の中小教会は、会員流出に直面し、教勢低下・閉鎖・教会堂売却を余儀なくされています。地域に残るのは、「自分のニーズ」の充足を

犠牲にしても、伝統的神学や教団教派への「こだわり」を大切にしようとする、少数の高齢者たちから成る小教会だけという状況も、見られます。

メガチャーチの「実践神学的大勝利」はマニュアル化されて、世界各地の地域教会へ販売供給されています。成功例を積極的に取り入れて、自らもメガチャーチ化を目指す諸教会は、メガチャーチに指導監督される「グローバル・ネットワーク」へ加わって来ています。これは、市場原理に基づいたフランチャイズ・チェーンの教会成長版といったところでしょうか？

そうしたネットワークに加わった教会にとって、もはや旧来の教団教派の伝統的神学は、優先順位としてはるか下方へ押しやられています。成長という果実をもたらさない古い神学より、とにかく成長をもたらす「新しい実践」が重要だ、という考え方です。ここで小生は、「黒いネコでも白いネコでも、ねずみをとるネコが良いネコだ」という小平の名言を思い出します。いまや神学すら、経済学的観点で評価される「時代」となっているのでありましょう。

■1087 Thus Says The Lord

Prophet - 2006/01/13 08:00 -

>1082

ただで受けたのだからただで与えなさい。そうすれば人々は再建主義者のふところにも押し入れ、ゆすり入れしてくれ、溢れるほどになるであろう。

■1086 1082(債権主義者さん)

HN - 2006/01/13 01:25 -

いや、もう、ほんと、滅茶苦茶ですわ。

再建主義者は、一般のクリスチャンと喧嘩するためにだけ存在しているかのようです。非キリスト教徒は、再建主義の話にはバカバカしくて何の興味も示さないだろうから、再建主義者は、クリスチャンを挑発して楽しむしかないのですね。

右翼団体の中でも特に人気のない団体の長が、街宣車でドンキホーテみたいに吼えている。それと同じですね。

■1085 神学の書き換えで済む感じじゃないね

ただのおじさん - 2006/01/12 20:06 -

>メガチャーチによる実践神学の書き換えから、組織神学の書き換えへ

神学の書き換えなら良いけど、どうも私には聖書自体を書き換えへ行くんじゃないかと山谷さんの文章を読んでいて思いました。

それを止める歯止めが内部にないように思えるからです。

そうしたら、全キリスト教徒の問題になりますね。

■1084 聖霊派について (2)

[山谷](#) - 2006/01/10 13:40 -

2. カバーリングの重要性から、使徒と預言者の権威の強調へ

聖霊派が簡単に「教団教派否定」を言えてしまえるのは、聖霊体験をした人の中のかかなりの割合が、教団教派の「異言コード」にひっかかって、教団教派から除籍なり排斥なりの処分を受けて、単立カリスマに移行せざるを得なかったという、「カリスマ・トラウマ」を抱えていることがあります。この場合、言われやすいことは、「教団教派は、聖霊に反している」という言葉です。ここから一歩か二歩進んで、「教団教派は背教のバビロンである」と言うようになるには、実に簡単な道のりです。

そのようにして、「ポスト教団教派」の道を歩む単立カリスマは、教会の制度化を嫌い、「単立教会」としての在り方を選ぶか、「ゆるやかなカバーリング機構」を選ぶ傾向を持つことになります。

聖霊派の中で、カバーリングの重要性については、いまや、不可欠のものと考えられるようになってきました。なぜなら、ロゴス（御言葉＋神学）を重視せず、レーマ（御言葉＋預言）を重視してきた単立カリスマは、これまでに、「吟味されざる預言」と「監督されざる権威」の濫用によって、さまざまな教理的逸脱、実践的逸脱を経験して来たからです。

ですから、教団教派に代る新たなカバーリングの必要性・重要性については、聖霊派では、だれも異議がないでしょう。問題は、カバーリングの「キーパーソン」は誰か？ということになります。

90年代中ごろから、聖霊派の中で、カバーリングのキーパーソンは、「使徒と預言者」である、という考え方と、「メガチャーチの牧師」である、という考え方が、台頭して来ました。そうして、この二つのアイデアを合体させた上で、再建主義のパラダイムを導入してみせたのが、C・ピーター・ワグナーの「王国現在論／使徒的宗教改革」であったわけです。

この「使徒的宗教改革」が、もうひとつのウォッチングポイントです。つまり、「本当のキリスト者は、教団教派を出て、回復された使徒と預言者の権威に服しなさい。単立のキリスト教会は、回復された使徒と預言者のカバーリングの下に入りなさい」という呼びかけが、どう出て来るかを、注視して行かなければなりません。

3. メガチャーチによる実践神学の書き換えから、組織神学の書き換えへ

ワグナーが、使徒と預言者とメガチャーチを合体させた上で再建主義を導入した「王国現在論／使徒的宗教改革」は、しかし、伝統的キリスト教神学による「吟味」を経れば、とてもとても、耐えられないような脆弱な点を、多数抱えています。

しかし、伝統的神学の側からの批判を受け入れて「自己修正」するよりは、むしろ、メガチャーチの「実践神学的大勝利」の勢いにのって、教団教派を否定し、さらには、伝統的神学を否定し、さらには、組織神学をも実践神学的勝利の事実によって、書き換えてしまおう、という傾向が如実に見られます。

それが顕著に出ているのが、黙示録における「多数者によって構成される男の子」(Many Members Man Child)の解釈でありましょう。これは、伝統的神学の側から見れば、「王国神学／使徒的宗教改革」の最大のアキレス腱ですが、逆に、使徒的宗教改革の側からすれば、この解釈を根拠にしてこそ、回復された使徒と預言者が、教団教派を廃止し、世界教会を設立し、教会の「霊的領域」はおろか、世俗の「政治的領域」をも支配することが、可能となるのです。ここもウォッチングポイントです。

■1083 聖霊派について（1）

[山谷](#) - 2006/01/10 13:36 -

再建主義と聖霊派の問題については、次の過去ログで論じたことがありました。ログNo.622-623、638-644、656-657、668-669、676-677あたりです。その上で、次のような小論をアップしています。

[「王国現在論と王国神学についての研究覚え書き」](#)

[「王国神学と王国現在論についての研究メモ（続き）」](#)

[「王国神学の六点」](#)

読み返して見て、今後憂慮すべき「聖霊派の再建主義」について、次のウォッチングポイントがあるだろうと思います。

1. 教団教派の部分否定から、全否定へ

日本でも、世界でも、聖霊派においては、「教団教派は古い」という考え方から、「教団教派は背教のバビロンである」という極端な考え方へと、進みつつある状況があります。これまでは、「教団教派の枠を超えて、キリストにあって一致しましょう」という、協力伝道のラインに沿った穏健な考え方が主流であったわけですが、今後は、「教団教派の枠そのものが、すでにして反キリストである」という極論が、強くなっていくであります。ここが第一のウォッチングポイントです。

□1082 御言葉に仕える使命を帯びた人間に対する不敬 債権主義者 - 2006/01/10 08:44 - 今日、教会活動や伝道活動なんてやったら、もうピーピー言わなければならない。

ピーピー言っていると、「あんた自分で伝道師になるって決意したんでしょ。貧乏は計画のうちじゃなかったの？我慢してやんなさい。」と言われる始末だ。

言っておくけど、こういった言葉を神は絶対に忘れ給わない。

「思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。」（ガラテヤ6・7）

この世の中は、すべてギブ・アンド・テイクだ。

サービスを受けたら代価を払う。これあたりまえ。

教会に行って、献金払わなかったら、泥棒。どんなに敬虔そうな顔をして、泥棒。

聖書の原則は、「受けたら与える」。「目には目を」「歯には歯を」。

御言葉の解釈を聞いて、利益を受けたと自覚したら、その時点で解釈者に対して負債が発生している。負債はつもりつもると、裁きが変わる。だから、正当な報酬を支払わない人間は、すべてにおいてのろいを蒙る。

だから、本来、献金は、「代金」であって、「下賜」ではない。

しかも、聖書では「御言葉のために労苦している長老には2倍の報いをせよ」と書いてある。

つまり、自分が受けたサービスの2倍返せ、と命令されているのだ。

御言葉に仕える使命を帯びた人間に対する不敬には、重大な裁きが伴うことを肝に銘じるべきだ。

・・・何か勘違いしてませんか？

1081 新年の区切りの総括

ただのおじさん - 2006/01/10 01:42 -

新年を区切りとして、今までの総括をしてみたいと思います。

私はPCをネットにつないでちょうど7年になります。その間にいろいろなキリスト教関係の掲示板、MLなどで発言してきました。それ以上に他のクリスチャンの発言を読んできました。クリスチャンのHPもいくつ見てきたか知れません。

その7年の間にとりわけ私が気になった話題、私が多数の発言をした話題はいくつかにしぼられます。

まずバルト神学のクリスチャンと延々とやりとりしたのがまず私が一番最初にまとまったやりとりをした最初でした。バルト神学がまるで正当なキリスト教で、改革主義神学やその他の保守的な神学をまるでとんでもものであるかのように非クリスチャンに訴えたので、その対応に対して(私はその時既にシェーファールのバルト神学批判を読んでおり、その問題点もある程度把握していましたが)その対応に対して問題点を延々と指摘したのです。これは結構続きましたね。いかにシェーファールがバルト神学を批判しなければならなかったのかが、その理由が実感できました。もうバルト神学の人とはやりとりはしたくありません。

その次に出会ったのが、非教派的カリスマ派・聖霊の第三の波派の影響をもろに受けたとおぼしきクリスチャンたちです。既にバルト神学の人とやりとりをした後なので、下手な教理理解、神学理解はキリスト教信仰をめちゃくちゃにすることとを把握していましたが、非教派的カリスマ派・聖霊の第三の波派の人たちの、教理理解、神学理解には引っかけを覚え、やりとりをしてみると、もうみんながみんな目茶苦茶組織神学嫌いで、非信条主義の私が多少は教理や組織神学も無視しない方がよいよ、そんなに組織神学嫌わないで、と言うと、実践神学で組織神学を変えるんだ、などと言う人まで現れて、とにかく理屈より実践、で最後は対話ができなくなってやりとりがとぎれました。

その次に再建主義に出会ったのですが、それは山谷さんと出会うかなり前であり、一通り彼らの主張を読んだ上で、山谷さんが再建主義の人とやりあっているのを見て初めて再建主義者とやりとりを始めました。その後のことは山谷さんは御存じですし、過去ログも残っているのでそれを見ていただくことにして、再建主義に関しても、そもそもカルバン主義の神学の根幹を所属する教会の群れ単位で認めておりませんので、改革派、長老派の教会のように神学の話から再建主義が出てくることはありませんし(再建主義を唱えたら教会の戒規に引っかかるはずです)、非教派的カリスマ派・聖霊の第三の波派は教会員で彼らを受け入れる人がいない状況で再建主義が紛れ込むような事態にもなりません。再建主義は内輪でけじめをつければそれで良いと考えています。

以上の3つの内、バルト神学と、再建主義については、私自身でけりがついています。

残っているのは、非教派的カリスマ派・聖霊の第三の波派、の影響を受けた人たちに対しての対応が今1つ良くわからないのです。

以前の山谷さんの説明では、このところがどうしても理解が今1つだったのです。再建主義者のこれからの行き場の1つでもあるわけですし、非教派的カリスマ派・聖霊の第三の波派、の歴史から長所、短所など教えていただけると幸いです。

1079 疑問？

奈々氏 - 2006/01/10 00:24 -

そもそも、富井氏はここを見てるわけ？

1078 ただの妄想でしょ

ただのおじさん - 2006/01/10 00:19 -

妄想をいくら言っても人はついて来ません。

 **1077** ルーク氏の一刺し

奈々氏 - 2006/01/10 00:17 -

【引用】

対して神学者は愚かにも神を人間の言語と論理の中に収めようとしている。いや真摯かつ謙虚な神学者も多いのであろうが、己の解像度を知ることなく、自分の愚かさを曝しているだけの御仁もいるようだ。

この「御仁」って？

 **1076** 再建主義に反対する者は呪われる

奈々氏 - 2006/01/09 23:56 -

【引用】

人類はついに、「聖書律法しかない」と気づきつつある。

この世界が神の創造による以上、この世界の使い方については、神から直接に指導を受ける以外にないのである。

いよいよ最後のステージになった。

これからは聖書律法による統治の時代である。

その前にヒューマニズムの法の失敗がなければならない。

ヒューマニズムは、自分の悪魔性を衆目にさらすことになるだろう。

だそうです。大丈夫でつか？

 **1075** ガラテヤ人への手紙1章6～9節

ただのおじさん - 2006/01/09 23:38 -

ほかの福音＝再建主義

 **1074** ユダヤ教に新約聖書はありません

ただのおじさん - 2006/01/09 22:32 -

私は、セブンスディアドベンチストやメシアニックジューをキリスト教だと考えて先の発言をしていません。彼らはユダヤ教徒だと考えています。その上で、再建主義もユダヤ教ではないのか？という意味で土曜日に礼拝したらと提案したのです。ユダヤ教なら今でも土曜日に礼拝しているそうですからね。新約聖書との整合性も考えなくて良いですし。

 **1073** 新約と旧約の違いをよく理解しよう

富井さん代筆@奈々氏 - 2006/01/09 22:21 -

【引用】 -----
(1)

「安息日は土曜日か、日曜日か」という問題は、今日ナンセンスである。なぜならば、キリストご自身が安息となられたからである。

「疲れた人、重荷を負っている人は私のところに来なさい。私があなたがたを休ませてあげます。」

安息日の制度は、旧約における「キリストの予型」であって、それは、キリストという実体の登場とともに廃棄された。

現代において、我々はどの曜日でも礼拝できる。キリストにあって、すべての日が安息日である。

もし特定の日を安息日とし、それ以外を非安息日とするならば、そのような人は、

安・息・年・を・な・ぜ・守・ら・な・い・の・か？

7年に1年、50年に2年まるまるなぜ休まないのか？？？

一つの戒めを文字通り解釈して、後は、「予型」として扱う根拠はどこにあるのか？？？

 だそうです。

 **1072** なぜ再建主義者は日曜日に礼拝を捧げるのか？ ただのおじさん - 2006/01/09 21:51 -

再建主義はあれだけ律法にこだわっているのに、なぜ他の律法にこだわりこだわる団体みたいに土曜日に礼拝しないのでしょうか？

セブンスディアドベンチストやメシアニックジュー、もちろん、ユダヤ教も土曜日に礼拝をしています。なぜ彼らのように礼拝しないのでしょうか。その方がよほど律法を重視していると思われるのですけど。

また、なぜ司法律法なるものを儀式的な律法とわけているのでしょうか？

ここまで来たらいっそのこと再建主義は土曜日に礼拝を捧げる団体として「再建」したら良いと思うのです。

 **1070** ルーク氏の"預言" 奈々氏 - 2006/01/09 09:40 -

【引用】

「再建主義は聖書の真理から乖離していることは明らかですが、そのメタ言語としての内部自身に深刻な論理矛盾を抱えているようです。...かくして再建主義者の精神は、多分、分裂病的に自己崩壊していくことでしょう。」

 **1069** まったく・・・ HN - 2006/01/09 02:26 -

富井氏の発言は、ほとんど暴言に近いといってもいいでしょう。到底実現不可能な政治的発言ばかり。福祉の全てを民間が受け持つならば、実に多くの人が、本来死ななくてもよい病気で死ぬでしょう。多くの障害者や病人、そして老人が淘汰されることでしょう。富井氏は進化論に反対しておきながら、政治的発言になると無神論のダーウィン主義とあまり変わらないもの

となってしまうのですね。社会的弱者の自然淘汰を加速させようとしているのですから。彼の政治的思想のキーワードは「自然淘汰の加速」です。（笑）

 1068 確かに無茶苦茶・・・

NH - 2006/01/08 21:31 -

富井氏はどうもくだまいていだけの様な様相ですね。
あそこでああやって叫んで、いったいどうするのだから？
MLで訴えても反応がなくなっているとか書いているが、
もうそろそろ読者も見限っているのでは？
再建主義にとってもマイナスな伝道キャラでしょうね。

 1067 それは無茶というものです

HN - 2006/01/08 19:26 -

（1）
＜近くの公園では、1時間300円の駐車料金を取る。

我々が納めた税金で作って運営しているはずなのに、なぜ駐車料金を取るのだろうか？

それは、我々のためのサービスではないか？すでにそのサービス代は払っているはずだ。なのになぜもっと取ろうとするのだろうか。

こんな無茶苦茶がまかりとおるのは、利用者が文句を言わないからである。＞（T氏）

無茶苦茶は、T氏のほうですよ。
駐車料金を取らなかったら、一人の人がいつまでも
駐車するということになり、いつまで経っても駐車
場が空かないということになるではありませんか。
「あそこは、いつも満車だし、待っていても空くことは
ない」ということになってしまいます。
「人はむさぼる者である」とT氏は言ったではありませんか。
ですから、駐車料金を取らないと、いつまでもむさぼる人が
停めたままということになるのです。

（2）
＜大阪市のあるゴミ処理施設では、外装のデザイン料だけで9000万払ったという。

ゴミ処理施設なんかどんな外装でもいいじゃないか。人がほとんど寄り付かないような埋立地にあるのだから、コンクリートの打ちっぱなしでも十分だ。＞（T氏）

デザインって、わかってますか？ バカを言ってはいけません。
まるで旧ソ連ですね。ゴミ処理施設こそ、「汚い」「臭い」と
いうマイナスイメージからの転換を図らなければならないのです。
山の中にある、コンクリート打ちっぱなしの、陰鬱なゴミ処理
施設など、私はゴメンです。やはりわが国のゴミ処理施設は
明るく綺麗なものでなければなりません。それは火葬場にも
いえることです。新しく出来る火葬場は、ほんとうにそこが
火葬場であることを忘れさせるほどです。「これ山の中の

リゾート施設？」と錯覚するような火葬場に私は行ったことがあります。

 1066 律法制定の天使

[山谷](#) - 2006/01/06 17:28 -

ガラテヤ3:19の「律法制定の天使」の問題については、過去ログNo.212からNo.260あたりで、詳細な議論をしていますので、参照してくだされば幸いです。[\(過去ログNo.206-264\)](#)

なお、この問題について、別に、[「律法・悪鬼的天使・十字架の連関について」](#)と題して論じていますので、そちらもよろしければ御覧下さい。

 1065 お詫び

通りすがり 2 - 2006/01/05 21:23 -

まいたけさま。分かりました。
真摯なご質問だったのですね。
誤解してようですので、すみませんでした。
なお、山谷先生を煩わすまでもなく、

ガラテヤ書3章19節に
では、律法とは何でしょうか。それは約束をお受けになった、この子孫が来られるときまで、違反を示すためにつけ加えられたもので、御使いたちを通して仲介者の手で定められたのです。

とあるとおりです。

 1064 ありがとうございました。

まいたけ - 2006/01/05 21:12 -

お忙しい中、実に詳細明瞭な御解説、誠にありがとうございました。またお手を煩わせて申し訳ありませんが「律法付与の際に仲介した天使」についても、みことばから御解説いただけると幸いです。なお、「通りすがり 2」様、挑発でも何でもありません。聖書を聖書で、みことばをみことばで学びたいので、神学者の諸説によらず、御解説をお願いしていますので、誤解なきよう、宜しく願い申し上げます。

 1063 引照聖句（3）

[山谷](#) - 2006/01/05 17:05 -

さて、諸国の天使長のひとりである「ティルスの天使長」が、エゼキエル書28章に描かれています。そこでは、最初は、ティルスの君主に対する預言が語られているのですが、それはやがて、天使的存在としてのティルスの領域主権への預言に移って行くのです。すなわち

お前は神の園であるエデンにいた。
わたしはお前を翼を広げて覆うケルブとして造った。
お前は神の聖なる山にいて、火の石の間を歩いていた。
創造された日から、お前の歩みは無垢であったが、ついに不正がお前の中に見出されるようになった。
お前の取り引きが盛んになると、お前の中に不法が満ち、罪を犯すようになった。

・・・と、エゼキエル28:12-16にある通りです。

ここから、「国家の天使長／神の子たち／天使的諸力／この世を支配する諸霊」は、ケルビムとして創造されたが、罪を犯して墮落し、悪鬼化する場合もある、ということを、考えることが出来るであります。

 引照聖句（2）

[山谷](#) - 2006/01/05 17:04 -

なぜ、キリスト再臨の時に、これら天使的諸力は滅ぼされなければならないのでしょうか？

ペトロ前書2:4は、このように言います。すなわち

神は、罪を犯した天使たちを容赦せず、暗闇という縄で縛って地獄に引き渡し、裁きのために閉じ込められました。

・・・とあり、さらに、ユダ6において

自分の領分を守らないで、その住まいを見捨ててしまった天使たちを、大いなる日の裁きのために、永遠の鎖で縛り、暗闇の中に閉じ込められました。

・・・あるとおりです。

それでは、これら、「大いなる裁きの日／キリスト再臨の日」に滅ぼされることになっている「天使的諸力／この世の諸霊」は、いったい、いつ、どのように、罪を犯したのでしょうか？

ユダ書は、罪を犯した天使たちの例に倣って、ソドムとゴモラの町の住人が、不自然な肉欲の満足を追い求めたので、永遠の火の刑罰を受けて、見せしめにされた、と言っています。ここから推測して、罪を犯した天使たちとは、創世記6:2で言われている、人間の娘と結婚した天使たちのことを指している、と考えられます。すなわち

神の子らは、人の娘たちが美しいのを見て、おのおの選んだ者を妻にした。

・・・と、とあるとおりです。

この「不自然」な天使たちのふるまいが、人間の社会を大いに墮落させられたことが、創世記の記述から推測することができます。すなわち

主は、地上に人の悪が増し、常に悪いことばかりを心に思い計っているのを御覧になって、地上に人を造ったことを後悔し、心を痛められた。

・・・と、創世記6:5-6に言われており、さらに

この地は神の前に墮落し、不法に満ちていた。神は地を御覧になった。見よ、それは墮落し、すべて肉なる者はこの地で墮落の道を歩んでいた。

・・・と、創世記6:11-12に言われています。

そうしますと、「神の子たち／天使たち」の不自然な振る舞いが、人類社会をはなはだしく墮落させ、その結果、神の審判としての宇宙的大災忌である「ノアの洪水」を招来したことになる

ります。

箱舟に乗ったノアとその家族は、神の恩恵によって、洪水から生き残り、その子孫から人類社会が再建されますが、しかし、人類は、一致団結して「バベルの塔」の建設に着手し、神への反抗を再度露わにしました。これに対して、神は、人類を「分散」させることによって、「バベルの塔」の建設を阻止しました。すなわち

主は彼らをそこから全地に散らされたので、彼らはこの町の建設をやめた。こういうわけで、この町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を混乱させ、また、主がそこから彼らを全地に散らされたからである。

・・・と、創世記11:8-9に言われているとおりです。

これに対応するような記述が、聖書啓示に見られます。それは、諸国民と諸国家の主権領域の起源について述べている、申命記32:8の言葉です。すなわち

いと高き神が国々に嗣業の土地を分け、人の子らを割りふられたとき、神の子らの数に従い、国々の境を設けられた。

・・・とあるとおりです。

そうしますと、ひとたびは神の裁きを受けた「神の子たち／天使たち」が、人類を分散管理する「後見人」「養育係」「管理人」として、再度、その任務につけられたことが、推測されます。

これら、諸国を管理監督する「国家の天使」は、聖書啓示では、ダニエル書に顕著です。ここでは、ダニエルの祈りに対する神からの応答を伝えるために派遣された天使が登場します。すなわち、ダニエル10:5-6に

目を上げて眺めると、見よ、一人の人が麻の衣を着、純金の帯を腰に締めて立っていた。体は宝石のようで、顔は稲妻のよう、目は松明の炎のようで、腕と足は磨かれた青銅のよう、話す声は大群衆の声のようであった。

・・・と、あります。この天使は、ダニエルが祈りをささげたその日に、すでに出発していたのですが、途中で、ペルシャの天使長によって、妨害を受けたのです。すなわち

ペルシア王国の天使長が二十一日間わたしに抵抗したが、大天使長のひとりミカエルが助けに来てくれたので、わたしはペルシアの王たちのところにいる必要がなくなった。

・・・と、ダニエル10:13に言われているとおりです。

上記を読みますと、（１）神に仕える天使と、神に反抗する天使とが、闘争していること、（２）ペルシア王国の天使長と、ペルシアの王たちとが、同一視されていること、の二点が伺い知れます。



1061 引照聖句（１）

[山谷](#) - 2006/01/05 17:04 -

わたしたちは、「世」の中に生きているわけですが、この「世」は、諸霊によって支配されている、と聖書啓示は述べています。すなわち、ガラテヤ4:3に

わたしたちも、未成年であったときは、世を支配する諸霊に奴隷として仕えていました。

・・・とある通りです。

ところで、上記ガラテヤ書の3:21-4:11の文脈では、わたしたち人間は、キリストが出現する以前は、「律法の監視下」「この世の諸霊の監督下」に置かれていた、と論じられています。
(今日なお、キリストに結ばれていない人間は、いまだ、この世の諸霊の監督下に置かれており、その状態は、キリスト再臨の日まで続くわけですが・・・)

ここから、パウロは、律法を授与した「天使的諸力」と、異教徒を支配管理している「この世の諸霊」とを、同一視していることがわかります。(この議論については、H.シュリーア、O.クルマン、H.ベルコフ、G.B.ケアード、山谷省吾、H.ヒュブナー、山内眞を参照。ケアード、山谷、ヒュブナーは、律法授与の天使を「悪鬼的」と見る。一方、律法授与の天使を「悪鬼的」とは見ない山内も、パウロが律法と諸霊を同一視している点については認める)

わたしたちキリスト者は、「この世を支配する諸霊」が管理監督しているところの「世」のただ中に生きているわけですが、しかし、キリスト者は、もはや「世」に属するものではありません。なぜなら、コロサイ2:20が述べるように

あなたがたは、キリストと共に死んで、世を支配する諸霊とは何の関係もない

・・・とされているからです。

わたしたちキリスト者は、キリストと結ばれ、キリストと共に死んだことによって、「世を支配する諸霊」の管理監督下から脱することが出来ました。なぜなら、「死ぬ」ことと「裁きを受ける」ことは、ただ一度だけであり、わたしたちは、キリストにあってすでに「死に」かつ「裁かれた」ので、「世を支配する諸霊」は、もはや、わたしたちを支配する能力を持ち得ないのです。

それゆえ、「死」と「裁き」の場である「十字架」はまた、キリストが「この世の諸霊」を打破した場でもある、ということになります。すなわち、コロサイ2:14-15が述べるように

神は、わたしたちの一切の罪を赦し、規則によってわたしたちを訴えて不利に陥れていた証書を破棄し、これを十字架につけて取り除いてくださいました。そして、もろもろの支配と権威の武装を解除し、キリストの勝利の列に従えて、公然とさらしものになさいました。

・・・とあるとおりです。

キリストの十字架によって打破された、「支配」と「権威」は、「この世の諸霊」を指す名称であると考えられます。なぜなら、「支配」と「権威」が打破されたことを宣言するコロサイ2:15に先立つ2:8において「世を支配する諸霊」と言われているからです。

コロサイにおいては、「支配」と「権威」は、「王座」と「主権」と共に、「キリストによって創造され」「キリストのために創造され」「キリストの頭首権下に置かれ」ています。すなわち

天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、王座も主権も、支配も権威も、万物は御子において造られたからです。

・・・と、コロサイ1:16にあり、さらに

キリストはすべての支配や権威の頭です。

・・・と、コロサイ2:10で言われており、また

神は、この力を、キリストに働かせて、キリストを死者の中から復活させ、天において御自分の右の座に着かせ、すべての支配、権威、勢力、主権の上に置き、今の世ばかりでなく、来るべき世においても唱えられるあらゆる名の上に置かれました。

・・・と、エフェソ1:20-21で言われているとおりです。

これら、キリストによって・キリストのために創造され、キリストによって打破され、キリスト頭首権下に従属させられている、「すべての支配・権威・勢力・主権／この世を支配する諸霊」は、永遠に存続するものではなく、キリスト再臨の時に、滅ぼされてしまいます。すなわち

次いで、世の終わりが来ます。そのとき、キリストはすべての支配、すべての権威や勢力を滅ぼし、父である神に国を引き渡されます。

・・・と、コリント前書15:24-25で言われているとおりです。

 **1060** 再建主義と陰謀論

路傍の石 - 2006/01/05 09:34 -

<訳者より： 以上は、あくまでも反再建主義者の主張であって富井個人の主張ではありません。再建主義が政治的な権力を求めることを民主主義の転覆であるとか、再建主義が述べてもいない陰謀説をひきあいに出して再建主義について悪い印象を与えようとの意図があると思われるが、アメリカの反再建主義者が再建主義をどのように評価しているか知ることも重要だという意味で載せたものです。>

「再建主義が述べてもいない陰謀論」???不思議ですね。T氏はさかんに世の動きの裏は陰謀があると主張していたはず。ラッシュドゥーニーもそう言っているはず。ますます理解不能です。

 **1059** 言葉と行為

宇雑無蔵 - 2006/01/05 01:04 -

山谷少佐の親切と堅忍をただのおじさんが指摘されていますが、本当にそう思います。ここで再建主義の情報を得ることができるのですから。私は山谷少佐の様を見てこの情報も信頼することができるのです。

富井氏曰くー

>この世は、「教えを説く人がどのような生活をしているか」を見て判断する。

この「生活」が金や地位の意味だけならばこの言明は価値がないですが、もっと本質的な意味、つまりその人格の現われを言っているのであれば、十分に価値があるでしょう。

つまり、イエス様曰くー

>偽預言者は実で判定しなさい。

再建主義は「神はレイピストではない」として、「聖書律法の適用はあくまでも自発的にバプ

テスマを受けた人が、自ら律法の適用を求めるようにする」と言うらしいが（再建主義はカルバン神学なのに自由意志を認めるのか？聖霊の特別恩寵によると言うのか？）、富井氏を見ているとどうにもそうは見えないのです。彼は自分の信条に反する者をひたすら排除しているだけのようなので。言っていることと行なっていることが相当に食い違っているようです。教えを説く「その人の有様」によって判断しますし、「実をもって判定」したいと思いますね。あの扉の6つの白枠であえて彼が「いいえ」と主張していることは、実はすべて反対なのではなからうかとますます不安を覚えるようになってしまった。

 **1058** 私は1年半以上ここにいます ただのおじさん - 2006/01/04 23:59 -

そして感じるのは、山谷さんの意見に対する賛否はともかく、山谷さんほど物事を親切に説明してくれる人はいないということです。
この掲示板で山谷さんが説明されていること、その説明の親切さは、なかなか他所では見られないものです。それもほとんど最新の話題をこれだけ取り上げて親切に説明してくれる人はまずいません。

 **1056** ちょっと執拗すぎませんか？ 通りすがり 2 - 2006/01/04 23:36 -

山谷先生は天使と悪鬼について過去ログで十分解説して下さっています。
本当に学ぶことを願っているのですしたら、もう少し遜った姿勢を、、、。
そうでないと挑発的な印象を受けてしまいます。

 **1055** 天使と悪鬼 まいたけ - 2006/01/04 23:02 -

「そこで神は、墮罪した人間を、「天使」（ケルビム）の管理下に置きました。これにより、人間は、罪ある存在であるにもかかわらず、天使の管理によって、その罪が抑制され、秩序ある安寧な生活を送ることが可能となったのです。天使は、人間の「魂」と「体」に働きかけて、人間の思考と感情と欲望を適切にコントロールすると共に、そうした抑制を振り切って犯罪に走る人間に対しては、天使が「主からの悪霊」あるいは「死の天使」として、裁きと呪いを執行して、生命を絶ち、社会の秩序と安寧を保障しました。

ところが、人間を管理する「天使」が、その任務を放棄したために、罪に対する抑制機能が停止してしまい、その結果、「全地に暴虐が満ちる」という悲惨な事態になりました。そこで、神は、宇宙的大洪水を起こして、人間を滅ぼすと共に、任務を放棄した天使を暗闇に閉じ込め

「「天使」は、墮罪した人間が、その罪ゆえに自滅してしまうことがないように、諸国家、諸政府、諸言語、諸民族、諸文化、諸宗教といったカテゴリーを通して、たえず人間に対して働きかけています。その意味では、天使は、「神の任務の遂行者」であり、「世界管理者」です。しかし、その天使はまた、自由意志を用いて神に反抗することも出来ます。天使が神への反抗を露呈させた場合が「悪鬼」です。」

以上の御文ですが、キッテルでなく、旧新約聖書のどこにあるのでしょうか？その旨のみことばはあるのでしょうか？

また、「悪鬼」と「悪霊」の違いについて、実際にみことばを掲げて御説明下さい。



1054 日本の国教

fms - 2006/01/04 22:14 -

靖国問題というのは、確かにクリスチャンにとっては深刻な問題だ。だが、どうなのだ？ 日本の国民は神道の「原理」を本当に信じているのか。今日、大多数の日本人が信じているものは何であろう？ それは「自己啓発書」のたぐいである。書店に行けば、ある一角は、自己啓発書のバザールだ。

こういったものが多く読まれている以上、今日の日本人が「本当に信じているもの」とは、ジョセフ・マーフィーの理論であり、ノーマン・ビンセント・ピール牧師の教えであり、また斉藤一人の本である。PHPやサンマーク出版などが、その他数多くの啓発書を出しているのは、周知のとおりである。

この手の人生観は、それが形而上学的なものに言及するとき、スピリチュアリズムの立場をとる。その哲学的淵源は、スウェーデンの神学者スウェデンボルグに負うところが大きいと感じる。

国民の大多数が心から信じているものを「国教」というなら、自己啓発書のたぐいこそ、それであると思うのである。

山谷氏の書き込みにも出ていた名前だが「渡部昇一氏」も、その一派である。彼が自らの歴史観を「オカルト史観」と言っているのも、うなづける。彼は一連のマーフィー著作の翻訳者であるからだ。「大島淳一」というのが、彼のペンネームであった。

かくいう私も、渡部氏に深く共鳴するものなのである。

1053 悪鬼的天使について（2）

[山谷](#) - 2006/01/04 22:13 -

「天使」は、墮罪した人間が、その罪ゆえに自滅してしまうことがないように、諸国家、諸政府、諸言語、諸民族、諸文化、諸宗教といったカテゴリーを通して、たえず人間に対して働きかけています。その意味では、天使は、「神の任務の遂行者」であり、「世界管理者」です。

しかし、その天使はまた、自由意志を用いて神に反抗することも出来ます。天使が神への反抗を露呈させた場合が「悪鬼」です。

「悪鬼」と化した天使であっても、キリストの出来事によって打破され、武装解除されて、強制的に「キリストの任務の遂行者」とされる場合があります。これが、キリスト初臨と再臨の間である「中間時」（現経綸）において、キリストに奉仕しているところの「悪鬼的天使的諸力」（位、主権、支配、権威、ストイケイア）です。悪鬼的天使的諸力の概念については、過去ログNo.1032に『キッテル新約聖書神学事典』からの説明を紹介していますので、ご覧ください。

新約聖書が執筆された当時の人々は、「国家や政府や公共機関は、超人間的な天使的存在によって動かされている」という世界観を保持していました。これら「天使的諸力」は、それぞれの「主権領域」を支配管理している、と考えられていました。ですから、ギリシャの国は「ギリシャの天使長」が支配管理しており、ペルシャの国は「ペルシャの天使長」が支配管理しており、海上民族フェニキア人の植民都市ティルスは「ティルスの天使長」が支配管理している、と考えられていたわけです。そうして、国家同士の衝突、つまり、戦争は、その国家を支配管理している「天使同士の闘争」である、と見なされていました。それゆえ、聖書啓示中のダニエル書では、ギリシャとペルシャの戦争を、「ギリシャの天使長とペルシャの天使長の戦い」として、描いているわけです。こうした世界観を持っていた古代人は、戦勝のために、敵国の守護神を自国に「招魂」して、お祭りをし、戦勝祈願をささげました。なぜなら、敵国の「主権領域」を管理しているのは、その主権領域の「天使長」であるわけですから、その天使長／守護神の許可なくしては、敵国の主権領域を征服／占領することは、不可能である、と考えられたからです。こうして、古代世界において、次々と戦勝を挙げたローマには、世界中の「神々」が招き寄せられて、神殿が建てられ、祭られることとなり、さながら、「世界宗教

博覧会」の様相を呈したのです。

このような、国家権力と悪鬼的天使的諸力とを同一視する「世界観」については、古代人の「迷信」として、キリスト教世界においてすらも、長らく忘れ去られていたのですが、それを再発見したのが、ドイツの神学者ハインリッヒ・シュリーアでありました。

この再発見は、ドイツの教会にとって、重要な貢献をしました。なぜなら、従来の神学は、「国家はキリストの王権的支配の代理人である」という、いわば、国家性善説に立つ樂觀論が主流であったからです。このような国家性善説の神学であると、教会は、当時ドイツで台頭していたナチズムに対して、理論的に対抗することが出来なかったのです。

ところが、ハインリッヒ・シュリーアが提起した「悪鬼的天使的諸力としての国家権力論」でありますと、国家が、自然法によって正しい統治を行う場合には、国家を「キリストの王権的支配の代理人」として肯定することが出来るし、また、国家が、自然法に違反して悪しき統治を行う場合には、国家を「悪鬼的性格を露呈させた天使的諸力」として批判することも出来るからです。

もし、国家性善説「だけ」であるならば、第二次世界大戦において連合軍が行った、日本の諸都市への無差別爆撃による市民の大量殺戮についても、肯定しなければならないことになってしまいます。

しかし、国家は「悪鬼的天使的諸力」であると見るのであれば、国家は、キリストの王権的支配の代理人として正統な統治を行いつつも、その悪鬼的性格を露呈した場合においては、悪鬼的所業を行うこともあり得る、という、いわば、国家に対する「是々非々」の対応を、わたしたちは、取ることが出来るわけです。つまり、連合軍の占領統治については、国際法に沿った正当なものであると「肯定」しつつも、戦勝に至った方法について、つまり、都市無差別爆撃については、国際法に違反した悪鬼的所業として「批判」することが、可能になるわけです。

1052 悪鬼的天使について (1)

[山谷](#) - 2006/01/04 21:43 -

聖書的世界観によれば、世界には、靈的／理性的存在が、四種類あります。

- 第一は、「神」です。
- 第二は、「知恵」です。
- 第三は、「天使」です。
- 第四は、「人間」です。

上記のうち、「神」は創造者。「知恵」と「天使」と「人間」は、神によって創造された被造物です。

創造者である「神」は、至高至善、全知全能、永遠無限、超時遍在です。

被造物である「知恵」と「天使」と「人間」は、有限の非決定論的存在です。つまり、自由意志を持った存在です。

聖書啓示によれば、被造物である「人間」は、自由意志を誤用して、「自分は神とは関わりなく、神の助けなしで、自分の力で自分の人生を生きて行く」という生き方を選択しました。これが、「人間の墮罪」です。

人間は「霊」と「魂」と「体」から構成される「三分節的存在」ですが、墮罪前においては、

人間の「霊」に、神からの力が供給されることで、「霊」が「魂」と「体」に優位して、「魂」と「体」を適切にコントロールしていました。墮罪後は、人間が、自力で生きる道を選択したために、神の助力の供給が断たれ、結果として、「魂」と「体」が「霊」に対して優位するようになりました。こうして人間は、思考や感情や身体の欲求に駆動されて人生を生きる存在となりました。このことは、人間同士の利害が衝突して、お互いに傷つけ合い、殺し合う事態になることを意味しました。

そこで神は、墮罪した人間を、「天使」（ケルビム）の管理下に置きました。これにより、人間は、罪ある存在であるにもかかわらず、天使の管理によって、その罪が抑制され、秩序ある安寧な生活を送ることが可能となったのです。天使は、人間の「魂」と「体」に働きかけて、人間の思考と感情と欲望を適切にコントロールすると共に、そうした抑制を振り切って犯罪に走る人間に対しては、天使が「主からの悪霊」あるいは「死の天使」として、裁きと呪いを執行して、生命を絶ち、社会の秩序と安寧を保障しました。

ところが、人間を管理する「天使」が、その任務を放棄したために、罪に対する抑制機能が停止してしまい、その結果、「全地に暴虐が満ちる」という悲惨な事態になりました。

そこで、神は、宇宙的大洪水を起こして、人間を滅ぼすと共に、任務を放棄した天使を暗闇に閉じ込め、かつ、ノアとその家族を箱船に乗せて、延命させられました。

生き残ったノアとその家族は、洪水後の世界に増え広がりましたが、人間の罪の性質のゆえに、再び神に反抗し、一致団結して、バベルの塔の建設に着手しました。

そこで、神は、人間をふたたび「天使」の管理下に置き、多数の天使によって人間を「分散管理」させることとしました。つまり、諸国家、諸政府、諸言語、諸民族、諸文化、諸宗教というカテゴリーに沿って人間を分散させたのです。これにより、人間は、一致団結して神に反抗するという「バベルの塔／バビロン化」が、不可能となりました。

 天使？ まいたけ - 2006/01/04 13:11 -
1051

「天使」も多数回登場しますが、このあたりを素人にもわかるようにご説明下さい。

 悪鬼？ まいたけ - 2006/01/04 13:08 -
1050

山谷先生の文章には、必ずといって良いほど、「悪鬼」が登場しますが、これ、こういったものでしょうか？ご教示下さい。

 「信仰告白の事態」について [山谷](#) - 2005/12/31 19:59 -
1049

ご紹介の小論、読ませていただきました。衷心からアーメンと申し上げます。

靖国問題、日の丸、君が代については、「アディアフォラ」だ、と捉えるキリスト者もいるでしょうし、「信仰告白の事態」だ、と捉えるキリスト者もいるでしょう。小生の属する教団では、「アディアフォラ」だと捉える人の方が、割合的に多いような気がします。

いったい、国家権力がわたしたちに要求する国民的義務としての「ある行為」が、キリスト者

にとって「アディアフォラ」であるのか「信仰告白の事態」であるのかについては、現下日本においては、まったく、ひとりひとりのキリスト者が持つ、聖霊に照らされた「良心」と、その良心に神が刻印した「衡平」の法感覚とに、まかせられていると言ってよいでしょう。

渡辺先生が言及しておられる、「ある事象が『アディアフォラ』か『信仰告白の事態』かを判断する機関としての『地方公会議』」については、小生は、近年その必要性・重要性が増して来ている、と考えます。

「地方公会議」がそうした問題について神学的な分析・検討・判断を行うにあたっては、渡辺先生が言われているように、ドイツ告白教会とバルメン宣言から、わたしたちは多くを学ばなければならないでしょう。この点で、小生は、カール・バルトが1930年台初頭にドイツの牧師会議で行った神学講演『義認と法』を、もう一度詳細に読み直さなければならないだろうと思っています。そこでは、ハインリッヒ・シュリーアが提起した「新約聖書神学における悪鬼的天使的国家権力論」が、バルトの神学的思考の出発点として据えられているのです。この『義認と法』は、1930年台の終わり頃には、すでに、日本の神学界にも伝えられていたのです。しかし、それは、日本に入ってきた時点で、解釈的改変が施され、「新約聖書神学における悪鬼的天使的国家権力論」ではなく、悪鬼的性格を除去した、「新約聖書神学における天使的国家権力論」として、紹介されたのでした。そのことによって、当時の日本のキリスト者は、「大日本帝国政府はキリストの王権的支配のエージェントである」と理解することができ、教会による国策の全面肯定を可とする論理的道筋をつけることができたのでした。

歴史に「もし」は、ありえませんが、もし、1930年台後半の日本において、バルトの『義認と法』が、そのような解釈的改変を施されないで、「新約聖書神学における悪鬼的天使的国家権力論」が、そのままのかたちで紹介されていたならば、おそらくは、1940年代において、日本のキリスト教会から、多数の殉教者が出る事態になっていた可能性があります。

さて、「地方公会議」を考えるならば、次に、「全地公会議」も、当然考えなければならないでしょう。「全地公会議」に至る道としてのWCC（世界教会協議会）やWEA（世界福音同盟）が、日本におけるこれらの問題に関心を寄せ、現在調査研究中だということです。「世界の第三項」としての「宇宙教会／世界教会」が、どのようなかたちで、どのような内容の、「預言者的声」を挙げるのか。このことについても、小生は、今後も引き続き注目しています。

 1048 東京告白教会・渡辺信夫

ただのおじさん - 2005/12/30 18:27 -

[信仰告白の事態ということ](#)

 1047 国旗と国歌（4）

[山谷](#) - 2005/12/30 17:49 -

過去ログNo.433

東京都教育委員会による公教育現場での日章旗への一礼・君が代斉唱の罰則を伴う命令については、現在、市民的抵抗・市民的抗議が一部で行われていますが、どうしても、都教委と教職員との間の＜当事者間同士の問題＞という次元で片付けられてしまう傾向にあります。これに対して、日本のリベラル派、福音派双方のキリスト者が抗議の声を挙げておりますが、日本人キリスト者は、日本国民であり同時に日本社会の市民でもあるわけですから、キリスト者の抵抗権の行使とて、＜当事者間同士の問題＞という次元で扱われて終わり、ということになってしまいがちです。

ところが、上記問題について、世界教会協議会と世界福音同盟の双方が現在一定の関心を寄せつつあり、情報を収集中であると共に、この問題についての準備的な分析と評価を行っています。ことが、国旗と国歌の公教育における使用義務、という問題ですから、世界教会協議会と世界福音同盟が＜悪鬼化＞という判断を出すかどうかは、はなはだ微妙なところではありますが、結果として＜預言者的声を挙げる＞ということになるならば、領域主権を超越した世界大の第三者（世界の第三項）からの意見表明が行われる、ということになるわけです。

それでは、世界的なキリスト者の連帯による監視によって、とにかくどんな問題でもいいから口実に使って、諸国家を批判攻撃していさえすれば、それでよい、ということになってしまうのだろうか？

そんなことは、ないのです。

なぜなら、＜網が岸边に引き上げられておらず、良い魚と悪い魚が混在している＞あるいは＜穂が熟していない状態で、良い麦と悪い麦が混在している＞という現経緯においては、判断を誤ると、取り違いが容易に起きてしまうからです。

そこで、過去における国家の露骨な悪鬼化という歴史においてキリスト者が抵抗権を行使して形成して来た＜憲法＞や、自然権に基いて形成された＜国際法＞、神定法としての＜自然法＞、神の似姿として創造された人間の尊厳に基いて形成された＜人権・人道＞といった、具体的・かつ・明示的な判断基準に拠って、国家の悪鬼化の程度を判断すべきなのです。

 国旗と国歌（3）
1046

[山谷](#) - 2005/12/30 17:49 -

過去ログNo.432

＜悪が極まる＞という意味での完全な悪鬼化が起きるのは、終末が到来してから、すなわち、教会が携挙されてからのことなのであって、だからこそ、＜抑えているものが取り去られると、不法の者が姿を現す＞と、テサロニケ後書で言われているのです。

しかしながら、いまだ終末が到来しておらずとも、＜国家＞の露骨な悪鬼化は、これまでの歴史において何度か起きて来ました。キリスト者は原則的に、ローマ書13章において、国家権力に服従するように、また、ペトロの手紙において、人間が立てた全ての政治制度に服従するように、と、＜中間時の中間倫理＞を命じられています。それにもかかわらず、過去の歴史において、＜国家＞の露骨な悪鬼化に際しては、キリスト者はその良心に基く抵抗権を行使して、＜国家＞の悪鬼化の抑制に努めて来たのです。その結果、国家権力を抑制し、国家に対する社会の自由を保証し、国家権力と教会とを分離する、という、＜国家と国民との間で締結された、明文化された政治契約としての憲法＞が、歴史的に形成されて来ました。

悪鬼的天使的勢力である国家権力は、この＜憲法＞によって、かせをはめられて、その行動を規制されているわけです。しかし、かせを脱ぎ捨てて露骨な悪鬼化を試みようとする場合には、順序として、＜国家＞に対してまず＜社会＞が抵抗するわけです。なぜなら、国家の悪鬼化は、＜国家と国民との間で締結された、明文化された政治契約としての憲法＞を破るかたちで起こって来るからです。この場合の＜社会の抵抗＞が、市民的監視、市民的抗議、市民的抵抗であって、その中に、報道による監視と抗議も含まれています。

これに加えて、世界の第三項としての＜教会＞が、国家と社会との間の闘争に対して、第三者の立場から＜預言者的声＞を発するわけです。

なぜ第三者かと言えば、国家と社会との間の闘争が、ひとつの主権領域内における統治者と住民との間の闘争という、直接当事者同士の問題という性格を持つのに対して、＜教会＞は、諸国民・諸民族・諸言語から集められた人々から構成される＜宇宙的キリストのからだ＞として、単一の主権領域を超越しているがゆえに、直接当事者という立場を超えた＜第三者的存在＞であるのです。ここに、教会の預言者的声の力があると考えられます。

それゆえに、「預言者的声は、キリスト者の世界的な連帯による監視に基くものでなければならない」ということになります。それは、キリストのからだが宇宙的なものであることと関連しており、また、現地のキリスト者＜だけ＞の監視と抵抗であるならば、それは、国家と社会との間の闘争という＜直接当事者間同士の問題＞としての次元に、容易に引きずりおろされてしまうことになるからです。

1045 国旗と国歌（2）

[山谷](#) - 2005/12/30 17:49 -

過去ログNo.431

様々に解釈し得る諸現象が次から次へと起こりながら、歴史は、終末という一点に向かって進行しているわけです。

この歴史は、＜救済の歴史＞であって、墮落した人類の救済と聖化という単一のベクトルによって、すでに決定付けられてしまっています。なぜなら、キリストが十字架にかかり、復活し、天に昇り、栄光を受けられ、そうして、再臨されるからです。

福音書の中に見られる、主イエスの「地引網のたとえ」を、もう一度思い起こしていただきたいと思うのですが、漁師（神）が網（歴史）を岸边（終末）へと引っ張り上げてしまう時が、やがてやって来ます。そうしますと、漁師（神）は、地面に座り込んで、網の中から良い魚（栄化されたキリストのからだ）と悪い魚（悪鬼的天使的諸力）を選り分けて、別々の器に移してしまうのです。

この時点が、教会の空中携挙の時であろうと、わたしは考えています。つまり、教会が地上から取り去られてしまうと、地上には、神に反抗する勢力のみが残されることとなり、これが、＜国家・社会・宗教＞の世界規模の完全一体化と悪鬼化を行って、＜バビロンの状況＞を作り出す、ということになるのだらうと思います。

網（歴史）が、まだ岸边に引き上げられていない現時点においては、良い魚も、悪い魚も、混ざり合って、それほど狭められてはいない水中の網の中で、ある程度自由に泳ぎまわっているのです。

そうしますと、網が岸边に引き上げられていない時点において、漁師（神）ではない、魚（人間）に過ぎないわたしたちが、良い魚と悪い魚とを判別するのは、至極困難であろう、ということになります。

そうであるのに、悪鬼化傾向を識別して、ある一定の判断を行おうとするのですから、そこには、当然、何らかの判断基準が要請されることになります。「なんでもいいから、とにかく悪鬼化していることにせよ」という姿勢で行ったら、取り違えが起こってしまいます。

これは、良い麦の種を蒔いた畑に、夜中に敵が来て、悪い麦の種を蒔いて行っただが、畑の主人はく収穫が来るまで待つことにしよう。そうでないと、悪い麦と一緒に、良い麦まで抜いてしまうかもしれないから＞と言った、という、主イエスの、もうひとつの例え話とも関連しています。



1044 国旗と国歌（1）

[山谷](#) - 2005/12/30 17:41 -

国旗と国歌については、過去ログNo.140、431、432、433で、「国家権力の悪鬼化」と「キリスト者の世界的連帯による監視」との関連の中で言及していますので、ご参考までに紹介いたします。

過去ログNo.140

後千年王国論と前千年王国論との最大の相違は、やはりなんと言っても「政治神学」の部分でありましょう。

前千年王国論に立つ場合は、キリストが再臨するまでは、「キリストの頭首権に由来し、天使的勢力に仲介された国家権力」というものが、地上に存在し続けます。そうして、わたしたちは、その国家権力に服従する主体としての「国民」であるわけです。

なぜ赤信号で渡ってはいけないのか。なぜ納税義務を果たさなければならないのか。なぜ国歌を斉唱し国旗に一礼しなければならないのか。これらはすべて、「キリストの頭首権」に由来する国家権力が命じることですから、「なぜ従うのか？」と問われるならば、「キリストに由来する権威がそう命じているから、従うのだ」ということになります。石原都知事が「国家が最終権威である」と記者質問に答えています。これは、国家権力はキリストの頭首権に由来すると考える政治神学によって基礎付けることが可能です。また、バプテスト連盟は最近、「キリスト以外のいかなるものにも服従しない」との信仰告白を採択しました。これも、国家権力の適正な命令に従うことは、キリストの頭首権に従うことにほかならないと考える政治神学によって基礎付けることが可能です。

しかし、ややこしい点は、「キリストの頭首権に由来する権力を委任された天使的勢力が、その悪鬼的性格を顕現させる場合がある」ということです。これが「中間時の中間領域の中性化された天使的勢力の揺れ」です。「ぶれ」と言ってもいいのでしょうか。

天使的勢力は、キリスト高举の出来事によって打破され、中性化されて、キリストに仕えるしもべとなり、キリストから委任された、キリストの頭首権に由来する国家権力を行使しているわけです。しかし、この「揺れ」が起きた場合、天使的勢力は、委任された権力を乱用して、反キリストの悪鬼的性格を露呈させることがあります。

ジャーナリストの筑紫哲也氏は「国家性悪説」ということを言いますが、これは、国家権力は悪鬼的性格を潜在させていると考える政治神学によって基礎付けることが可能です。

カルヴァンは、国家と国民が政治契約を結び、その契約は明文化されたものでなければならないと考えました。この「国民」が、キリスト者である国民である場合には、当然のことながら、「キリスト者の良心」と「キリスト者の良心に基づく抵抗権」が、政治契約に反映されることになります。こうして、国家権力は、明文化された政治契約（憲法）によって活動を制約され、制限されることになります。「立憲政治」ですね。

カルヴァンの考え方に立てば、国家権力を制限する最高法規である「憲法」とは、「キリスト者の良心を反映した明文化された政治契約であり、＜キリストによって中性化されている国家権力が、その潜在的な悪鬼的性格を顕現させることがないように予防する＞ために、国家権力を制限・制約する機能である」ということになります。

そうなりますと、キリスト者にとっての理想とは、キリスト者の良心をよく反映し、明文化さ

れた憲法が、憲法としての機能を十全に果たしている国家。これが「理想の国家」ということになります。世界各国の憲法を比較してみて、どの憲法が、キリスト者の良心を最もよく反映させた憲法か、研究してみるのも面白いでしょう。

前千年王国論の場合は、国家の本質は天使的勢力だと考えますので、国家が悪鬼化した場合であっても、キリスト者は特定の個人を敵視したり憎悪したりする必要はないのです。なぜなら、国王、独裁者、首相、大統領、皇帝、議会、行政府、官僚、裁判官、軍人らは、国家権力の本質では「ない」し、国家権力を操作している人たちでも「ない」からです。国家権力を動かしているのは超人間的な天使的勢力なのですから。それゆえ、キリスト者は政府を敵視せず、政治家や官僚を敵視せず、かえって「神に仕える人々」として敬意を払い、感謝し、愛し、そのために祈りもするのですが、しかもなお、悪鬼的性格を露呈させる国家権力に対しては、キリスト者の良心に基づく抵抗を、断固として貫き通すことが出来るのです。（以下略）

 語るべきことは主が語らせてくださいます
1042

外科医 - 2005/12/30 17:33 -

ロイド・ジョーンズは人をキリストのもとに連れてきたければ、「政治を説教しないこと」と述べています。私も、キリスト教会が、政治的な問題に口を突っ込みすぎるのはどうかと思います。靖国問題や、また、日本が、大東亜戦争で挙国一致して戦っていたころ；欧米の帝国主義や植民地主義、有色人種に対する人種差別、革命の起こったソビエトの不凍港を求めた南下政策・満州への侵略、中共ゲリラとの戦いなどなど.....世界史の大きな流れに巻き込まれて、強迫観念に駆られて国民全体として一種異様な精神状態に追い込まれて、一部の特高の行き過ぎた人権無視などはあったかも知れませんが、そのような状況に再び陥った時の事を心配して、過度な準備をするのはどうかと思います。

マタイの福音書10章にもこうあります。

いいですか。わたしが、あなたがたを遣わすのは、狼の中に羊を送り出すようなものです。ですから、蛇のようにさとく、鳩のようにすなおでありなさい。

人々には用心しなさい。彼らはあなたがたを議会に引き渡し、会堂でむち打ちますから。

また、あなたがたは、わたしのゆえに、総督たちや王たちの前に連れて行かれます。それは、彼らと異邦人たちにあかしをするためです。

人々があなたがたを引き渡したとき、どのように話そうか、何を話そうかと心配するには及びません。話すべきことは、そのとき示されるからです。

というのは、話すのはあなたがたではなく、あなたがたのうちにあって話されるあなたがたの父の御霊だからです。

兄弟は兄弟を死に渡し、父は子を死に渡し、子どもたちは両親に立ち逆らって、彼らを死なせます。

また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人々に憎まれます。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。

 憲法改正が論議されている今
1041

ただのおじさん - 2005/12/30 14:58 -

クリスチャンがどう「平和をつくる」者たるかは、そのクリスチャンの信仰が問われる問題です。

ちなみに1つリンクをしておきます。

再建主義者が多い長老派のものです。玉川上水キリスト教会もこの所属です。

[日本長老教会「ヤスクニと平和」委員会](#)



1040

あなたはどうか「行動」しますか？

ただのおじさん - 2005/12/30 14:32 -

地上の悪に対して(「統治者を神として礼拝せよ」と命じる様な存在でなければ悪とは考えない) クリスマスはどうか考えるのか、というのが私の考えている点であり、ゆえに信教の自由を問題としているわけです。

東京都などの君が代・日の丸問題は既に信教の自由の問題なのであり、内心の信仰の自由の問題ではありません。

内心の信仰の自由なら北朝鮮にだってあります。

私が先にリンクした発言者だって聖書の文章は重々承知です。その上で、過去を反省して同じ過ちを繰り返すなと言っているのです。

美濃ミッション事件の時、美濃ミッションの人たちが一番堪えたのはクリスマスからの美濃ミッション批判の声であったと聞きます。美濃ミッション事件は「統治者を神として礼拝せよ」と命じる様な事件であったのです。そしてそれに反対した美濃ミッションに対して時のクリスマスは「なぜ反対したのか」と批判したのです。これを繰り返すな、と私は言っているのです。

しかし、この問題に関していくつもの場所で、福音主義のクリスマスの主張を聞きましたが、いざ同様の事態が起きた時に、また同じ過ちを繰り返すな、と危惧される考えの持ち主(発言者)に何人も出会いました。そういう人も聖書を持ち出して自分の信仰の立場を守るよう発言し、美濃ミッションみたいな団体としての反対行動を取るとは明言できませんでした。明言できる機会がありながら、口でさえ明言できない人が実際に行動できるとは考えることが出来ません。

これは全てのクリスマスに突き付けられている問題です。あなたはどうか「行動」しますか？クリスマスとしての「行動」が問われているのです。



1039 政体論

[山谷](#) - 2005/12/30 10:15 -

聖書から政体論を考える場合、まず念頭に置くべきなのは、次の御言葉でしょう。ペトロ前書1:13以下です：

主のために、あなたがたは、すべて人間の立てた制度に従いなさい。

主権者としての王であろうと、悪人を罰し、善人を賞するため、王から遣わされた総督であろうと、彼に従いなさい。あなたがたが善を行って、愚かな人たちの無知な発言を封じるのが神のみ旨です。

自由な人として生活しなさい。その自由を盾にして悪を行うことなく、神のしもべとして生活しなさい。すべての人を敬い、兄弟を愛し、神を恐れ、王を尊びなさい。

以上の聖句から、次の要点を挙げる事が出来るでしょう。

1. キリスト者は、人間が立てたどのような政体にも、従うことができる。
2. キリスト者は、どのような主権者にも、従うことができる。
3. キリスト者は、自由を享受するが、その自由を、悪を行う口実として用いてはならない。
4. キリスト者は、神を畏れて生活するが、その生活態度とは、すべての人を敬い、同胞を愛し、主権者を尊ぶものである。

上記の要点を適用するならば、キリスト者は、象徴天皇制の民主主義政体である現下日本で、何ら問題なく生活できるだけでなく、立憲君主制の戦前の日本でも、何ら問題なく生活できる、ということになります。そしてもちろん、徳川幕藩体制下の日本でも、織豊政権でも、室町政権でも、北条執権政権でも、藤原政権でも、そしてさらには、オスマントルコ帝国でも、ムガル帝国でも、ノヴゴロド王国でも、東土大唐国でも、何ら問題なく、生活することが出来るのです。

問題があるとしたら、それは、その政権が、「統治者を神として礼拝せよ」と命じた場合のみです。その場合には、キリスト者は、統治者礼拝という一点において、非暴力不服従を貫き、場合によっては、殉教も辞しません。ただし、同時に、その他の遵法や納税の義務は、忠実に果たすのです。

 **1038** 天皇制は日本が世界に誇るべき制度です 護国豊穰 - 2005/12/30 08:55 -

天皇制は、あくまで主権は国民にあるのであり、日本国の統合の象徴としての制度です。何百世代にも渡って綿々と継承されてきた世界に誇るべき制度です。

時代時代で、実質的な支配者は変わりましたが、天皇家だけは、それらを超越した存在として、温存されて来ました。戦後日本の改悪を行ったGHQも、天皇制だけは温存しました。敗戦直後から、他の国と異なり、日本だけは治安が保たれました。それは、国民の心にあった、天皇を中心として、国を再建しようという意識と、日本国民の高い道徳性、教育、滅私奉公の姿勢のなせる業であると考えます。

従って、天皇制を廃するなど、左翼思想にかぶれた共産主義者や、旧社会党の亡霊たちの主張であると思います。

天皇陛下万歳！

 **1037** 「再建主義は消えない」 ～その理由の考察～ ただのおじさん - 2005/12/30 00:17 -

再建主義自体には問題がいくらでも指摘できるのに、なぜ再建主義のような主張が出てくるのか、私には理由が思い付く。

それは、教会が、教団が、説教者が、クリスチャンが、預言者の意識を持つべきであると信仰上考える人たちがいるからである（私もそうである）。そのような人たちが今の日本を見た時に、ただ自分の信仰を守っていれば良いとは考えずに、信仰に基づく何らかの行動を起こそうとするのは至極当然だからである。その一部が再建主義であると考えれば、私などと再建主義の距離はまさに紙一重なのである。

わざわざ、平和をつくりだす、と言わなくたって神様は平和をいくらでもつくりだせるだろう。神様は平和の神様なんだから。でも神様は信仰に基づく行いも求めている。だから、平和をつくりだす、と聖書には書いてあるのであろう。

自分の信仰を守っていれば良いと言う人たちがいる限り、再建主義のような主張は消えない。そして再建主義の問題が出てくる責任が、自分の信仰を守っていれば良いと言う考えの人に相当大きくあるのである。

 **1036** マタイによる福音書 5 章 9 節 ただのおじさん - 2005/12/29 23:49 -

私の憲法改正の絶対条件は、天皇制を憲法から完全に削除すること、完全に否定することである。

ゆえにこの条件が満たされる憲法改正は現行の日本ではあり得ず、ゆえに現行では憲法改正自体反対である。

その上で現行憲法の9条の完全な温存、現行憲法の20条の徹底遵守、これが守られなければキリスト教の信仰者として「平和をつくる」とは言えないからです。宗教紛争の絶えない今、キリスト教の名を借りたアメリカ政府の暴虐、この現状で憲法改正が叫ばれていることを思えば、キリスト教の信仰者として、平和をつくる、という言葉の重みを見直すべきである。この言葉を軽く見てはいけない。

『平和をつくる者は幸いです。その人は神の子どもと呼ばれるからです。』（マタイによる福音書5章9節）



1034 戦争論と憲法論について

[山谷](#) - 2005/12/29 22:10 -

戦争論と憲法論については、小生のブログで、過去に次のように考えを表明しておりますので、ご笑覧くだされば幸いです。

[「戦後60年に思う」](#)

[「私的憲法草案12か条」](#)



1033 天使について（2）

[山谷](#) - 2005/12/29 22:00 -

過去ログNo.547

キッテル『新約聖書神学事典』での記述から、次のように言うことができるであろうと思われます。

1. 悪鬼的天使的諸力が国家権力を委任されているという概念は、後期ユダヤ教と新約聖書神学においては、自明の概念である。そのことは、ダニエル書10章において顕著であり、また、エゼキエル書28章において、＜都市国家ティルス王＞が、＜ティルスの領域主権の天使＞と同一視して描写されていることから、明らかである。

同様に、コリント前書2：8の「この世の支配者」（アルコーン）という用語もまた、＜ローマ総督・サンヒドリン・官憲＞を指していると同時に、＜この世を支配する悪鬼的天使的諸力＞を指している、と釈義することが可能である。このコリント前書2：8における「この世の支配者」（アルコーン）という用語の“両義性”を、ローマ13章の「権威」（エクスーシア）に照射して、エクスーシアの後期ユダヤ教的・新約聖書神学的用法を適用するならば、ローマ13章の「中間時の中間倫理」の命令は、＜人間の立てた制度としての国家権力＞に対する服従を命じている、とも、＜キリストの頭首権的支配の下にある悪鬼的天使的諸力としての国家権力＞への服従を命じている、とも、見ることが出来る。（この議論については、オスカー・クルマン『キリストと時』第三部冒頭を参照）

2. 天使と悪鬼は、別個の概念範疇ではなく、摂理論の中の天使論という同一範疇において取り扱われるべきものである。悪鬼論は天使論に対して並立するのではなく、あくまで天使論の下位部門であるに過ぎない。

3. 国家権力の源泉は、神にある。神は、アダムに対して「地を支配せよ」と命じて、地の支配権をアダムに与えた。アダムが墮罪したために、神は中間領域を設置し、天使的諸力（ケルビム）に国家権力（剣）を与えた。これにより、地の支配権は、アダムから天使的諸力に移行

した。天使的諸力は、その任務から離れたために、悪鬼化し、そのことが、ノアの洪水の原因となった。洪水後、神は、悪鬼的天使的諸力に領域主権を与え、「主権国家」が設立された。これらの具体例が、ギリシャの天使長、ペルシャの天使長、ティルス¹の天使長である。国家権力は、＜神に由来する領域主権＞と＜領域主権を委任された悪鬼的天使的諸力＞と＜領域主権の行使の器として人間が立てた政治制度＞という、三つの側面がある。第一の側面を見るときに、国家権力は神的である。第二の側面を見るときに、国家権力は悪鬼的である。第三の側面を見るときに、国家権力は、人間が作った制度である。

4. 現経綸において、国家権力の源泉は、神にして人であるキリストにある。キリストは、十字架と復活によって、すべての悪鬼的天使的諸力を打破し、「地の支配権」を奪い返された。いまや、「地の支配権」を持っておられるのは、＜人の子＞として御座に着いておられるキリストである。悪鬼的天使的諸力は、打破されて武装解除されたゆえに、もはや、国家権力（剣）を持つことが出来ない。国家権力は、悪鬼的天使的諸力から取り上げられて、彼らは、滅ぼされることになる。しかし、中間時においては、＜墮落した人間の社会の秩序と安寧を維持するミッション＞としての諸国家が、まだなお、必要とされている。それゆえ、キリストは、キリスト頭首権に由来する領域主権を、打破された悪鬼的天使的勢力に委任し、彼らに諸国家を統治させている。これは、キリスト再臨をもって、終焉させられる。現経綸における国家権力は、＜キリスト頭首権に由来する領域主権＞と＜領域主権を委任された悪鬼的天使的諸力＞と＜領域主権の行使の器として人間が立てた政治制度＞という三つの側面がある。第一の側面を見るときに、国家権力はキリスト的である。第二の側面を見るときに、国家権力は悪鬼的である。第三の側面を見るときに、国家権力は、人間が作った制度である。



1032 天使について（1）

[山谷](#) - 2005/12/29 21:59 -

新約聖書神学における「天使」の概念については、過去ログNo.546と547で取り扱っておりますので、再掲いたします。

過去ログNo.546

悪鬼的天使的諸力の概念に関連する新約聖書の用語は、エクスーシア、アルコーン、デュナミス、スロノス、キュリオテースです。

これらの用語について、キッテルの『新約聖書神学事典』は、次のように述べています。

エクスーシア

超自然的諸力を指す、新約聖書における特殊用法。「この世の支配者」と共に用いられることが多い。ヘレニズムやグノーシス主義には見られない用語であるが、『イザヤの昇天』、『12族長の教訓』、キリスト教グノーシス主義諸文献、黙示的使徒言行録において見られる。エクスーシアは、ユダヤ教の土壌において発展した概念を基礎としており、悪鬼とは区別されるが、この世の支配者とは曖昧不可分な、宇宙的諸力を指す。パウロは、ユダヤ教における「自然界を支配する諸力」の概念を、ヘレニズムにおける「宇宙を支配する諸力」の概念と合わせて使用している。かくて、神と人間との間にあって、人間の生活を支配する様々な諸力が存在していることになる。エクスーシアは、被造物としての性質を持ち、キリストにあって、キリストのために創造された（コロサイ1：15-16）。緊張関係が存在するものの、二元論ではない。エクスーシアは、人間をキリストから引き離すことが出来ない。

アルコーン

社会における「高官」を指す用語。ダニエル書10章では、諸国を代表し守護している天使的存在の意味で使用されている。

新約聖書では、パリサイ派が「イエスの悪霊追い出しはベルゼブルによるものだ」と論難した文脈において、「悪鬼の王」の意味で用いられている（マタイ12：24）。しかし、アルコーンの力は打破されている（ヨハネ12：31）。アルコーンは、罪のないキリストに触れることすら出来ない（ヨハネ14：30）。アルコーンは、すでに裁かれている（ヨハネ16：11）。パウロは、アルコーンが非キリスト者の中に働いている、と言う（エペソ2:2）。この支配するアルコーンの力は、彼らが無知のゆえに、栄光の主キリストを十字架につけたために、失われることとなった（コリント前書2:8）

デュナミス

キリストの出来事は、悪鬼的諸力としてのデュナミスについて、明らかにしている。新約聖書は、悪鬼的諸力の存在を認めている。それらは、宇宙的諸力であると同時に、天使的諸力でもある。悪鬼的諸力は、キリストの復活によって打破され、キリストの再臨に際して、公然とさらしものにされることとなる。復活と再臨との間に、緊張状態が存在する。悪鬼的諸力は武装解除されたが、それは、信者が神から新しい命を受けて、神の支配の下に移されたからである（エペソ1：20-21、ローマ8：38-39）。それでもなお、悪鬼的諸力は戦っているが（黙示録13：2）、最終的には降伏する（1コリント15：24）。反キリストは、悪鬼的諸力と共に到来し、偽りを広めるが、キリストの再臨によって、ついに滅ぼされる（2テサロニケ2：9）。

スロノス

天使の階層の一つ。コロサイ1：16において、超自然的な諸力のひとつとして言及されている。その言及によると、天使的諸力の中の最高位階を指しているように思われる。

キュリオテース

「力」あるいは「権威」を指す用語。コロサイ1：16において、天使の階層のひとつを指す用語として使用されている。ユダ書8節では、偽教師が、その自由主義ゆえに「権威ある者をそしめる」と言われているが、そこでは天使的諸力よりむしろ、神的な栄光（あるいは神御自身）を指していると考えられる（2ペテロ2：10参照）。

1031 憂国

靖国神社 - 2005/12/28 23:34 -

憂国の士、決して、世の中を希薄にしてはいけない！

<http://www13.ocn.ne.jp/~autofilm/MyPage/menu0.html>

1030 「天使」とは？

きんにくん - 2005/12/28 22:49 -

このサイトで、「天使」とか「悪鬼」といった神学用語をよく見かけますが、聖書に基づいて御説明頂けませんか？

1029 過去に学ばない者は過去を繰り返す

ただのおじさん - 2005/12/28 18:32 -

日本の歴史には美濃ミッション事件という最高の実例がある。この事件がどういう意味合いを持って今も生きているのかを理解すべきである。過去に学ばない者は過去を繰り返すのである

る。

[迫害の原理 初代教会から同じ](#)

[『日本宣教と天皇制』](#)

[どこまで見抜けるか、迫害の文脈化](#)

[過去に学ばない者は過去を繰り返す](#)



1028 戦争論（2）

[山谷](#) - 2005/12/28 10:46 -

さて、現状において、なぜ、日本民族と韓民族との間に、感情的対立があり、払拭しがたい怨恨があるのか。これは、まさに、わたしたち人類が、「後見人」「管理人」としての「天使的諸力」による「分散管理」のもとに閉じ込められているからにほかならない、ということになります。

つまり、日本民族と韓民族は、言語、民族、文化、宗教において、完全同一化することがないように、天使的諸力によって適切に管理されている。それはなんのためかと言えば、「全人類の連帯による神への集団的反抗」（バベルの塔／バビロン化）が、未然に阻止されるためであるわけです。

そうしますと、世界史における日本と韓国の対立は、救済史的観点から見れば、「日本の天使長」と「韓国の天使長」の戦いである、と見る事ができるわけです。これについて聖書啓示では、ダニエル書の「ギリシャの天使長」と「ペルシャの天使長」の戦い、という叙述が示唆を与えています。

さて、「靖国問題」ですが、これは、「竹島問題」とセットで考えるべきでありましょう。日本でも韓国でも、「社会」のレベルから言えば、「日本文化解禁」による日本文化ブームがあり、J-POPやアニメが広がり、あるいは、「韓流ブーム」があり、K-POPや韓国ドラマや韓国語講座が広がり、両民族の間に交流と融和の機運が非常に高まっているわけですね。

これがさらに進みますと、日本文化と韓国文化が融合して、新しい東アジア文化が誕生することになるでありましょう。

ここにおいて、日本と韓国を分散管理している「天使的諸力」は、慎重にならざるを得ないのだらうと思います。日本で言えば、かつては関ヶ原を境界線とする「東日本文化圏」と「西日本文化圏」とが、分散管理ラインとして、そのまま、パワーポリティックスに反映されていたわけですね。つまり、東と西とで、日本人が戦っていた。これはつい百数十年前の戊辰戦争・会津戦争・函館戦争まで、戦っていたわけです。

ところがいまや、東と西は止揚されて、「統一国家日本」が出現するに至っている。つまり、歴史の進展と共に、分散管理ラインが格上げされる、ということが、あるわけです。

それでは、日本と韓国の場合は、どうなのか？

「日本の天使長」は、ひとたびは、韓国を併合することによって、分散管理ラインを格上げしようと試みた。ところが、この試みは、「ロシアの天使長」や「アメリカの天使長」や「イギリスの天使長」や「中国の天使長」によって阻止され、「韓国の天使長」は、ふたたび領域主権を回復して、今に至っているわけです。

関ヶ原の東西に存在した分散ラインの「格上げ」のような事態が、今後、対馬海峡の上下に存在する分散ラインにおいても起こるのか、どうか。これは、今の時点では、ありそうもないように思われます。

そうしますと、日本ブームや韓流ブームで、「社会」のレベルでは日韓融和ムードが高まって来ると、必ずそれに水を差すように「国家」のレベルで、領域主権をめぐる争点が浮上して来ることになる（靖国問題、竹島問題）。

これは、「日本の天使長」と「韓国の天使長」との間で取り決めたメタレベルでの「分散管理方針」が、時空内の「歴史」に投影された結果、そうなるのだ、と見ることができるであります。

逆に言えば、「国家」のレベルでは、解決しがたい争点（靖国問題、竹島問題）が、きちんと「釘」を止めてくれているのであるから、「社会」のレベルでは安心して、日本文化ブームなり韓流ブームなり、もっとどんどん進めて行ってよいだろう、ということになります。

以上は、「オカルト史観」と揶揄されて仕方がないものですがけれども、歴史修正主義者の渡部昇一氏すら、御自身の史観を「オカルト史観」と自称しておられるわけですから、小生も多少ゆるされるのではないかと考えております（笑）

1027 戦争論（1）

[山谷](#) - 2005/12/28 10:45 -

戦争論ですが、これも、「自国」vs「他国」という二項対立図式で考えるなら、決着のつかない議論となるであります。

つまり、他国が悪くて自国が正しかったのだ、という主張か、自国が悪くて他国が正しかったのだ、という主張か、「永遠の平行線」が続くわけです。

この「自国」vs「他国」という二項対立図式を、どう超克すべきか？ ここでも小生は、聖書啓示において与えられている世界観的パラダイムに、つまり、「中間時の中間領域における天使的国家権力論」に帰るべきだと考えるのです。

例として、日本と韓国を挙げてみましょう。

日本民族も韓民族もアダムの子孫であり、ノアの箱舟によって生き残った一家の子孫であるわけですから、本来的には「家族」であり、「一」であるわけです。

ところが、ノアの箱舟を出た人類は、一致団結して神への反抗を企て、「バベルの塔」を建設するに至りました。

そこで神は、人類を天使的諸力の支配下に移し、「後見人」「管理人」としてのストイケイア（宇宙の構成に関わる諸霊）による「分散管理」のもとに置いたわけです。

その結果、人類は、諸言語、諸民族、諸文化、諸宗教のカテゴリーに沿って分散させられることとなりました。こうして、「救済史」を下部構造として、その上部構造である「歴史」あるいは「世界史」が、誕生することとなったわけです。日本民族と韓民族の誕生ですね。

これについて聖書啓示では、申命記32章の中で、「神が、国々に相続地を持たせ、人の子らを振り当てられたとき、神の子らの数にしたがって、国々の民の境を決められた」と言われてい

ます。「中間時の中間領域における天使的国家権力論」では、この「神の子ら」を、「天使的諸力／ストイケイア」と釈義し得る、と考えるわけです。

 靖国問題も拘るべきである 靖国神社には反対ですが - 2005/12/27 11:30 -
1026

ミレニアム新着情報を読みました。こう書いてあります。
こだわる対象を間違えていませんか？

>靖国問題で、中国や韓国との摩擦が拡大している。
>私は、靖国なんてものにこだわる総理大臣の気持ちが
>わからない。
>戦争で犠牲になった方々を追悼するならば、
>もっと摩擦が少ない方法があるはずだ。

中略

>首相は、この問題を政治の問題としてではなく、
>「男の美学」の問題として捉えているように見えるのである
>こだわるべきは、「拉致」だ！
>これは日本国の主権の問題である。
>日本は主権を犯されたのである。

北朝鮮の拉致問題でも、我が国は強硬な外交姿勢をとるべきであると考え、場合によっては、国家間の紛争の最終的な解決手段である戦争という選択肢もありだと考えます。

一方、靖国問題であるが、一国の首相が、明治維新以来の国に尽くした軍人の供養を目的として設立された靖国神社で、国民の代表として感謝の意を表し、不戦の誓いをする事に何の問題があるのでしょうか？中国や韓国の圧力は完全な内政干渉です。アーリントン墓地で大統領が戦没者の慰霊祭を行う事に、ヒロシマ、ナガサキの被爆者が抗議を行う権利を有しているのでしょうか？同様に、戦勝国による違法な極東軍事裁判で押し付けられた、A級戦犯が合祀されているからケシカランとは、噴飯ものの非難であります。A級戦犯とは違法な裁判による捏造証拠によって、戦勝国がごり押しした判決であり、日本国民は、この様な違法判決に服する必要はありません。サンフランシスコ講和条約により、日本の戦後処理は終わりました。意味の無い戦後を引きずる必要はありません。全体主義国家である中国の操作された世論や、正しい歴史認識に立っていない、韓国の世論に屈する必要はありません。我が国は、主権国家なので、卑しくも一国の首相である小泉総理は、堂々と、自説を曲げずに、靖国参拝を継続して欲しいと思います。

 オーバンアベニュー神学（5） [山谷](#) - 2005/12/24 20:41 -
1025

北米長老教会（PCA）では、二契約論再建主義も、一契約論再建主義も、おおむね排除される傾向にあるようです。

ヴァージニア州とテネシー州にまたがる「ウェストミンスター中会」では、「セオノミー」（司法律法を現代社会に適用して再建主義社会を建設するという思想）そのものが問題とされ、再建主義肯定派と再建主義否定派とに分裂して、それぞれ別々に新たな中会を設立することとなりました。

「中央カロライナ中会」は、オーバンアベニュー教会を抱えるルイジアナ中会に対して、「オーバンアベニュー教会に調査委員会を立ち入らせ、主任牧師スティーブ・ウィルキンズに対する必要な戒規を執行するよう要請する」との決議を行いました。

「ミシシッピーヴァレー中会」は、神学調査委員会を任命し、最終報告書が提出されて、「オーバンアベニュー神学は、聖書にもウェストミンスター信仰告白にも反する」との結論を

出しました。

ミシシッピー州とテネシー州にまたがる「カベナント中会」も、「オーバンアベニュー神学は、ウェストミンスター信仰告白に反する」と決議しています。

以上の構図を見ますと、こういうことになります。

「二契約論再建主義」（ラッシュドゥーニー、ゲイリー・ノース、グレッグ・バーンセン）は、スコットランド長老教会大会によって、「ウェストミンスター信仰告白に違反する」として、異端宣告を受けました。

「非二契約論再建主義」（ジェームズ・ジョーダン、アンドリュー・サンドリン、スティーブ・ウィルキンス）は、北米長老教会の各地の中会によって、「ウェストミンスター信仰告白に違反する」として、排除勧告を受けました。

そうしますと、再建主義は、もはや、いかような形態においても、改革長老教会の世界の中では生き残れないように思われます。

残る道は、「王国現在論／ドミニオン神学」として、「非教派的カリスマ派・聖霊の第三の波派」の中で生き残りをかけるか、あるいは、「フルプレテリズム再建主義」として、「非改革長老派諸教会」（メソジスト、バプテスト、会衆派、ホーリネス、ペンテコステ、チャーチ・オブ・ゴッド等）の中で生き残りをかけるか、でありましょう。



1024 オーバンアベニュー神学（４）

[山谷](#) - 2005/12/22 11:06 -

2002年にオーバンアベニュー神学が提唱されて以来、正統長老教会（OPC）や北米長老教会（PCA）で大変な議論となり、大会や各地の中会で、「憂慮と懸念」が表明されているようです。このことは、日本の改革長老教会にも伝えられ、一部の神学者や教師の間で議論が始まりつつあるようです。

オーバンアベニュー神学は、伝統的な改革派の「二契約論」を「一契約論」に変更するばかりでなく、非決定論的神観・人間観に立つ「オープンテイズム」を導入することによって、従来の改革派の世界観とは全く異なる「非決定論的世界観」を打ち出そうとするものです。これは、非二契約論再建主義が、カルヴィニズムと決別し、さらには、ヴァンティル弁証学とも決別することを意味します（！）

ウェスレアン・アルミニウス主義者、つまり、「非決定論者」である小生の立場からすると、これは、まったく、「改革派がウェスレアン・アルミニアンになりたがること」であるわけで、「何をまた好きこのんで？」と、心中複雑な思いがあります（苦笑）

そういうわけで、北米の改革派の中会や大会から発せられる「憂慮の表明」は、当然のことながら、「オーバンアベニュー神学は、ローマの異端であり、アルミニウスの異端である」という批判のかたちを取ることとなっています。

それにしましても興味深いのは、再建主義と一体であるオーバンアベニュー神学が、改革派の新進気鋭の神学者J.D.G.ダンが『ガラテヤ書におけるパウロ神学』で提起した「改革派の新パラダイム」と、どうやら、密接な関連を持っているようであることです。

これは、もちろん、ダンが再建主義者であるとか、ダンがオーバンアベニュー神学陣営に組するとかいうことを意味するのではなく、再建主義／オーバンアベニュー神学側が、カール・

ラーナーを便利に使っているのと同様、「ダンを便利に使っている」ということであろう、と思います。

それにしましても、現代神学における「ガラテヤ書」の位置づけ。これは、今後、さらに重要になって来ると思われます。21世紀神学の初頭における「ガラテヤ・ブーム」の到来を予感させます。

 **1023** オーバンアベニュー神学（3） 山谷 - 2005/12/21 14:16 -

第二バチカン公会議後のカトリックの代表的神学者であるカール・ラーナーが述べた「経綸的三位一体は、存在論的三位一体である」という言葉を、オーバンアベニュー神学は、自説の補強に利用しているようです。

しかし、このような利用は、妥当なものなのでしょうか？

カール・ラーナーがここで述べている「経綸」とは、エコノミー、あるいは、ディスペンセーションであり、「救済史」における神の救いの行為の動的展開を意味します。しかも、それは、救済史の時間軸上の進行に応じて変化するものであることを、意味します。

改革派の「二契約論」の場合は、救済史の展開において、「業の契約」と「恵みの契約」という二つの経綸が動的に展開して行くと見るわけですから、「経綸的救済理解」をしているわけです。ディスペンセーションナリズムの場合は、七つ、あるいは、それ以上の経綸の動的な展開を考えるわけですから、これもまた、「経綸的救済理解」になるわけですね。

ところが、オーバンアベニュー神学の場合は、改革派の伝統的な二契約論を否定して、「一契約論」を言うわけです。つまり、救済史においては、「恵みの契約」という、ただひとつの、永遠に不変の、神のお取り扱いがあるだけである、というパラダイムなのです。

それはつまり、神のお取り扱いにおいては、そもそも「経綸」などというものは存在しない、という世界観であるわけなのです。

さて、そこで、先述のカール・ラーナーの言葉です。ラーナーは、「経綸的三位一体は、存在論的三位一体である」と述べたわけですが、果たして、「経綸などというものは存在しない」と主張するオーバンアベニュー神学が、このラーナーの言葉を利用出来る立場にあるのか、どうか？

小生は、はなはだ疑問を抱かざるを得ません。

 **1021** これは一線を、、、 通りすがり 2 - 2005/12/20 20:42 -

>これに対して、オーバンアベニュー神学は、「父と子と聖霊という三つの位格は、契約関係において一つである」という、新たな定式を提唱するのです。

ついに一線を越えるというわけですね。
それにしても論理構成がほとんど継ぎ接ぎだらけで、
ほおって置いても自ら論理的破綻を迎えるのでは？

 トリーテン - 2005/12/20 20:32 -

誤解がありましたら

1019 読者のコメント

トリーノイ - 2005/12/20 20:32 -

ただのおじさんさん、読み込み方が偏っていたようで申し訳ありませんでした。
私は再建主義者ではありません。どちらかといえば、東方教会よりです。山谷さんの文章に教えられることが多く、ROMしておりました。再び、ROMに戻ります。
ただのおじさんさんの投稿に反応したのは、ただのおじさんさんが神学や弁証学に興味を持っていることを知っており、これはどうしたことなのか？と残念に思ったからです。できるだけ、冷静に自分の思ったことを書いたのですが、不快な思いをさせたようで重ね重ね申し訳ありません。

 1018 オーバンアベニュー神学（2）[山谷](#) - 2005/12/20 19:06 -

このウィルキンズ牧師が中心となって、オーバンアベニュー教会主宰の神学シンポジウムが2002年に開催されたのですが、そこにおいて、従来の伝統的な改革派の契約神学を全く覆すような「新説」が提唱されました。以来これは、「オーバンアベニュー神学」と称されて、北米の保守的な改革派諸教会を中心に広がりを見せ、たいへんな議論を引き起こしているようです。

この「オーバンアベニュー神学」の推進者には、再建主義の論客であるアンドリュー・サンドリンやジェームズ・ジョーダンが名を連ねており、まさに、再建主義と連動した新たなる動き、ということが出来るであります。

この「オーバンアベニュー神学」は、伝統的な改革派神学に忠誠を尽くすと自称する「二契約論再建主義」とは対立する立場の、「非二契約論再建主義」の最新理論です。

伝統的な契約神学が「業の契約」であるとしているアダムの契約を、オーバンアベニュー神学は、「恵みの契約」であったと捉えます。ここから、アダムの契約もキリストの契約も、同じ恵みの契約であったということになり、このため、「非二契約論」あるいは「一契約論」(Monocovenantalism)と呼ばれます。

スーブララブサリアニズム（墮罪前予定説）において、非二契約論を採用した場合、その世界観は、「恩恵」＋「恩恵」となり、完全な決定論的世界観となってしまいます。このため、非二契約論再建主義は、宇宙の中に「自律」の地点を、何らかの形で確保しなければならない。・・・このことは、当掲示板で、小生が何度か指摘したことであります。

実際、非二契約論再建主義は、改革派神学サークルの中で近年新たに唱えられている「オープンティズム」に接近しつつあります。

「オーバンアベニュー神学」も、最新の「オープンティズム」を自論の構築に積極的に採用しており、そのため、J.D.G.ダンのような「改革派の新パラダイムの神学者」の著作から引用がなされ、さらにはまた、第二バチカン公会議後のカトリックの代表的神学者であるカール・ラーナーまでもが、引用されているようです。

これは、再建主義が、生き残りを図るために、現代の最新の神学を自説の補強に取り入れ、従来の伝統的な改革派神学を大幅に変更してでも、なんとか「司法律法」を生き残らせようという、苦肉の策のようです。

「オーバンアベニュー神学」の核心は、その「契約的三位一体論」であります。

従来のキリスト教神学の三位一体論では、父と子と聖霊という三つの位格は、本質において一

つである、という定式をとっていたのです。

これに対して、オーバンアベニュー神学は、「父と子と聖霊という三つの位格は、契約関係において一つである」という、新たな定式を提唱するのです。

これにより、「契約関係」は、三位一体の神の存在論的な構造そのものである、ということになり、その三位一体の神が創造した宇宙は、「契約的構造を持った宇宙」ということになり、さらにまた、その三位一体の神が創造した人間は、「契約的存在としての人間」ということになります。

さて、ここから先が問題点なのです。

従来の改革派神学であるならば、モーセ律法を、アダム「業の契約」の延長上にあるものとして捉えて、キリストの贖罪のみわざによって、「業の契約」は廃棄された、と考えるわけです。

これであると、司法律法が廃棄されてしまうことになりますから、再建主義の目論みは終わってしまいます。

そこで、オーバンアベニュー神学は、アダム契約を「恵みの契約」であったと捉え、これにより、モーセ律法をも、「恵みの契約」の延長上にあるものとし、そうすることによって、キリストの贖罪のみわざによって、「恵みの契約」は完成されて、かくして、司法律法を含めたモーセ律法全体が、新創造の世界においても、永遠に存続することになるのです（！）

つまり、キリストによる救済とは、「契約的存在」としての人間が、本来あるべき「契約的存在」としての姿に回復されることであり、それはつまり、三位一体の存在論的な構造に根ざした「契約関係」の中に、キリスト者が生きようになること。それはつまり、「司法律法に服従して生きようになること」だ、というわけです。

かくして、新創造の世界においては、相続税と消費税と所得税と公的医療福祉制度が全廃され、墮胎者や同性愛者の公開処刑が絶対に導入されなければならないことになります。

 **1017** オーバンアベニュー神学（1） [山谷](#) - 2005/12/20 19:03 -

以前、再建主義の推進者のひとりであるスティーブ・ウィルキンズ牧師を、この掲示板で紹介したことがありました。

—以下引用—

ルイジアナ州のオーバンアベニュー長老教会のスティーブ・J・ウィルキンズ牧師は、白人優位主義に立つ「南部同盟」の理事であり、また、再建主義の立場から奴隷制度を肯定するひととして知られています。

ウィルキンズ牧師は、歴史修正主義者として、南北戦争の意味づけの見直しを進めており、「聖書を憎む北部の異教的文明が、聖書を尊重する南部のキリスト教文明を粉砕しようとしたのが、南北戦争の要因であり、奴隷解放問題は、二次的要因に過ぎない」と主張しています。その上で、「異教化が進む世界において、アメリカ南部だけが、地上におけるキリスト教文明の最後の牙城である」とも述べています。

そのウィルキンズ牧師は、南部のアメリカ長老教会において、大会や中会に対して「再建主義

を正統性の保障の条項に加えること」を議題として繰り返し提出し、大会や中会で再建主義論争が起きるように仕向ける工作を行っているということです。さらに、再建主義に否定的なリベラルな教職者については、教会戒規の執行を求める訴えを繰り返し起こし、そのため、女性信徒が説教壇上で話しをするのを許可した牧師の教会に、教会規律調査委員会が入って、調査が行われたりしています。

ウィルキンズ牧師は、再建主義がアメリカを制覇する前に、まず宗教多元主義・文化多元主義である現状のアメリカ社会が崩壊しなければならない、と考えているようです。これは、ゲイリー・ノースが「Y2K問題」によってアメリカ社会が崩壊すると警告していたのと、基本的には同じ考え方でありましょう。

ただし、ウィルキンズ牧師のサークルにおいては、近い将来、アメリカ社会において人種間対立が深刻化し、そこから「人種間戦争」が起きて、アメリカ社会が崩壊し、その後、再建主義社会が建設される、と見ています。

実際に、ウィルキンズ牧師のオーバンアベニュー教会では、教会員に対して、体を鍛え、武術や武器の使い方を学んで、来るべき「人種間戦争」に備えるように、という勧めが行われているということです。このため、自分の子弟に武術を学ばせたくない親たちの中には、やむなく、他の教会に移る選択をした人もいる、ということです。

以上は、アメリカにおける「ヘイトグループ」のリストを作成し、監視を行っている、南部アラバマ州のNGO「南部貧困法センター」の報告書によるものです。

—以上引用—

 安心しました
1016

通りすがり 2 - 2005/12/19 20:22 -

山谷さまのご意見、まったく同意です。
それにしましても安心して読めます。
この掲示板はさらに用いられることでありましょう。

ただのおじさんにおかれましては
まことに賢明なご判断と思います。
文章はその人を表わしますから。

 教会と神学と弁証学（最後）
1015

[山谷](#) - 2005/12/19 19:58 -

「使信」の解釈と適用は、「地方教会」を構成する人々の信仰と生活と宣教に、多大な影響を及ぼすわけですが、その具体例として、「単一の行為・二つの意志」という定式を挙げてみましょう。

わたしたちの主イエス・キリストは、その御生涯を通して「単一の行為としての愛」を生きられたわけですが、その単一の行為の背後には、「二つの意志の協働」が存在していました。これが「キリスト両意論」が言わんとするところです。

一見すると、上記の「単一の行為・二つの意志」のような定式は、キリスト者の日常生活と何の関係もない、無意味なもののように思われます。

しかし、両意論が論じられた東方教会では、キリスト者の聖化を、「神が人となられたのは、人が神となるため」という「神化」（テオシス）という概念で、大雑把に捉えていました。

この「神化」を、そのまま受け取ってしまいますと、キリストの受肉によって、わたしたちキリスト者は聖化されて、文字とおり人間が神になる、というような「誤った信仰」になってしまいます。

しかし、「神化」の信仰は、本来そのようなことを意味しているわけではないのです。ここで重要になって来るのが、「単一の行為・二つの意志」という両意論の定式です。

どういうことかと言いますと、「人が神となる」というのは、「キリスト者が、そのなす単一の行為としての愛において、『受肉者キリスト』と同じようになること」だ、というわけです。つまり、「神が人となられた」イエス・キリストの御人格においては、人としての意志が、神としての意志に、服していた。このまったく協働の結果として、キリストの御生涯において、「単一の行為としての愛」が表現されていた。それと同じように、いまや、キリスト者の人格において、キリスト者の意志が、聖霊によって啓示された神の意志に、服するようになる。それは、まったく、救いと聖潔の恵みゆえに、そうなるわけですが、この協働の結果として、キリスト者が「単一の行為としての愛」を生きるようになる。つまり、律法の二枚の板が要求する、神への愛と隣人への愛に、生きることが可能とされるわけです。

もし、両意論の「単一の行為・二つの意志」という定式を欠いたまま、「神が人となられたのは、人が神となるため」という「神化」を受け取ってしまいますと、何か、本当に人間が神になってしまうような「信仰」になってしまうし、そのような「信仰」を持つ共同体の指導者（監督）は、往々にして神格化され、それこそ、神のように崇められ、場合によっては、三位一体の第四位格であるかのようにさえ言われることも、あり得るのです。現代で、そのような傾向性を帯びて問題とされた共同体として、ウォッチマン・ニーの後継者であるウィットネス・リーが米国に移住して設立したグループが挙げられるでしょう。

このように、「神学」と「弁証学」は、必要とされないのであれば、されなくて、それにこしたことはないわけですが、残念ながら、「地方教会」の中には、「使信」の誤った解釈や適用を行う人々が、その時代時代に必ず出て来ってしまうわけですから、そのような時には、やはり、「使信」の正しい解釈と適用を弁明し立証する働きが、必要とされるのでありましょう。そのときには、キリスト者の日常生活と一見何の関係もないように見える「神学上の概念」が、実は、キリスト者の生き方に密接な影響を持っているのだということが、明らかになる場合もあります。再建主義論争の場合などは、「中間時の中間領域における天使的国家権力」というのが、それでありましょう。

□
1014 これで打ち切り

ただのおじさん - 2005/12/19 19:28 -

山谷さんへ。

私の立場を一応説明するために山谷さんの文章を引用させていただきます。この山谷さんの説明を持って今回の件は打ち切りとさせていただきます。話始めるのは容易いが話を打ち切るのはとても困難なのは身に染みておりますので。

非信条主義／聖書そのもの・主観的体験・各個教会の信仰と実行における独立自治等を重視し、特定の信仰箇条に必ずしもとらわれない立場。あるいは、自己の正統性は、信仰箇条だけに立脚するのではないと見る立場。

通りすがり 2 さんへ。

ご忠告に従い、話を打ち切りに致します。

でももし通りすがり 2 さんの危惧するような人の場合、山谷さんの文章をだしにして話を続ける可能性があると思っています。私自身、他の掲示板などでやられたことがありますのでそれだけが心配です。

 1012 止めといたほうが・・・

通りすがり 2 - 2005/12/19 18:32 -

ただのおじさん、このような思い込みの強い人とは
ちょっと止めておいたほうが、、、、と思いますけど汗
勝手な読みで、やたら断定調で、富井さんの臭いがプンプン

 1011 私は信仰がなくなるとは言っていない

ただのおじさん - 2005/12/19 18:10 -

健やかではなくなる、と言っているのですけど、この違いは重大なので気を付けて下さいね。
キリスト教の信仰を捨てた、と、健全な信仰から外れた（名目上は異端と呼ばれていない）、では意味が全然違いますからね。

>無意識的にしろ、それぞれが「神学」し、「弁証学」している。それはあなたもお認めになるわけです。

こうも言っていないませんが、文章だけではこういう誤解はよくあることです。あなたにとってそう見えているからそれに合わせた言い方をしたら（私は断定していませんよ！気を付けて下さい）まるで私がその様に言っているように勘違いされているので一言申し上げておきます。私の言い回しに慣れておられないようですね。

『正論と言えば言えるかも知れませんが』は決して断定した表現ではありません。その後に『人ごとなら』と付け加えたのは、私が自分の表現の癖を自覚して付け加えたのです。

 1009 教会と神学と弁証学について（3）

[山谷](#) - 2005/12/19 16:45 -

「使信」をどう解釈し、どう適用するかによって、「地方教会」を構成する人々が、何を信じ、日々の生活をどう生き、何を宣べ伝えるかが、大きく異なってきました。

「使信」の解釈と適用をめぐる、初代教会が直面していた重大な課題が、少なくとも四つあったとすることができます。第一は、上述の、異邦人キリスト者は、律法を遵守しなければならないのかどうか、という問題。第二は、大多数のユダヤ人は、なぜユダヤ人のメシアにつまづいたのか、という問題。第三は、キリストの再臨は、なぜ遅延しているのか、という問題。第四は、キリストの受肉を否定し、天使崇拜を要求する、グノーシス異端の問題でありました。

これら四つの問題をめぐって、「使信」の正しい解釈と適用を「地方教会」に示すために、使徒たちは、手紙を書き送りました。それらが編纂されて、新約聖書正典が形成されたわけです。

「使信」の解釈と適用については、ある程度の解釈の自由、適用の自由が、許容され得る幅として、あってよいでありましょう。その自由があることによって、もろもろの地方教会に、それぞれの独自色が生み出されることになります。これが、「キリストのからだの多様性」です。しかし、許容され得ない誤った解釈、誤った適用もある、と紀元二世紀以降の教会は考え

始めたのでありました。

二世紀以降になりますと、何が誤った解釈、誤った適用であるかが、もろもろの地方教会の統一見解として、形成されて行くこととなりました。その結果生み出されたのが、「聖書正典」であり「監督」であり「信条」であり、また、統一見解を確認する協議機関としての「地方公会議」と「全地公会議」でありました。

特に重視されたのが、「三位一体論」と「キリスト論」についての誤りでありました。「使信」の解釈と適用をめぐって、次のような多くの異なる見解が提出され、問題となっていたのです。すなわち

「父だけが神であって、子は人間に過ぎず、聖霊は非人格的な力に過ぎない」
「父と子と聖霊という三人の神がいる」
「ひとりの神が、父と子と聖霊という役目を演じ分けた」
「キリストは人間であったが、聖霊を受けて神になった」
「キリストは神であったが、決して人間にはならなかった。人間であるかのような幻影を見せかけていたのだ」
「キリストは神ではあるが、最初の神から流出した多くの神々の中の一人に過ぎない」
「キリストは人間であって、一時的に神の力を受けたが、結局また元の人間に戻って、死んだ」

・・・などです。

以上の誤った見解に対して、使徒たちが宣べ伝えた「使信」の正しい解釈と適用を示し、弁明し、立証する学としての「神学」と「弁証学」が、もろもろの地方教会において、いやおうなく求められ、生み出されて行ったわけです。

もし、教会が、「三位一体論」や「キリスト論」において、見解の相違があっても、別にかまわない。どのような信仰を持ち、どのような生き方をし、どのような使信を宣べ伝えようとも、それは、それぞれのまったくの自由にまかせる。とにかく、聖餐の「交わり」は続けることにしよう。なぜなら、真理よりも和の方が大事なからだ。・・・そういう「オープン・コミュニケーション」の方針を、教会が紀元二世紀に定めていたならば、おそらく、神学や弁証学は、誕生していなかったのかもしれない。



1008 教会と神学と弁証学について（2）

[山谷](#) - 2005/12/19 16:43 -

初代教会には、ユダヤ人を主体とし、エルサレムに本拠地を置く「ユダヤ人キリスト者共同体」と、異邦人を主体とし、アンテオケに本拠地を置く「異邦人キリスト者共同体」とが、存在していました。

「ユダヤ人共同体」と「異邦人共同体」の間には、使徒たちが宣べ伝えている「使信」の解釈と適用をめぐって、見解が対立していました。

それは、律法をめぐる信仰理解の相違でありました。ユダヤ人共同体では、「キリストを信じるだけで救われる。ただし、救われたら、律法を遵守しなければならない」と考えられたのに対して、異邦人共同体では、「キリストを信じるだけで救われる。ただし、救われたら、自然法を遵守し、聖化の指針に従わなければならない。しかし、律法を遵守する必要はない」と考えられたのでした。具体的には、「救われたキリスト者は、律法が要求する割礼を受け、安息日を守り、食物禁忌に従わなければならないか、どうか」が争点でありました。

この問題をめぐり、もろもろの地方教会の間で対立が激化してきましたので、事態の收拾をはかるため、使徒たちがエルサレムに集まり、「公会議」を開いて、議論しました。最終的に大長老ヤコブが解決を示しました。それは、次のようなものでした。

1. ユダヤ人共同体と異邦人共同体は、それぞれの信仰の強調点の相違を互いに尊重しつつ、宣教方策上の「住み分け」を行う。すなわち、ユダヤ人の使徒は、ユダヤ人に向けて宣教し、異邦人の使徒は、異邦人に向けて宣教する。

2. ユダヤ人キリスト者は、従来とおり、救われた者は、律法を遵守することとする。一方、異邦人キリスト者は、従来とおり、救われた者は、自然法を遵守し、かつ、聖化の指針に従うこととする。ただし、異邦人キリスト者は、自然法では必ずしも明示されていない（1）血を飲む、（2）屠殺処理を経ない肉を食べる、（3）売買春をする、（4）偶像を礼拝する、という四つの行為を避けることを、聖化の指針に加える。それ以外については、（自然法と聖化の指針に違反するのでない限り）異邦人キリスト者は律法の要求に拘束されない。

3. ユダヤ人共同体と異邦人共同体は、「キリストにある一致」のしるしとして、お互いに「交わり」の手を差し伸べる。すなわち、（1）大長老ヤコブと、ユダヤ人共同体の代表であるペトロと、異邦人共同体の代表であるパウロが、一致のしるしとして握手を交わす。（2）相互に聖餐における「交わり」を持つ、（3）異邦人共同体は、ユダヤ人共同体の貧しい信者のために、募金を行って、支援の手を伸べる。

この「公会議」の様子と結果については、使徒言行録第15章とガラテヤ書に記載されていますし、募金については、コリント書で言及されています。

残念ながら、その後、宣教方策上の「住み分け」の規定は、破られることとなりました。ユダヤ人伝道者が、異邦人共同体への食い込み活動をはかり、その結果、ガラテヤのもろもろの地方教会は、異邦人キリスト者を主体としながらも、割礼を受け、安息日を守り、食物禁忌に従う方向へと進んで行ってしまったのです。

そこで、異邦人の使徒として立てられていたパウロは、異邦人キリスト者が、なぜ、割礼・安息日・食物禁忌に拘束される必要がないのかを、旧約聖書に基づいて弁明し、立証しなければならなかったのです。こうして、パウロは、「ガラテヤの信徒への手紙」を書くこととなったのでした。

そう考えますと、新約聖書の手紙は、使徒たちが宣べ伝えていた「使信」の正しい解釈と適用を「教会」に示すための「弁証」の書であった、と言うことができるでありましょう。つまり、新約聖書の手紙こそが、最初のキリスト教弁証学であったわけです。

 **1007** 教会と神学と弁証学について（1） [山谷](#) - 2005/12/19 16:43 -

ただのおじさんさま、レスが遅くなってしまって申し訳ありませんでした。

なぜ、神学と弁証学が必要なのか、小生なりに考えてみました。

まず、「キリスト教」とは何か、考えてみました。七つの要点に整理できるのではないかと思います。

1. キリストの受肉・十字架・復活・昇天・聖霊傾注によって、地上に、キリストのからだである「教会」が生み出されました。教会は、キリストの再臨の日を目指して、この世を旅しています。

2. 教会は、キリストのからだとしての「宇宙教会」という局面と、その地方的な現れとしての「地方教会」という局面を持っています。
3. 「キリスト教」とは、地方教会において信じられ、生きられ、あかしされ、宣べ伝えられているところの「使信」です。
4. 使信の内容は「聖書正典」に収められています。
5. 使信の解釈と適用は、地方教会の「監督」にゆだねられています。
6. もろもろの地方教会の間の統一見解が、「信条」としてまとめられています。もろもろの地方教会は、キリストにある一致の可視的表現として、聖餐による「交わり」を相互に持ちます。
7. 統一見解に異議を持つ地方教会は、もろもろの地方教会との交わりから離脱して、独自の「交わり」を確立します。それは、もろもろの地方教会との聖餐による交わりを断つ、あるいは、断たれることを意味します。

上記が、小生が理解する限りにおいての「キリスト教」ですが、これら七つの要点を、初代教会にあてはめてみましょう。

 1006 両方保つことが大事です

トリニティ - 2005/12/18 11:14 -

両方保てるのかという問いにも、答えておきましょう。

健やかさを保つには両方保つことが大事です。
そして、それは十分可能です。

私は信仰者の自立が何より必要なことだと考えています。それは裏返して言えば、自分とイエス様の間に何も入れないということです。

ですから、教会も牧師も神学も弁証学もすべて手段でしかなく、それらに振り回される必要はありません。それらは絶対的なものではないのです。しかし、捨てるべきものでもない。神様との関係を親密なものにするために、神様が手段として与えてくださったものです。ですから、必要に応じて用いるのです。

私市先生のHPをお勧めします。

<http://www1.ocn.ne.jp/~koinonia/index.html>

 1005 神学や弁証学の必要性2

トリニティ - 2005/12/18 11:02 -

ただのおじさんさん、こんにちは。私の礼拝は午後からなので、午前はゆっくりしています。私の書いたことは事実であって、それ以上ではないつもりです。

もう一度整理すると、
クリスチャンは、無意識的にしろ、それぞれが「神学」し、「弁証学」している。それはあなたもお認めになるわけです。

では、なぜ、「神学」「弁証学」という学問が必要になるかというと、その個々の「神学」「弁証学」が歴史の中で集積されてきた「神学」「弁証学」というものと照らしてどの程度妥当するものかということを知りたいときに、参考にすればいいわけです。個々の「神学」「弁証学」の偏りを修正してくれるのに役立つということになります。

あなたがおそらく言いたいと思うのは、神学や弁証学の必要性ではなくて、神学や弁証学があるために私たちが聖書のいのちを味わうことが難しくなっているという主張であるということでしょう。

確かに、そういう主張はよく聞きます。「神学や弁証学を学ぶと信仰がなくなる」と。それから、一步進めて「だから神学や弁証学はいらない」となるわけです。

しかし、それは残念ながら論理の飛躍があります。いのちが感じられず、信仰がなくなるのは神学や弁証学のせいでしょうか？NO,それはいのちのパンであるみことばを食べることをやめたからです。

パンはみことば、神学や弁証学は薬と例えることができるでしょう。

あなたの言うとおりの、確かに、パンを食べずに薬だけを飲んでいたら飢え死にするばかりです。

だからといって、飢え死にするのは薬のせいだといって、薬を投げ捨ててしまったら、それでパンを食べるようになるのですか？

しかも、異端という病気にかかったら、神学や弁証学という薬がなかったら、どうやってそれを治療するのでしょうか？

実際、神学や弁証学はいらない、聖書だけでいいのだという一見まともな主張をするなかから、異端が生まれてきたということは歴史が証明しています。

神様が神学や弁証学も与えてくださったことも感謝します。

神学や弁証学の薬瓶に書かれるべき注意書きは

「適切なみことばの食事をし、薬の服用に当たっては用法、用量をお守りください」ということでしょう。



1004 両方保てるのか？

ただのおじさん - 2005/12/18 09:20 -

なぜ、神学や弁証学などいない、という人が出てくるかをもう少し突っ込んで考えたらどうでしょうか？

たとえ実質的に「神学」し、「弁証学」しているとしても、その人にとっては単なる信仰生活の一部に過ぎず、学問という意識はありません。

確かにトリニティ氏の主張は正論と言え言えるかも知れません。でもその正論では、神学や弁証学などいない、という人は納得しません。なぜならば、そういう人は、現実問題として、信仰の健やかさの欠けた人のために困っている（経験がある）からです。根本主義運動だって、現実に信仰の健やかさの欠けた人が山ほど出てこなければ起こらなかった運動だからだし、敬虔主義（体験主義とも言える）も然りでしょう。神学議論に明け暮れるのも不健全、何でも聖霊、リバイバル、にくっつけて神学とやらを軽視しているのも不健全、社会運動や政治に過剰に入り込んで、教会から投票を訴えるような教会のある国もあるし、伝道のためには手段を選ばない教会もある。

人間、片方に極端に行かれた時に、バランスをとれることが容易にできる事態になることは稀

なのです。大抵の場合、二項対立になってしまうというのが現実であり、うまく3項とかもっと大きな選択肢が見えなくなってしまうのが人間の弱いところです。私だって、人ごとならば、冷静に、「バランスが大事です」と言うでしょう。でも当事者になって、教会がすったもんだしたときでもその態度貫けますか？

現実には何例かその様な事態にあった当事者から話を聞きましたが、そんな人ごとでは解決しません。

問題は教会運営の領域にかかわり、そこでは人間の弱さがまともに顔を出すからです。

そして牧師が自分の属する教会を追い出されるか、教会が分裂するかが関の山です。

私の質問はもっと実践的な側面を踏まえてしたつもりです。

1003 神学や弁証学の必要性

トリニティ - 2005/12/17 21:50 -

神学や弁証学の不必要を説いている人も、プリミティブには実は、「神学」し、「弁証学」していると思います。

そもそも、聖書を信仰者が断片的にではなく総合的に捉えようとするなら、その態度自体が神学的と言えるわけです。また、同じように、信仰者が信仰を持たない人に、自分の信仰を伝えようとするなら、それは弁証学的と言えるでしょう。

そして、神学や弁証学にしても、歴史の中で「神学」し「弁証学」してきたことの積み重ねが「学問」として体系化されたまでのことです。

ですから、実は無意識的に「神学」し、「弁証学」している人が神学や弁証学をいらないと否定することは自己矛盾であると思います。

聖書には2面あるのであって、それは「光」つまり知恵、ヌース（知性）に関わる面と「いのち」つまり霊に関わる面です。

神学や弁証学を否定する人は、「いのち」を重要視するあまり、「光」を拒絶し、神学や弁証学を「いのち」の代用にしてしまう人は「光」を重要視するあまり、「いのち」を拒絶するのです。

両方必要なのです。両方を持たなければ、本当の意味で信仰の健やかさは保てません。

1002 というのも

ただのおじさん - 2005/12/17 19:19 -

神学や弁証学なんてなくたって信仰には関係ないし、それらがあるために伝道者が頭でっかちになって、教会が伝道する場所から学問を教える会になってしまうようになり、教会を通して働かれる神様の働きを妨げてしまうのでその様なものは私の教会の伝道者にとっては困ると考える人も知っています。敬虔に信仰生活を送り、1人でも多くの人が救われるのがクリスチャンの日々の生活なのだから、そもそも神学や弁証学などいるのか、という感じですね。

聖書のみ、で十分。神学や弁証学のようなものは人間の頭でこさえた思念の産物、で無くても構わない、位に考えている人も知っています。

1001 山谷さんへ質問

ただのおじさん - 2005/12/17 19:05 -

ここでも再建主義をウォッチングするという趣旨のもと、いろいろな神学と呼ばれるものが飛び交っています。私もその様な範疇に入る行為もしてきたのではないかと思います。そもそも神学とは何でしょうか。弁証学とは何でしょうか。このようなものを好む人もいれば、忌み嫌う人もクリスチャンの中にはいるのです。

山谷さんにお答えしていただきたいのですが、神学や弁証学の存在理由、これらを軽視した場合のデメリットなどが私には未だにはっきりしません。そもそもこれらのものは歴史的にどの

ようにして形成されてきたのですか。

 二項図式から三項図式へ
1000

[山谷](#) - 2005/12/14 22:23 -

このところ気になっていたことからを整理するために、小一時間を用いて、小論を作成してみました。ご笑覧くだされば幸いです。

[「単一の行為・二つの意志」](#)

 一番の問題
999

通りすがり 2 - 2005/12/13 11:22 -

山谷氏もルーク氏も再建主義を理解しているし、
しようとしているけれど、
富井氏にはそれがまったくない。
彼は両氏を理解していない、あるいは
しようとしていないどころか、
自分が信奉する再建主義自体を理解していない。
多分それができたら、彼は危ないことになるう。
そして最も問題なのは自分自身を理解していないし、
しようともしていないことだ。

 聖化論の問題では？
998

[山谷](#) - 2005/12/13 09:56 -

十字架の不在、というようりは、むしろ、聖化理解の問題であろう、と小生は思います。

わたしたちが生きている「いま」、すなわち、初臨と再臨の間の「中間時」においては、人類の聖化のプロセスが進行中ですから、一方で愛の実を結ぶ人がいれば、他方で肉の実を結ぶ人もいる。それゆえ、社会の秩序と安寧を維持する「統治者」としての国家権力が、必要になるわけですね。

聖化のプロセスが完了してしまえば、国家権力は不要になる。聖化が完成されるのは、キリスト再臨の時です（テサロニケ前書5:23）。ですので、キリストが再臨し、聖化が完成されると、国家権力も不要になって、廃棄されるわけです（コリント前書15:23-24）。

そうしますと、キリスト者の「いま」は、聖化の道を歩み、愛の実を結んでいけば、よい、ということになります。

ところが、再建主義者の聖化理解だと、国家権力を征服して司法律法を適用することが、キリスト者の聖化と分かちがたく結び付けられている。むしろ、キリスト者の聖化の主要目的は、律法に根拠した再建主義社会の建設だ、ということになっている。

つまり、「再臨のキリストが聖化を完成なさせて、その結果国家が廃棄される」という聖化論か、「キリスト者が国家を征服して、その結果キリストが再臨する」という聖化論か、という違いであるわけです。



996 十字架不在

通りすがり - 2005/12/13 02:42 -

なぜ、エリート意識をくすぐるか？という理由はよくわかりました。

それではその手法にひっかかるのはなぜでしょうか？

人がエリート意識に魅かれてしまったり、ほめられて有頂天になってしまったする裏には、十字架の不在があるのではないのでしょうか？

ペテロがイエス様をいさめたように、また、弟子たちが、御国が地上に到来した時を想定して権力争いを繰り広げたように。



995 エリート意識の背景（2）

[山谷](#) - 2005/12/12 11:50 -

小生の場合、再建主義者と同様、人間の理性能力は全的に墮落している、と考えます。しかし、人間の理性能力を補完するのは、聖書啓示<だけ>であるとは考えません。

異教徒の良心に、神の指によって刻印された「衡平」の法感覚である、「聖霊の照明としての一般恩恵」

統治者が、正当に法を「制定」することを可能にさせる、「知恵の照明としての一般恩恵」

「国家の絶対主権」と「社会の分散主権」（宇宙論的な15の法領域）を通じて人類を管理するストイケイア（宇宙の構成に関わる諸霊）である、「天使的照明としての一般恩恵」

小生は、一般恩恵として、少なくとも上記三種の「一般恩恵」が存在することを、聖書に拠って「前提」として考えます。つまり、全的に墮落した人間の理性能力を補完するものとして、「聖書啓示の照明」「聖霊の照明」「知恵の照明」「天使的照明」があるのです。

主イエス・キリストは、王として着座され、名目上の王となられたばかりではなく、「聖書啓示の照明」「聖霊の照明」「知恵の照明」「天使的照明」を通じて、万物を統治しておられるので、実際上においてもキリストは王である、と、小生は信じます。ただし、人類の聖化が未完成である現時点においては、「中間領域」としての「天使的照明」は、なお、存続しなければならない、と小生は考えます。

これに対して、再建主義者は、キリストは単に名目上の王であるだけであって、実際上は王ではない、と言うのです。なぜなら、キリストは「中間領域」を、まったく統治しておられないからです。

キリストが実際上も王となられるためには、「聖書律法の決疑論的適用」を行う、「聖書と神学の専門家」としての「エリート」たちの助けが、ぜひとも必要だ、というわけです（！）



994 エリート意識の背景（1）

[山谷](#) - 2005/12/12 11:49 -

再建主義の世界観は二項対立図式ですので、必然的に「エリート主義者」にならざるを得ないのだろう、と、小生は考えます。

つまり、人間の理性能力は全的に墮落している。この墮落した理性能力を補完出来るのは、聖

書啓示<だけ>である。このため、人類が理性能力を使ってするあらゆる仕事に対して、「聖書律法の決疑論的適用」を行う、「聖書と神学の専門家」が、絶対に必要となるわけです。

司法を例に考えてみましょう。

上記の考え方ですと、人間が理性能力を用いて「司法制度」を構築するためには、必ず、聖書を参照しなければならないことになる。何を犯罪とし、犯罪をどのような手続きで処罰し、刑罰の程度と内容をどう決めるか、について、必ず聖書に根拠しなければなりません。

そこで、わたしたちが聖書を参照しますと、「7を70倍するまで赦しなさい」「右の頬を打たれたら左の頬を差し出しなさい」「復讐してはならない」「呪うのではなく、祝福しなさい」という福音書の教えに直面してしまう。

この福音書に拠って司法制度を構築するとしたら、人類全員の聖化が完成される終末の日以降に実施するのでない限り、とても治安が維持できないであろうことは、容易に予測できます。

そこで、聖書の別のページを繰らなければならない。すると、司法制度について聖書が言及しているのは、「古代パレスチナのイスラエル氏族共同体に与えられた司法律法」を含む、モーセ律法だけである、ということになる。

こうして、再建主義者は、何を犯罪とし、犯罪をどのような手続きで処罰し、刑罰の程度と内容をどう決めるか、について、モーセ律法中の「司法律法」に必ず根拠しなければならない、と言うわけです。

ところが、問題は、そう簡単ではない。

エフェソ書は「司法律法は廃棄された」と言い、ローマ書は「異教徒の心に神の法が刻印されている」と言い、ペテロ前書は「人間が立てた司法制度に、キリストのゆえに、服従しなさい」と言う。それを受けて、カルヴァンは「司法律法によって統治するユダヤ人国家のごときものを、現代に再現する必要はない」と言い、「司法律法廃棄論は聖書啓示に対する冒涇だ、と主張するやからは、まったく馬鹿だ」と言い、ウェストミンスター信仰告白は「司法律法は、ユダヤ人国家の消滅と共に消滅した」と言うのです。

すると、再建主義者は、聖書と神学が「司法律法は廃棄された」と明言しているのにもかかわらず、何とか巧妙な形を使って、司法律法を延命させなければならない。しかも、聖書と神学という「オーソドキシ」（正統の系譜）と矛盾しないかたちで。

このような芸当が、普通のキリスト者に出来るわけがありません。極めてソフィスティケートドな神学、つまり、詭弁を自在に操って人を煙に巻くような神学をやるのでない限り、到底不可能でありましょう。

詭弁的神学として、二つ典型例を挙げましょう。

ひとつは、「聖化の指針としての律法の第三用法は、現経綸においても有効なのだから、この第三用法の中に、司法律法をまぎれこませて、温存させればよい」とするような考え方。

あるいは、「ウェストミンスター信仰告白は、司法律法の廃棄を明言しているが、万人の良心の「衡平」の法感覚は有効だとしているのだから、この衡平の中に、司法律法をまぎれこませて、温存させればよい」とするような考え方。

このように、白を白と明言している文言を「実は黒と言っているのだ」と言いくるめるような

考え方は、普通のキリスト者の常識から乖離するだけでなく、普通のキリスト教神学からも乖離せざるを得ないでしょう。これが、「孤高の少数者の道を選択するエリート主義としての再建主義」の姿だと思います。

 993 霊的エリート意識 通りすがり - 2005/12/11 09:40 -

ミレニアムでは「仮想敵国の手法」に続いて「霊的エリート意識手法」が用いられています。

「霊的エリート意識手法」これはカルトにおいて常套的に用いられている手法です。

再建主義的な将来のイメージを抱かせ、それに同意するものは霊的なエリートであるというわけです。それゆえ他の普通のクリスチャンとは意見があわなくなったり、所属教会との摩擦が起こることを覚悟しなさいというわけです。

 992 気に病まないで [山谷](#) - 2005/12/10 23:33 -

ドクター・ルークは、再建主義者からいろいろ揶揄されているようですが、気に病むことはないと思います。

なにしろ、カルヴァン自身が『キリスト教綱要』で、こう断言しているのですから。

「『司法律法が廃棄されて、諸国の法がそれにとって代わるというのは、聖書律法に対する冒涇だ』というやからがいるが、それは、まったく馬鹿げている」

つまり、カルヴァンは「再建主義者は、まったく馬鹿だ」と言っているのです。

ここで、カルヴァンが「ばかと言ってはならない」というキリストの律法に違反しているという問題は、スキップしてよいでしょう。

ともかくも、カルヴァンから「まったくの馬鹿だ」と言われている人たちが、「自分たちこそカルヴァンの最も正統な後継者だ」と言っているのですから、これはもう、お話にすらならないことなのです。

 990 ニッポンキリスト教考（2） [山谷](#) - 2005/12/10 23:28 -

「ニッポンキリスト教」を見てみますと、すでに・新経綸を生きつつも・いまだ・旧経綸に足をつっこんでいる。つまり、ストイケイアが日本人を管理するために用いている「枠組」から、わたしたち日本人キリスト者は本来的に自由にされていながらも、いまだ、完全に自由になっているわけではない、という状況があるわけです。

ストイケイアが日本人を管理するのに用いる「枠組」としては、言語がありますし、沈黙の言語としての身体言語や空間感覚がありますし、他者との関係性、秩序感覚、思考パターン、服飾や食物や音楽など、まさに、「宇宙論的な15の法領域」に展開される「日本的なるもの」が、いろいろあるわけです。さらに「枠組」の中の細かい「枠組」として、関東文化圏と関西文化圏、昭和世代と平成世代、X世代とY世代、など、いろいろあります。

これとまったく同じことで、ストイケイアが韓国人を管理するのに用いる「枠組」があるわけですし、アメリカ人を管理するのに用いる「枠組」があるわけですし、ユダヤ人を管理するのに用いる「枠組」があるわけです。

それぞれの国のキリスト教会は、聖化の途上にあるわけですから、それぞれのストイケイア的な特色を、それぞれがそれなりに保持し続けていることになる。韓国のキリスト教会が権威主義的であったり、アメリカのキリスト教会が体験主義的であったり、ユダヤ人のキリスト教会が律法主義的であるのは、そのためでありましょう。

「新経綸」を生きるキリスト者が、ストイケイアの支配から解放されていることを告知するカリスマ（聖霊の賜物）が「異言」でありましょう。キリスト者が異言を語るとき、「旧経綸」を管理するストイケイアは、すでに打破されており・キリスト者を支配し得ないことが、絵画的に物語られるのです。

「新経綸」を生きるキリスト者が、「旧経綸」の支配を脱するためのひとつの方法が、教会を改革することです。新しい言葉を語る。新しい人間関係を生きる。新しい価値観を持つ。新しい思考法をする。新しい服装をする。新しい音楽を用いる。などなど、いろいろな改革があるでしょう。これが「新しい革袋」と呼ばれるものでありましょう。

しかし、注意しなければならないのは、「新しい革袋」も、100年ぐらいたつと、ストイケイアの「枠組」として利用されるようになってしまう、ということです。つまり、100年を経て、いのちの「じつ」を失い、形骸化してしまった、かつての「新しい革袋」としての「死んだ伝統」です。

恐るべきことに、ストイケイアの打破を告げる「異言」でさえも、いのちの「じつ」を失えば、単なる形骸化した「死んだ伝統」となってしまう、ということです。最近、アロハにジョーンズで説教する教会があるそうです。いまはこれが「新しい革袋」であるわけですが、これとても、いのちの「じつ」を失ってしまえば、100年後には、ストイケイアが「枠組」として利用する「死んだ伝統」になってしまいうでしょう。

大切なことは、キリストの教会の中にある「ストイケイアの働き」を見分ける、霊的な識別力。形骸化した「死んだ伝統」を「生きた伝統」にする、教会の刷新。「新しい革袋」を作り出す、「教会の改革」という聖霊の働き。「キリストのいのち」の充足を生きることがもたらす「キリスト者の自由」の享受。これらでありましょう。

しかしまた、「忍耐」も必要です。現在が、初臨と再臨の間の「中間時」である以上は、花嫁である教会は、なおも忍耐深く、聖化のプロセスを歩み続けなければならないのです。いわば、「旧経綸」というシミを抜くための「忍耐」という美颜パックを、花嫁は、まだつけていなければならない段階なのです。花婿なるキリストがまだ再臨しておられないのにもかかわらず、「忍耐」という美颜パックを勝手に外してしまってはなりません！

小生が考えるに、「ニッポンキリスト教」「カンコクキリスト教」「アメリカキリスト教」を、あきらめてしまってはならないのです。それは、まだシミ抜き処理が完了していない花嫁なのですから。「忍耐」という美颜パックが要求されることに我慢ならないからといって、美颜パックと一緒に花嫁までもゴミ箱に捨ててしまってはならないのです。

す。

ストイケイアとは、墮罪後の人類が自滅しないよう、神から「管理者」に指定されて「世界管理」の任務を遂行している天使的諸力です。

墮罪後の人類は、ストイケイアによって、国語、民族、宗教、文化の「枠組」に沿った「分散管理」を受けています。分散管理は、「人類が一体化して神への集団的反抗を行う」という「バベルの塔の再来」が阻止されるためです。この「分散管理」が「旧経綸」であるわけですね。ガラテヤ書は、旧約律法はストイケイアが契約当事者に組み込まれているゆえに、旧約律法をも「旧経綸」とみなしています。

この「ストイケイアの支配」を打破したのが、主の高挙の出来事（受肉・十字架・復活・昇天）でありました。主の高挙により、ストイケイアは武装解除され、キリスト頭首権に従属させられ、「キリストに奉仕するしもべ」とされました。

いまやキリスト者は主の高挙によって、ストイケイアの支配から解放され、「キリストのからだ」とされ、「キリストのいのち」に満たされ、「キリストにある自由」に参加しています。これが「新経綸」です。

キリスト初臨と再臨の間の「中間時」においては、ストイケイアがキリストのしもべとして、引き続き墮罪した人類を「分散管理」しつつも、その一方ですでに世界には、「新経綸」を生き始めているキリスト者が出現しています。

つまり、旧経綸に生きる人類と、新経綸に生きる人類が、混在した状態。これが、「中間時」であるのです。

問題は、新経綸を生きるべきキリスト者と言えども、この「中間時」にあっては、旧経綸を完全に脱することがなかなか難しい、ということです。すでに・新経綸を生きつつも・いまだ・旧経綸に足をつっこんでいる・キリスト者。これが、いわゆる「ニッポンキリスト教」でありましょう。

聖書ではパウロがこの点を、「ベール問題」で扱っています。

コリントの教会では、女性信徒が礼拝でベールを着用すべきがどうかで、議論が起きました。パウロからみれば、キリスト者は今や、新経綸を生きる者であるのです。つまり、キリストに結ばれている限りにおいて、男も女もない、ということになります。

しかし、現実問題として、初代教会の大部分は、旧経綸に足をつっこんだままでありました。「諸教会の間には、ベールを着けないで礼拝する習慣は、存在しない」とパウロが言明している通りです。

諸教会は、すでに・新経綸を生きつつも・いまだ・旧経綸に足をつっこんでいる。いのちの本質という点から見れば、初代教会は「新経綸」を生きるものとされながらも、ベール着用や奴隷制維持や男性優位という点では、「旧経綸」を脱しきれておりませんでした。

なぜ諸教会が「旧経綸」を脱しきれていなかったかと言えば、ストイケイアが「分散管理」する墮罪した人類の大部分が、いまだに「旧経綸」を生き続けており、「旧経綸」の圧倒的な影響力に対して、聖化の途上にあるものとしての諸教会は、すぐさま完全離脱することは、出来なかったわけです。

このため、現実的対応として、コリントの教会の女性はベール着用で礼拝を続けることとなっ

たのです。が、だれのためにベールを着けるかと言えば、自分のためでもなく、男性のためでもなく、教会のためでもなく、神のためでもなく、「旧経綸」を管理するストイケイアのためにベールをかぶる、ということであったのです。

988 仮想敵国の手法

通りすがり - 2005/12/10 13:51 -

ミレニアムにおいて、luke氏への批判が展開されています。
私は共産主義の国などが時々行う仮想敵国の手法に共通するのを感じます。ある国を敵国に見立て、その国に対する批判感情を煽り立てることによって愛国心を高めようとするのです。

今回の論争の最初のluke氏側の訴えに「私が書いてもないことを、書いているように批判しているが、正しくこちらの意図を理解してから批判してほしい。」というような意味の発言があったと思います。luke氏の願いもむなしく、その傾向は論争後ますます強まっているように見受けられます。

しかし、それはミレニアムの根本的な姿勢のようで、変えようが無いのかもしれませんが。常に対立思想を提示し、それに対する敵愾心を煽り立てることによって再建主義への忠誠心を増し加えようとしているように見えます。

Luke氏との論争以前では奥山氏であり、ディスペンセーション主義であり、山谷氏であり、フルプレテリストであり、いろいろと遍歴してきました。現在はluke氏に一番のターゲットが当たっているのでしょうか？

しかし、この手法はluke氏自身もよく用いていたのではないかと思います。luke氏の場合は「ニッポンキリスト教会」という鹿島氏が用いだった用語を用いて、現在の様々なキリスト教会への批判を展開してきました。動機と表現方法のソフトさがミレニアムとの違いでしょうか。

そのような視点から両者は似た点があったのかもしれませんが。

987 目的刑主義と応報刑主義（2）

[山谷](#) - 2005/12/09 17:01 -

「アーメン」と唱和したのであれば、カルヴァン主義者とウェスレアン・アルミニウス主義者は、お互いの世界観的立場を維持しつつも、共に協力して「司法制度」を維持して行かなければならないことになる。

では、それは、どのようになされるのか？ それは、「人間が立てた制度」としての司法制度において、「刑罰の内容と程度」を、統治の現実の必要に応じて、自由に「制定」する、ただし、法の「制定」は、神が万人の心に刻んだ「衡平」の目的に適う限りにおいて正当とされる、というやり方によって、です。

つまり、決定論的世界観に根ざす「目的刑主義」と、非決定論的世界観に根ざす「応報刑主義」を併用しつつ、統治の現実の必要に応じて、重心点を移動させる、というやり方です。

「統治の現実の必要」を考えますと、18世紀においては、応報刑主義による公開処刑の場が、しばしば、民衆による騒擾、騒乱、さらには、国王に対する暴動の発火点となっていました。ゆえに、「統治の現実の必要」に応じて、政府は、公開処刑を廃止し、監獄制度に移動して

いった、という事実があります。

さらには、19世紀の産業革命以降になりますと、決定論的世界観である「科学」が、世界観の主流となり、犯罪についても、科学的・合理的に説明を与えることが出来ると考えられるようになりました。ゆえに、「統治の現実の必要」に応じて、政府は、監獄制度を「目的刑主義」の装置として用いるようになっていった、という事実があります。

現状の日本の司法制度では、「刑罰の内容と程度」については、刑法学説の中で「目的刑主義」と「応報刑主義」とが、理論として相対立しつつも、実際には、その折衷案的な方法が、「統治の現実の必要」に応えるかたちで選択されているわけです。

これに対して、カルヴァン主義者もウェスレアン・アルミニウス主義者も、「アーメン」と言うことが出来るのですが、再建主義者は、絶対に「アーメン」と言うことが出来ないのです。

986 目的刑主義と応報刑主義（1） [山谷](#) - 2005/12/09 17:01 -

ヴァンティル弁証学を要約しますと、カルヴァン主義的世界観とは「決定論的世界観」であるゆえに、決定論的世界観である「科学」に対して有効な前提を与えることができるのは、カルヴァン主義的世界観である。・・・ということになります。

これに対して、ウェスレアン・アルミニウス主義は、世界の内部に人間の自由意志という「非決定論的要素」を認めるゆえに、ウェスレアン・アルミニウス主義は、決定論的世界観である「科学」に対して、有効な前提を与えることができない。・・・この理由をもって、ヴァンティルは、ウェスレアン・アルミニウス主義を「偽」として退けるわけです。

この、決定論的世界観としての「科学」を、刑法学説の場に置きますと、決定論的人間観に立つのは「目的刑主義」であるわけですから、ヴァンティ尔的に考えるとするなら、こういうことになります。すなわち

カルヴァン主義的世界観とは「決定論的世界観」であるゆえに、決定論的人間観に立つ「目的刑主義」に対して有効な前提を与えることができるのは、カルヴァン主義的世界観である。・・・ということになります。

これに対して、ウェスレアン・アルミニウス主義は、世界の内部に人間の自由意志という「非決定論的要素」を認めるゆえに、ウェスレアン・アルミニウス主義が前提を与えることが出来るのは、非決定論的人間観に立つ「応報刑主義」である。・・・ということになります。

では、カルヴァン主義者とウェスレアン・アルミニウス主義者が、司法の責任を負う場合、両者はどのように手を携えて行ったらよいのでしょうか？

聖書と神学が何と言っているか、耳を傾けなければならないでしょう。

ペテロ前書2:13は、「人間が立てた司法制度に、キリストのゆえに、従いなさい」と明言しています。

ローマ書2:14は、「異教徒の心にも神の法が記されている」と明言しています。

エフェソ書2:15は、「司法律法は廃棄された」と明言しています。

以上の聖書の言明に基づいて、カルヴァン主義の神学は次のように言うのです。

「今日、われわれは、ユダヤ人が持っていたような王国や領域主権を得ようと求むべきでないし、ダビデの世俗的王国のようなものを求むべきでもない」（カルヴァン『申命記講解説教集』第155編）

「神は、諸国が遵守すべき法を、モーセを通してはお与えにならなかった。神はただ、ユダヤ人の国家を選んで、特別な保護下に置いて指導し、神御自らがユダヤ人のために法を制定されたのである」（カルヴァン『キリスト教綱要』第4編20章16節）

「“司法律法が廃棄され、諸国の新たな法がそれにとって代わる事態は、聖書律法に対する冒涇である”と主張する者がいるが、まったく馬鹿げている」（カルヴァン『キリスト教綱要』第4編20章16節）

「政治体としてのイスラエルの民に、神は様々な司法律法を与えたが、それはこの民族の国家と共に消滅し、今や、その持つ一般的公正さ(General Equity)が要求し得る以上のことは何も義務づけはしない」（『ウェストミンスター信仰告白』19:4）

上記の聖書と神学が言うことに対して、カルヴァン主義者もウェスレアン・アルミニウス主義者も、共に心を合わせて「アーメン」と、大きな声で唱和するのです。

 985 ちょっとずれてきたような？ 通りすがり 2 - 2005/12/09 11:05 -

ここの最近の傾向も死刑問題になっちゃって
ちょっと再建主義とはずれてきたような？

 984 最近の傾向 患者 - 2005/12/08 23:39 -

最近の傾向では正確に統計をとってはいないですが、特定の間人間関係をもたず、無差別的に殺人をするケースが多いと思います。

人を殺すには相当の理由が必要であるという外科医さんは現在の時代認識が甘いように感じます。

相当の理由が必要であると普通は思うのですが、理由もないのに殺人が急増していることが現代の恐怖です。

外科医さんが具体的にあげたケースに対しての死刑の必要性には被害者の心情という面から否定はいたしません。しかし、短絡的に他殺＝死刑という図式が以下に恐ろしい結果をもたらすかという時代認識は一考していただきたい。

人を殺すのに理由がなくなっている現代。
自らを殺したい人間の急増。
ただ、苦痛を逃れたいという傾向。
死刑が人道的に苦痛少なく行われるという現実。

地獄が現実になりそうです。



983

死刑が反って犯罪を助長する？

外科医 - 2005/12/08 23:25 -

自殺の手段として他殺を行い死刑になることを選択する人間が、年間3万人、予備軍を入れれば10万人になるかも知れませんが、その中に、果たして何人いるのでしょうか？私は、宅間守は極めて稀な例外であると考えますが、如何でしょ？人を殺すには、相当の理由が必要です。友人の検事は、通常の犯罪であれば、犯罪者と自分とは、境遇の違いや、ボタンの掛け違い程度の、当に紙一重の差しか無いと言っていました。しかし、殺人事件の場合は、殆どの場合、加害者と被害者は顔見知りで、例えば、子供が殺人事件の被害者の場合、加害者の占める割合で一番多いのが、実の親や、肉親であります。そして、加害者が被害者の殺害に至った理由には、それなりの必然があったようです。また、殺意は抱いたが、殺人事件に至らなかった事件では、死刑の存在や、収監されることが心理的なブレーキとなったと言う事です。だからと言って、殺人事件が正当化されたり、許容されたりするわけではありませんが、いずれにしても、自分が死ぬために、見ず知らずの他人を、病的に逆恨みして、8人も殺傷した宅間守のケースは極めてレアなケースであると言えます。何故なら、子供を殺すという行為には、通常、かなり強い心理的ブレーキがかかるからです。いや、子供を殺すというよりも、殺人行為には強い心理的ブレーキがかかります。自分を殺すよりも、遥かに強い意志が必要です。自分を殺す為に、死刑になるために、殺人をすると言うのは、論理の飛躍があるように思います。昨今の判例を見ると、例えば、沖縄で14歳の少女が殺害された事件では、その殺害方法や動機が非常に残酷であったにも係わらず、裁判官は、被害者が一人であるというのを理由に、死刑の求刑に対して、無期懲役を言い渡しました。被害者遺族は遣り切れない思いをマスコミに語っていました。被害者が一人であっても、被害者に瑕疵がなければ、犯罪抑止効果の有無に拘わらず死刑を選択すべきだと私は思います。



982

例外といえるのでしょうか？

患者 - 2005/12/08 19:50 -

外科医さんへ、
例外といえるのでしょうか？日本における自殺者の数の多さを見た時に、決して例外とはいえないように思えます。かたや、凶悪犯罪が急増し、かたや、自殺者が急増しているわけです。

この両者がリンクされてしまうと、日本は即、地獄絵図になってしまうでしょう。

まへの投稿にも書きましたが、自殺者が恐れることは自殺が失敗し、障害者などになって生きてゆかねばならなくなった場合、すなわち死ねなかった場合です。

無理心中で家族を殺したのち、自分の番になって自殺に失敗という事例もあります。自殺より他殺が容易なわけです。

ここで、他殺＝死刑というつながりができてしまうと、確実に、また、人道的な見地から、苦痛なく死ぬというのは、自殺志願者にとってはこのうえもなくおいしい話です。

もし、死刑制度が確立されてしまうと、日本は地獄と化すでしょう。

人道的な見地をクリアーし、かつ、犯罪者や自殺志願者が震え上がるほど抑止効果のある方法があればいいのかなとも思います。



981

山谷さんへ >世界観の違う人と話はできません
よ！

ただのおじさん - 2005/12/08 19:25 -

世界観が違っていると話がすれ違うことは、徹頭徹尾、私は思い知らされています。死刑に対する問

題も結局は世界観の違いに帰し、いくら話しても時間の無駄なので世界観の違う方との話は止めた方が良くと思います。山谷さんはお気付きのようですが。



980 神のわざ

ただのおじさん - 2005/12/08 19:16 -

クリスチャンが世に警告するのは、世の光、地の塩たるクリスチャンの働き。
しかし、人間が何かできると考えるのは、神の摂理、主権を蔑ろにした律法主義でありクリスチャンのすべきことではない。人間は今生きているのさえ神の恵みなのであって、その人間が何かできると考えるのは間違いなのである。



979 宅間被死刑囚は例外

外科医 - 2005/12/08 19:14 -

患者様、こんばんは。大教大附属小に於ける宅間守の極悪非道な行いまで想定しての法整備は無理ではないかと思考します。あの事例は極めて歪んだ人格障害、否、統合失調症に限りなく近い精神異常者が引き起こした犯罪です。子供を守る手立てを講じるより外ありません。今回の栃木県今市市の女児猟奇殺人事件の犯人も、既に頭の螺旋が外れた鬼畜の仕業であり、教育刑を課しても、矯正不能でしょう。神戸連続児童殺傷事件の鬼酒薔薇も、医療少年院で果たして教育効果が得られているのか、少年法の壁に妨げられていて詳細は不明です。昭和38年に発生した『杉並少年通り魔事件（男児のみを襲い、性器切断の重傷を負わせた）』の犯人も、昭和44年(1969)8月18日、2年8ヶ月の刑期を経て22歳のときに川越少年刑務所から仮釈放されたが、4ヶ月後から20件の放火と窃盗を繰り返し、路上で中学3年生男子をカナヅチで何度も殴り付けて3週間の傷を負わせて、昭和45年8月5日逮捕されました。彼は悪びれずに「自分にとって犯罪は趣味であり、一種のスポーツであり、悪についてはその方法を考えることが快樂で、私はそれに溺れていた」と裁判において発言し、父親は「息子のことは前の事件の際に、被害者の方々の謝罪のために非常に苦労した。有り金すべてのほかに多額の借金をして被害者にお詫びをした。今度の事件では家も土地も手放して、被害者の方々にお詫びするほかない。こうした状況だけに、私としては息子にはもう一生刑務所から出てきてほしくない。もう一度刑務所から出てきても息子の性格が直っている望みは持てない。私が裁判長にお願いしたいことは、息子に二度と刑務所から出てこないような判決を下してほしいことであります」と証言した。これも、犯罪傾向は服役では改善出来ないことの傍証であると考えます。また、1994年に大阪、愛知、岐阜の三府県で11日間に男性四人を殺害した連続リンチ殺人事件の控訴審判決公判で、名古屋高裁の川原誠裁判長は十四日、強盗殺人などの罪に問われた当時十八十九歳の男性三被告のうち一人を死刑、二人を無期懲役とした一審判決を破棄、全員に死刑を言い渡したが、これも、極めて妥当な判決であると考えます。司法自らが、収監して矯正出来ない人間がいることを認めた判決であると考えます。
ハリファックスさんの意見は、現実問題として、日本だけでなく殆どの世界で実行不可能でしょう。イスラム圏でも？まあ不可能でしょう。



978 御国建設の人材がいる

改善党 - 2005/12/08 14:49 -

人のことは言えないのですが、キリスト者、クリスチャンは立派な言葉数が多い割に実現、実施している事は驚くほど少ないのが現状ではないでしょうか。もっと不言実行がいいのかもしれない。

ところで、御国が来ますようにと祈りますよね。御心の天に行われるように地にも行わせ給えと。どなたかキリストの御国を具体的に描いて書いてくれませんか。御国とはこの地球上に

でしょうかね。聖書を読んでも納得できる箇所が少ないのですよ。人間のための、自然の緑に溢れた御国、ユートピアの御国、科学技術がうまく活きた御国。

再建主義者は明らかにこの地球を伝道と教育で変えて、御国にしようと言っているのでしょうか？ 勿論聖霊の力を借りて。それにしても御国は気の遠くなるような難事業ですね。統一協会やエホバの証人は異端ですが彼らに心酔してついて行く者も多いのですよね。正統派といわれるキリスト教の方は言葉遊びをし過ぎるのではないのでしょうか。だからといって賛美中心、交わり中心も考え物ですがね。

977 「衡平」と「裁判員制度」

[山谷](#) - 2005/12/08 14:42 -

万人の心に善悪正邪を適切に判断できる「衡平」の法感覚が、神の指によって刻み込まれている。これが、ローマ書の言う「自然法」でありましょう。

そうして、国家は、「衡平」という目的に適う限りにおいて、必要に応じて自由に法を「制定」することが出来る。これが、土地や時代によって多様な違いを持つ「国家の公法」でありましょう。

さて、わたしたちの国では、いよいよ「裁判員制度」が導入されることとなりました。そのように、新たな「国家の公法」を「制定」したわけです。

今後は、日本国民67人にひとりの割合で、生涯に一度「裁判員」として義務を果たさなければならぬことになります。

欧米の陪審員制度が、権利関係の確認のような「軽い」裁判も扱うのに対して、日本の裁判員制度は、死刑判決が当然予想される重大な殺人事件「ばかり」を扱う、という点を、わたしたち日本人は、十分に認識しておかなければなりません。あなたが、あるいは、わたしが、裁判官と一緒に判事席に座って、凶悪犯罪について事実関係を確認し、刑法上どの罪に相当するかを判断し、どれぐらいの刑罰を与えることが妥当かを、決めるのです。

これは、欧米の陪審員制度と異なります。陪審員は、有罪か無罪かを評決するだけですが、日本の裁判員制度は、それにとどまらず、死刑にするか、無期懲役にするか、有期刑にするかについても、判断を下さなければならないのです。2009年5月以降は、わたしが、あるいは、あなたが、「刑罰の程度と内容」についても、決めなければならないことになる。そうして、この義務は、日本国民である以上、いかなる理由があれ、逃れることが許されないのです。

現在の日本の司法は、機械的決定論の人間観に基づいた刑法学説により、目的刑主義的な刑罰を犯罪者に課して、可能な限り犯罪者の更生と社会復帰を目指そうとしているわけですが、これに対して、社会からは「犯罪者に対して甘過ぎる」という公憤が、しばしば見られるわけです。

しかし、機械的決定論的な人間観に立つのである限り、犯罪がなぜ起きたのかについて「科学的合理的説明」を試みようとするわけですから、調査分析の結果、生い立ちなど犯罪者本人の責任にはどうしても問えない部分が浮かび上がって来ることになるわけです。そしてまた、そのような「機械的要因」が明らかになった以上は、裁判官としては、自分の良心に記された「衡平」の法感覚に従って、それに対して相応の情状を酌量せざるを得ないわけです。つまり、良心の声に耳を傾けなければならないのです。

ところが、社会は、そうした裁判官の下した判断に対しては、「甘過ぎる」と、公憤をあらわにすることが多い。近年は、特にその傾向が強まって来ているようです。

しかし、裁判官はあくまで、良心に記された「衡平」の法感覚によって判断を下しているのであり、その同じ「衡平」の法感覚は、神の指によって、わたしの良心にも、そして、あなたの良心にも、刻み付けられているものであるのです。これを、個々人を超えて万人が共有している法感覚としての「コモン・センス」と呼んでもよいでしょう。

コモン・センスの理論から言えば、裁判官の良心に刻まれた「衡平」の法感覚に従って下される判断は、万人それぞれの良心に刻まれた「衡平」の法感覚に従って下される判断と、本来的には一致するはずのものであるです。

ところが、司法の法感覚と、社会の法感覚の間に、乖離がある、という批判の声が存在する。

そうした批判に応えるために導入されるのが、「裁判員制度」である、とすることができるではありません。

社会の中から無作為に抽出された誰か、あるいは、あなた、あるいは、わたしは、「社会の法感覚」を代表する者として、裁判官と共に席に着き、神の指によって自分の内なる良心に刻み付けられた「衡平」の声に静かに耳を傾けて、判断を下さなければなりません。

その時には、どこかの他人事とか、嘆かわしい世の中の最近の傾向とか、新聞やテレビを騒がす事件とかではなくて、「読み解かれることを待っている生きた文書」（リビング・ヒューマン・ドキュメント）としての一人の人間（犯罪者）に直面させられることになるであります。

そしてまた、あなた、あるいは、わたしは、自分の「決してぶれない」主義・主張・見解・哲学だと疑いもせず思い込んで来た価値体系ではなくて、偽ることも逃れることも許されない、自分の「内なる良心の声」に、直面させられることになるであります。

その時には、あなたも、そして、わたしも、神の指によって良心に記された「衡平」の法感覚に従って、死刑を、あるいは、無期懲役を、あるいは、有期刑を、決めればよいのです。

974 コモンローについて

[山谷](#) - 2005/12/08 12:59 -

コモンローと再建主義の問題については、過去に当掲示板で考えたことがありましたので、参考までにご紹介いたします。

過去ログ

- No.751 再建主義社会に生きる？
- No.755 イギリスのコモン・ローは聖書律法である！？
- No.759 「コモン・ロー運動」なるもの（1）
- No.761 「コモン・ロー運動」なるもの（2）
- No.764 コモン・ロー再建主義
- No.766 コモン・ロー再建主義とブリティッシュ・イスラエル主義

973 ハリファックスの事例について

[山谷](#) - 2005/12/08 11:17 -

ハリファックスの事例は、氏族共同体が行使した、行き過ぎた応報刑主義的刑罰の典型でしょ

う。

イギリスは中世後期に、各地の氏族共同体が先祖伝来保持してきた慣習法である「コモンロー」を基礎に使う、国としての法の統治を構成しようとした。

やり方としては、中央の国会の立法で「法の遵守」を全国民に命じると共に、各地間に存在する「慣習法の相違点」については、ある程度大目に見ることにしたのです。

ですので、イギリス国民は全国どこでもコモンローの決疑論的適用によって裁かれる限りにおいては、「法による統治」が実現されたことになったわけですが、そのコモンローはといえば、各地のローカルな特色がそれぞれある程度温存されているわけですから、そうしますと、こちらの町で軽微な犯罪に過ぎないものが、隣の町で死刑になるという、現代人の目からすれば奇怪な状態が展開されていたわけです。

これは、言わば、中央集権と地方分権の中間状態のようなもの、と見ればよいでしょう。

この状態は、統治の権限をめぐって中世末から続いた「中央」対「地方」の闘争が、18世紀に至ってようやく「中央」による国家統治の完成を迎えるまで続いたのです。

わが日本の場合、江戸時代においては、各地方政府（藩）が司法権を持ち、死刑も各藩が実行していました。

明治維新によって、太政官が司法権・立法権・行政権をひとりで掌握し、司法卿（司法大臣）を任命して、全国規模の法制度改革に着手したのですが、それはちょうど、中世後期から17世紀のイギリスの「中央集権と地方分権の中間状態」に似ていて、死刑についてはようやく中央の許可が必要とされるようになったものの、依然として各県（旧藩）が個別に司法権を持って統治する、という形態であったのです。

つまり、手続きや刑罰の内容や死刑について、司法を全国統一しなければならないという発想が、中世のイギリス人同様、日本人にも欠如していた、ということでしょう。

このような前近代的状态を問題視して、情熱をもって改革したのが司法卿の江藤新平でした。江藤は各地方政府が持っていた司法権を剥奪して、中央が司法権を独占し、中央が地方に司法官を任命して法の統治にあたらせるという、現在の制度に改めたわけです。

さて、再建主義というのは、リバータリアニズムと同一であり、また、コモンロー再建主義と同一であって、その主張は、「反国家、反中央」であるわけです。つまり、18世紀以来中央政府が独占してきた権力、とりわけ司法権を、ふたたび地方に取り戻そう、というムーブメントであるわけです。

中央政府が全国統一の司法権を持って行使している現状は、再建主義者に言わせると「全体主義」であるわけですね。

再建主義者が目指す、聖書律法とコモンローの決疑論的適用により個々の判事が個々のケースを裁くというやり方は、つまり、それぞれの地方がそれぞれに「新たな法」としての判例法を創出して行くということであるわけで、それに対して、中央政府は何も口出しすることができない。いや、口出ししてはならない。なぜなら、中央議会が成文法で制定する全国統一のシステムは何であれ、「全体主義」であり「悪魔的人本主義」である、というわけです。



972 実際は無理

患者 - 2005/12/08 08:14 -

971 に賛成ですが、現実的には人道的見地から実施不可能でしょうね。

971 死刑の抑止効果

ハリファックス - 2005/12/08 07:04 -

>>969

恐怖を齎す刑罰なら、ギロチンによる斬首、去勢する宮刑がいいよね。絞首刑は死ぬとき苦痛がなさ過ぎ！。皮膚を剥いだり、両手両足切断の刑もいい。油を入れた大釜で低音からゆっくり煮殺したり、火あぶりもいいですね。もちろん公開処刑。

<http://www.ff.ij4u.or.jp/~yeelen/howto.htm>

実際断頭台で有名なハリファックスでは、イギリスの他の町よりも凶悪犯罪も含めて、すべての犯罪がうんと少なかったそうです。<http://www.ff.ij4u.or.jp/~yeelen/system/law/halifax.htm>

970 現代文明滅亡待望論

山谷 - 2005/12/07 22:22 -

再建主義が依って立つヴァンティル弁証学が採る手法は、「聖書の原理の社会モデル」と「非聖書の原理の社会モデル」と、ふたつを比較して、どちらが社会として上手く機能するかを見て、その結果により、聖書啓示が真か偽かを間接的に証明する、というものです。

キリスト者にとっては、もちろん、聖書啓示は真でなければなりません。ですから、「社会モデルの比較実験」は、必ずく現代社会は失敗する>という結果になってもらわなければ、困るのです。

万が一にも現代社会が上手く機能するようなことでもあれば、それは、聖書啓示が偽であると間接的に証明されたことになるわけです。

そこで、再建主義者は、たえず現代社会を批判し、また、つねに現代社会の破滅を待望する、ということになるのです。

実際、再建主義最大の論客ゲイリー・ノースは、1980年代よりずっと、現代文明滅亡の「預言」を繰り返して来ました。

ノースは、1980年に、合衆国とソビエトとの核戦争が起きると予告し、ニュースレターの読者に、「地金を購入して、大都市を脱出し、避難せよ」と勧告しました。

1987年にノースは、「1992年にエイズ患者の蔓延で、すべての病院のベッドが満杯になり、世界はパニック状態に入る」と書きました。

その上でノースは、あの「Y2Kパニック」の仕掛人として登場し、全米で脚光を浴びることとなったわけです。

もう大方のみなさんは、Y2K問題の騒動など忘れておられるかもしれませんが、Y2K問題を煽って全世界を巻き込んだ張本人が、ゲイリー・ノースでありました。当時ノースは、「1999年の大晦日にコンピューター・チップの誤動作が起きて、全世界の銀行システムが崩壊する」と予告しました。そして、これがきっかけとなって暴動や略奪が起き、現代文明は崩壊するから、「銀行口座を解約し、株式を売却し、銃と地金と食料を購入して、僻地の山小屋に避難し、生き残りを計れ」と、呼びかけたのです。

もちろんノースは、Y2Kパニックによって文明が滅亡した後、生き残った人々は、晴れて「再建主義社会」を建設出来るようになる、と考えていたわけです。

再建主義者にとっては残念なことに、1980年の核戦争も、1992年のエイズ・パニックも、1999年のY2Kパニックも、ことごとく、現実のものとはなりませんでした。

そこで、今となっては再建主義者たち自身も、「ゲイリー・ノースはY2K問題では誤りを犯した。しかし、Y2K問題の誤りは、再建主義の誤りまでも意味するものではない」と弁明に努めなければならなかったわけです。再建主義者たちの間では、Y2K問題の「外れ預言」にもかかわらず、Y2K騒動への反省は見られないようですし、ましてや、ゲイリー・ノースに対する批判や、ノース離れなども、まったく見られないようです。

もっとも、再建主義者たちは、Y2K問題が空振りだったからといって、現代文明の滅亡をあきらめたわけではありません。ルイジアナ州の再建主義者ブルース・ウィルキンス牧師は、近い将来に米国で人種間戦争が発生し、文明が滅亡するからと言って、教会員とその子弟に武闘訓練を受けさせ、生き残りに備えさせているということです。

結局のところ、再建主義者がヴァンティル弁証学の手法を現実の世界に持ち込んで「聖書の真偽を証明しよう」と努める限りにおいては、現代文明の滅亡を、いつもつねに願い続けなければならないことになるのです。現代文明が滅亡するために、チルトンが言うように、たとい40万年かかるうとも、現代文明が滅んでくれないことには、聖書が倒れてしまうわけですから、なんとしても絶対にあきらめることはできないのです。

これが、小生が言うところの「悲観的ディスペンセーションナリズムよりもっと悲観的な、悲観的ポストミレニアリズム」です。

参考：[オンライン雑誌『ワイアード』の記事「ゲイリー・ノースについて言うべきこと」1999年1月7日配信](#)

 **969** 死刑は本当に最重刑なのでしょうか？ 患者 - 2005/12/07 22:02 -

外科医さんの書いていることよく分かる気がします。もしも死刑に効果があるのなら、外科医さんに同意見です。でも、あまり死刑にも効果があるようには思えないのです。

たとえば京都小学校無差別殺人のT氏は最初から死にたかったわけですね。ただ自分が死ぬよりも、豊かで、安定した家庭で愛されて幸せに育っている子供たちを巻き添えにして、めちゃくちゃにしてから死にたかったんですね。

彼は裁判のときから、再三自ら死刑を希望しました。そして本人の望みどおりの結果となったんでしょう？全部が全部彼の思ったとおりではないでしょうか？

彼にとって生きることのほうが死ぬよりも苦しいことだったと思います。

自殺者は増加してるんでしょ。自殺する人って、自殺が失敗して、障害者とかになって中途半端に苦しみながら生きることを恐れるのではないのでしょうか？

もしもT氏のように、誰かを巻き添えにして、自分の鬱憤を晴らして、それで死刑になれるとしたら、自殺の場合と比べて、失敗する可能性は少ないし、人道的な観点から、苦痛の少ない死ぬ方法が選択されるのでしょうか？

そのような観点から、死刑が本当に最重刑なのかなって思うんです。

もし、T氏のような人間が増えてくると、ほんとに恐ろしい社会だと思います。でも今の殺伐とした雰囲気、これからのことを予想すると、嫌だけど、増えてくる可能性はあるんじゃないかなって思うんです。

外科医さんの書いてることもわかるんですけど。教育というものがなにか甘いようなものではなくて、死ぬよりももっと、もっと恐ろしいような何かがあればいいなと思うんです。自殺をしようとするような者でも増えあがるような何か。

T氏が犯罪を犯す前に、もしもそんな刑に自分があうなら、やめようかなと考えられるような。

最重刑が死刑なので、彼は喜んで犯罪を犯してしまったのです。

968 再建主義社会の到来の可能性？

財前二郎 - 2005/12/07 18:23 -

>再建主義者のゲイリー・ノースが、「再建主義社会が誕生するために
>は、何か破滅的なカタストロフが起きて、現代文明が完全に崩壊する
>という過程を経ない限り難しいだろう」

これはちょっと意外です。再建主義者はポストミレのはずで、これから神の国が拡大して、すべての人が悔い改め、モーセ律法を適用する契約社会を地上に打ち立てるわけで、ディスペンセーションの言う破局的な社会はあり得ないと言っているわけですね。それなのに、破局的事態がないと再建主義が普及しないとは、ちょっと矛盾ではないでしょうか？これは富井氏に伺ったほうがよいのかもしれませんが、あちらは何しろ閉鎖されてますので。

967 世界観の問題

[山谷](#) - 2005/12/07 17:08 -

現代国家が「同害反復」を導入すべきかどうか、というのは、つまるところ、世界観の問題、人間観の問題であろうと思います。

決定論的人間観（科学的人間観）が多数派である現状では、当然、目的刑主義に傾くでありましょう。また、今後、非決定論的人間観（形而上学的人間観）が多数派に転じることであれば、あるいは、応報刑主義に傾くこともあるかもしれません。

現状の日本では、形而上学より科学が主流ですから、日本に文化大革命でも起きると仮定しない限り、司法界や刑法学界や立法府が一举に「応報刑主義」に転じることは、おそろくないだろうと思われます。

つまり、現代文明に何か重大で本質的なパラダイム転換でも起きない限り、現代国家が「同害反復」を導入する、ということは、考えにくいのです。

再建主義者のゲイリー・ノースが、「再建主義社会が誕生するためには、何か破滅的なカタストロフが起きて、現代文明が完全に崩壊するという過程を経ない限り難しいだろう」と見ているのは、この理由だろうと思います。

☐ 検察官は理論武装を強化し、厳罰判決を勝ち取っ
965 て頂きたい、

外科医 - 2005/12/07 16:02 -

手術を終えて、お茶を飲みながら、医局のPCに向かっています。別に私は二項図式であろうが、三項図式であろうが、多項？図式であろうが構いません。ここで専門外の神学論争や刑法学論争をするつもりもありません。再犯を繰り返し、刑務所と娑婆を行ったり来たり的人生を送る犯罪者、性犯罪を犯して服役して、出所後すぐに強姦殺人を犯してしまう犯罪者が多い現実を見て思う事は、『教育刑』とはナンセンスな考えではないか？という事です。軽作業を中心とした現状の刑務所内労働は、矯正効果や、再犯防止効果がないのではないかと考えてしまうのです。現行の懲役刑や禁固刑は、犯罪被害者の立場から考えれば軽すぎます。懲役ならば、例えば国有林の下草刈りや、下枝打ち作業を、炎天下に行わせたり、田んぼの草取り作業などを行わせて、減農薬(除草剤を使わない)栽培のお米を作る手助けをさせる等、屋外の重労働に従事させる必要があると思います。当然、これらは、回復可能な被害をもたらした犯罪に対する刑罰です。繰り返しになりますが、殺人や強姦など回復不可能な被害をもたらした犯罪者に対しては、『死』あるのみだと思います。

☐ 刑罰の内容と程度について(3)
964

[山谷](#) - 2005/12/06 22:24 -

結局のところ、「決定論」か「非決定論」か、という二項対立の図式が、刑法学の中にも入り込んで来てしまっているわけですが、わたしたちが二項対立の図式から逃れるには、やはり、三項図式で行くしかないのでありましょう。つまり

「決定論」+「摂理」+「非決定論」=「歴史」

という三項図式です。

この場合、「摂理」は、神が天使的諸力を通して宇宙を統治する、ということでありますが、この「神の宇宙支配のエージェントとしての天使的諸力」を「国家権力」とであると捉えるのであれば、次のような図式となります。すなわち

「決定論」+「国家権力」+「非決定論」=「歴史」

つまり、歴史が存続する限り、国家権力は常に必要とされることになり、そうでなければ、創造の世界はバラバラに崩壊してしまう、ということになるわけです。

それでは、墮罪後の創造の秩序としての「国家権力」の使命は何かと問えば、それは、「世界管理者として、社会の秩序と人心の安寧を保証し、人間を滅亡から免れさせること」に尽きるわけです。

それでは、わたしたちの政府は、上記の使命を上手く遂行しているのであるだろうか？

もちろん、いろいろ不備不足はあるでしょう。けれども、わたしたちの政府は、ローマ帝国、オスマントルコ帝国、西部開拓時代の合衆国政府、江戸幕府、大日本帝国政府などと比べれば、はるかに上手くその使命を遂行している、と小生は考えます。

シンガポールやタイと比べた場合でも、わたしたちの政府は、わたしたちにシンガポールやタイ、さらには、再建主義社会への移住を深刻に検討させるほどには、悪くはなっていない、と思いますが、どうでしょうか？



963

刑罰の内容と程度について（2）

[山谷](#) - 2005/12/06 22:23 -

「目的刑主義」と対照をなすのが、人間を「非決定論的存在」として捉える、「応報刑主義」です。哲学者のカール・ポパーがこの立場を唱えています。人間は自由に意思決定が出来る存在であるのだから、犯罪はすべて本人の責任である、ということになります。そうしますと、情状を酌量する余地が縮小され、刑罰は応報的な刑を中心に考えることになるであります。また、全国民を過酷な刑罰で威嚇することは、個人の自由な意思決定を大きく左右しますから、極刑の執行が、犯罪の一般的予防につながるということになります。

現代の刑法学の中では、「決定論的人間論」と「非決定論的人間論」の両方が混じって存在しています。前者が、科学的傾向が強いのにに対して、後者は、形而上学的傾向が強い、ということになるでしょう。そしてもちろん、わたしたちは、「歴史」の中に生きる限りにおいては、果たして人間が「決定論的存在」なのか「非決定論的存在」なのか、明確な回答を出すことは出来ないわけです。



962

刑罰の内容と程度について（1）

[山谷](#) - 2005/12/06 22:23 -

刑罰の内容と程度は、その社会が有する「人間理解」と密接に結びついていると小生は考えます。

犯罪者を教育刑によって矯正し、再犯予防が出来ると考える「目的刑主義」の場合は、人間を「決定論的存在」と捉える傾向があります。

現代刑法学は、キリスト教の有神的決定論ではなく、人間を機械的存在と見なす科学の「機械的決定論」に立つわけですが、これは、犯罪者が、なぜその罪を犯すことになったのか、出生から生育歴を経て現況に至るまでを詳細に調査分析することによって、相当程度の「合理的説明」を与えることが可能である、とする立場です。

このような「合理的説明」を試みた上で、本人の責任として問える部分と、本人の責任として問えない部分とを分離し、後者について情状の余地があれば酌量して、刑罰の内容と程度を決めることになります。

また、人間を「機械的決定論」で捉えますから、監獄での行動規制と思想教育によって、相当程度の矯正が可能であると考えます。

また、人間が決定論的存在であるならば、全国民を過酷な刑罰で威嚇しても、必ずしもそれが犯罪の予防につながるとは考えにくいことになります。むしろ、全国民の生育・生存の環境をたゆまず改善し続けて行くことが、犯罪予防に直接結びつくと考えられます。この「改善」には、政府が行う社会政策のすべてが含まれます。生まれて来る子どもたちが、適切な監護と養育を受けてすこやかに成長し、十分な教育を受けて発達課題を上手く乗り越え、良好な就労環境で仕事をし、病気や経済的危機に陥った場合には社会保障を利用出来るようにし、退職後は年金で最低限の生活が出来るようにすること。そのすべてが、一般的な犯罪予防につながると言ってよいでしょう。

ところで、再建主義は、そのような一般的な犯罪予防としての「政府の社会政策」を「全廃せよ」と主張しているわけです。再建主義においては、「政府の社会政策の全廃」と「死刑制度の拡大と徹底」がセットになっているわけです。

また、「決定論的人間論」が「遺伝的決定論」となった場合には、疑似科学である骨相学やナ

チスの優生学につながる危険性もありますから、注意して見て行く必要があります。

□ 追加発言
961

外科医 - 2005/12/06 20:11 -

はじめに、私は再建主義ではありません。

私は、昨今の連続する幼い命を奪う残酷な事件に心を痛めております。しかし、山谷師が、再建主義ウォッチング掲示板の968に於ける論述が、同害復讐を正しく理解しておられないと思いましたので、敢えて記しました。12族長の暴走は明らかに、同害復讐の原則を侵しています。本来なら、シェケムだけが罰せられるべきでした。『目には目を、歯には歯を、命には命を』とは、

同態復讐法（レクス・タリオニス）と呼ばれ、その根本思想は、人間の奥底にある無制限的報復（12族長の暴走のように）に対して制限を加え、同量の報復を以って満足すべきであることを想定したものです。

江戸時代は「十両盗めば首が飛ぶ」と言われていました。また、茶母によれば、韓国ではかつて贖金作りは死罪だったそうです。こういうのは行き過ぎです。同害復讐ではなく、過剰報復です。

さて、殺人事件の場合、加害者の弁護人は、生い立ちや環境を情状酌量として提示することが殆どであると思います。しかし、加害者と被害者に利害関係があり、例えば、「被害者が常習的に加害者を虐めていたので、加害者は止むに止まれず被害者の殺害に至った」というような事例は別として、被害者に何の落ち度も無い犯罪行為、特に殺人や強姦など、被害者に回復不可能な害を与えた場合は、被害者の数に係わり無く『死刑』を適応すべきであると考えます。また、麻薬や覚醒剤の密輸は、結果的に、末端利用者に回復不可能な障害を与えてしまいますので、シンガポールやタイなどのように、死刑を適応すべきだと考えます。

いずれにしても、被害者に関係の無い情状酌量は認めるべきではありません。殺人事件や強姦事件、麻薬・覚醒剤の密輸事件の裁判は、事実認定を慎重に行う必要がありますが、事実認定が確定すれば、あとは、刑法の厳格な適応あるのみであると思います。刑法の改正（被害者が無過失の殺人・強姦、及び、麻薬・覚醒剤の密輸は死刑）を強く要望します。

□ 同害反復と現代国家
960

[山谷](#) - 2005/12/06 13:58 -

司法律法が命じる「同害反復」が、現代国家の統治システムに必要なのかどうか。

これについては、カルヴァンが『キリスト教綱要』の第4編20章16節において、ある程度回答しているのではないのでしょうか？

カルヴァンの考えは、次のようなものでした。

「殺人」「盗み」「姦淫」「偽証」について、ある国の法は、厳格な死罪を適用するが、別の国の法は、それに比して、情状を酌量した刑を適用する。このような「法の多様性」が諸国の間に存するにもかかわらず、その目的とするところは同一である。すなわち、多様な諸国の法は口を一つにして、「殺人、盗み、姦淫、偽証は、神の永遠法に反する」という事実を、宣告するのである。しかし、違反に対する刑罰の内容については、諸法の間で見解が異なる。なぜかといえば、時代や土地によって、厳格な死罪を適用しなければ治安が維持出来ない場合もあるし、逆に、情状を酌量した刑罰を適用するだけで十分治安が維持出来る場合もあるからである。

上記のカルヴァンの考え方に立てば、厳格なシンガポールも、情状を汲む日本も、共に「キリストの王国の成員」として、治安維持の任務を遂行しているのであって、シンガポールと日本

の間に刑罰の内容と程度に大きな相違があるとしても、法の「制定」は多様であってかまわないのだから、無理をしてシンガポールが日本のようにする必要はないし、また、無理をして日本がシンガポールのようにする必要もない、ということでありましょう。

もっとも、江戸時代の日本は、応報刑主義的考えに基づいて、「同害反復」に近い刑罰を犯罪者に加えていました。

しかし、明治時代の刑法学者の本などを見ますと、「応報刑主義を行っていた江戸時代の方が治安が悪かった」と、はっきり述べています。

応報刑主義の江戸時代のやり方でそれなりの効果が期待できたのであれば、明治政府の司法省と刑法学者は、維新後も応報刑主義を継続したはずでありましょう。

しかし、江戸時代のやり方に明らかな不備不足が認められたがゆえに、わが国も応報刑主義から目的刑主義への段階的移行を進めて行ったのだらうと想像されます。土地や時代の推移に応じて、法の「制定」に変化があってもかまわないとするカルヴァンの考え方は、日本の場合にもぴったりあてはまります。

もちろん、日本の刑法学界にパラダイム転換が起きて、再び応報刑主義に逆戻りするとか、日本リバータリアン党でも結成されて、立法府が議員提出で刑法大改正を行うとかいう事態になれば、「同害反復」の復活も、なきにしもあらずでしょう。

それほどの大変化が起きることでもあれば、それはまさに「平成維新」です。

問題はここから先です。

小生は、現在の政府も、平成維新後の政府も、共に「キリストの王国の成員」とであるとみなします。

これに対して、再建主義者は、現在の政府は「悪魔的人本主義」であり、平成維新後の政府だけを「キリストの王国の成員」とみなすことになるのです。



959 同態復讐法は必要です

外科医 - 2005/12/06 11:59 -

同態(害)復讐法は必要です。それは、刑法が個人の復讐権を取り上げて、変わりに復讐するというのが、刑罰のそもそもの出発点であるからです。エスカレートする復讐の応酬を防ぐ意味でも、正しい適応が要求されます。それは、『目には目を、歯には歯を、命には命を』という、本来の意味での同態(害)復讐です。正しく運用するならば、社会正義は満足されます。命は回復する事は出来ない訳ですから、正当な理由無く他人の命を害したのものには『死刑』しかないと思います。栃木の小学生誘拐殺害事件の犯人は、本来なら、ナイフで胸を刺して殺すべきですが、慈悲の絞首刑になるでしょう。そうすると、被害者遺族の被害感情が満足されるでしょうか？。いずれにしても、同態(害)復讐を正しく実行するために司法があり、刑法があり、刑訴法があり、監獄法があるわけです。昨今の法曹は、大甘ナ判決を出さずに、終戦直後のように、一人殺害しても、その殺害理由が被害者の瑕疵によるのでなければ、厳格に死刑を適応すべきだと思います。最高裁で死刑が確定したら、6ヶ月以内に死刑を執行すべきです。未成年者への死刑適応も拡大していくべきだと考えます。何のための死刑制度ですか？。窃盗犯に死刑を科しているわけではないのです。殺人だけでなく、強姦や、麻薬・覚醒剤の密輸などにも死刑を適応拡大していくべきです。日本がシンガポールのような警察国家化することを希望します。検察庁の奮起を期待します。



958

同害反復が必要な社会？

山谷 - 2005/12/05 22:53 -

凶悪犯罪が発生すると、わが意を得たりとばかりに活気づく再建主義者ですが、再建主義者が「治安回復の万能薬」と主張する「同害反復」は、果たして再建主義者が願うような効用を持つのでしょうか？

司法律法は「目には目を、歯には歯を」の「同害反復」を命じていますが、その意義を理解するには、当時の社会的背景としての「氏族共同体」を考えなければなりません。

旧約の族長時代においては、「国家の絶対主権」の委任主体が、今日のような「国家共同体」ではなくて、「氏族共同体」でありました。「氏族共同体」は族長の支配のもとで、権力が司法も立法も行政も未分化の状態で行使されていました。そうした氏族共同体における「剣の権能」の行使は、しばしば暴走することがあったのです。

創世記を見ますと、12族長の妹たちのひとりであるディナが、異民族の若者に誘惑されて処女を奪われる事件が記されています。激怒した12族長は計略を立て、妹を正式に嫁として与えるための契約の条件を提示しました。それは、「割礼を受ける」ことでした。相手の異民族は条件を呑み、男子全員が割礼を施したのですが、その傷がまだ癒えない三日目に、12族長は相手の一族を急襲し、成人男子全員を殺害すると共に、金品財産を略奪し、婦女子を攫って奴隷としたのでした。

このような12族長の暴走に対して、大族長ヤコブは大いに心を痛めましたが、なすすべがまったくありませんでした。

今日の「国家共同体」であれば、「剣の権能」が司法と立法と行政の三権に分立していますから、暴力の権能を行使する官憲と言えども、司法府の許可を待たずに勝手に暴力を行使することは出来ませんし、また、たとえ司法の許可のもとで暴力を行使する場合であっても、立法府が定めた法の規制の中でしか行使することが出来ません。これに対して、権力が未分化の「氏族共同体」においては、族長の怒りにまかせて暴力の行使が際限なくエスカレートし、だれもそれを止めることができない状況が存在したわけです。

このような暴走の危険をはらむ「氏族共同体」の「剣の権能」を、一定の枠にはめて規制しようと意図するのが、司法律法の「同害反復」の規定であるわけです。

つまり、「目には目を、歯には歯を」という規定は、相手から受けた被害に過剰に反応して、相手はおろか一族郎党すべてを殺戮しかねない「氏族共同体」に対して、「剣の権能」を制限する機能を持っていたわけです。

このような「同害反復」の規定が、今日の「国家共同体」にとって無用であることは、論を待ちません。なぜなら、三権が分立している現代の権力は、犯罪者の一族郎党を残らず殺戮するほど「暴走」することなど絶対あり得ないシステムになっているからです。

もっとも、再建主義者は一部の過激なリバータリアンと同様に、現代国家のシステムを解体して、コモン・マン（自然人）が万事自己責任で執り行なう「家父長政治」を目指しているわけですから、そのような「再建主義社会」が到来したならば、「同害反復」の規定も再び必要になって来るのかもしれませんが。

近未来あるいは40万年後の「再建主義社会」においては、国家権力が限りなく縮小されていますから、個人が銃火器で武装して自己責任で安全保障を行い、犯罪被害に遭った場合には、個

人が自力で「私刑」を執行し、犯罪者に報復しなければなりません。そのような社会においては、過剰な私刑の執行を規制するために、「同害反復」の規定が必要になるでありません。

ゲイリー・ノースが間借りしているリバータリアニズム推進のシンクタンク「リ्यू・ロックウェル」は、ハリケーン・カタリナの未曾有の大災害に際して、「国家が存在しなければ、個人が自己責任で災害に万全の備えをしたはずだから、これほどの被害にはならなかったはずだ」と、驚くべき主張をしています。

これは言い換えれば、「国家が存在しなければ、個人が自己責任で武装して犯罪者に報復しなければならないから、治安は飛躍的に改善されるはずだ」という考えになるのであります。

そのためには確かに、「同害反復」の規定が必要なのです。それがなければ、再建主義社会では個人が歯止めなく「私刑」をエスカレートさせ、12族長のごとき大量殺戮を起こしかねないのです。「同害反復」が必要とされる再建主義社会とは、何と治安の良い社会であることでしょう！

 957 米国におけるリバータリアニズム

[山谷](#) - 2005/12/05 16:40 -

リバータリアニズム推進政党として最大なのが、「米国リバータリアン党」(National Libertarian Party)であります。キリスト教右派と何が違うかと言えば、「反連邦・反福祉国家・反戦」を唱え、アメリカの孤立主義をうたい、イラク戦争に反対している点であります。

全米50州それぞれに党地方支部または提携政治団体を擁しており、各地の村、町、市、郡といった地方自治体の公職にリバータリアンを送り込んでいます。その範囲は、市議会議員や町議会議員、財務局、公安委員会、水道局、消防局、開発局、教育委員会、図書館運営委員会、保健所、選挙管理委員など、あらゆる公職にわたっています。

さらにまた、上院議員選挙、州議会議員選挙、市長選挙、市議会議員選挙などに、リバータリアンの候補者を積極的に擁立しています。

再建主義者が言うように、聖霊に満たされたキリスト者が司法律法を国家と法の領域に適用して、「国家を縮小し、福祉と諸税を廃止し、十分の一税を導入し、経済を完全自由化する」ことにより、神の国を再建する責務を負うのだとしたら、キリスト者の投票行動における選択肢としては、共和党よりはむしろ、リバータリアン党の候補者へ、ということになるであります。

イラク戦争に対する米国民の幻滅が広がっている状況が今後も続けば、アメリカの保守的キリスト者は、民主党でもない、共和党でもない、第三の選択肢としてのリバータリアン党へと向かい、米国政界におけるリバータリアニズム／キリスト教再建主義の進出は、さらに拡大して行く可能性があります。

 956 質問ですが

通りすがり 2 - 2005/12/05 12:01 -

チャットみたいですが、質問を、、、
アメリカでの再建主義またはリバータリアニズムの影響力
あるいは影響範囲はどのくらいのものなのでしょう？

たとえばひとつの政党として成り立ちえるのか？

 955 米国政治における再建主義の影響

[山谷](#) - 2005/12/05 11:51 -

米国政治における再建主義の影響を、「宗教右派」だけに限って見ようとするのは、大いなる誤りでありましょう。

小生は、むしろ、「リバータリアニズム」にこそ、注目して見なければならないと考えています。

なぜなら、再建主義とリバータリアニズムは表裏一体の関係にあり、再建主義の創始者ラッシュドゥーニーも、再建主義最大の論客ゲイリー・ノースも共に、リバータリアニズム推進の右翼シンクタンクにスタッフとして勤務した経歴を有し、自らも「リバータリアニストである」と認めているからです。

再建主義団体が、講解説教とホームスクーリングという地道な手段だけに頼って「米国再建」を目指しているのでないことは、再建主義シンクタンク「カルケドン」の最近の動向を見ても明らかでありましょう。

カルケドンは、米上院での「憎悪犯罪取締促進法」の通過を阻止するために、各チャンネルを通じて上院議員に対するロビー活動を展開しています。

つまり、再建主義者が言うように、講解説教とホームスクーリング<だけ>でやっているわけでは、決してないのです。

米国政治における再建主義の主要な影響を、「リバータリアニズム」においてこそ見るべきであるとしたら、それが「新保守主義」「新自由主義」という名称で輸入されて来ているわたしたちの国日本においても、間接的なかたちで再建主義の影響が、すでに入り込んで来ている、と考えるべきでありましょう。

たとえば、上智大学教授で歴史修正主義者である渡辺昇一氏は、憲法改正を検討するために国会に設置された「憲法調査委員会」に有識者代表として出席し、意見陳述を行ったわけですが、その内容は、国家の規模縮小と、相続税の廃止により、消費税10%だけで国家財政のすべての経費を賄うことが可能である、とする、典型的なリバータリアニズムの主張であったわけです。渡辺氏が再建主義とは無縁であるとしても、リバータリアニズムが提案する社会モデルと、再建主義が提案する社会モデルは、基本的に同一であるわけですから、当然のことながら、「再建主義的キリスト者はリバータリアニストになるべきだ」ということになります。

カリスマ派のオピニオン雑誌である『ハーザー』などを見ましても、最近の論調は、「国家の財政の破綻をどうするか？」「自虐史観からの離脱」「日ユ同祖論を通じた日本の福音化」というテーマが見られ、こうした問題に対する関心がカリスマ派の中でも大きいことがわかります。

そういう状況であればこそ、「再建主義の誘惑」というものは、この日本においてもまた、大きなものである、と見るべきでありましょう。なぜなら、再建主義は、「聖霊に満たされたキリスト者が、司法律法を国家と法に適用することにより、財政破綻の問題を解決し、治安を回復し、ユダヤ人国家としての日本人の自己同一性を回復する」という、「魂のニード」に応えるものであるからです。



953

偽造建築の再建主義

通りすがり 2 - 2005/12/05 11:40 -

山谷さまの説は聖書に基づいており、まったく同意です。
富井氏の説はかなり乱暴であり、あちこちに論理的飛躍、
というより、メチャクチャな展開が目立ちます。
どして、こうなるのお〜と。
彼の特徴として、きわめて独りよがり、独断。
姉齒建築士は悪霊に憑かれていますと言っていますが、
御自分はどうかのかなと、彼の振る舞いを見ると疑問です。
再建主義がカルバンに根拠を置いていると主張するのならば、
その基礎と上物がすでに乖離しているわけで、
何のことはない姉齒氏と同じく偽造建築ではないだろうか？
やたらと理屈をこねるかと思えば、女牧師が空中を瞬間移動したとか、、、
ない物が突如出現したとか、、、



952

「制定」と「衡平」

[山谷](#) - 2005/12/05 11:12 -

カルヴァンは、国家が定める公法の正当性の要素として、「制定」と「衡平」の二点を挙げています。

「衡平」の聖書的基础は、万人の良心に善悪正邪の法感覚としての「衡平」が、神によって刻み込まれたとする、ローマ書が根拠となるであります。

では、「衡平」の目的に適う限りにおいて、諸国家が自由に多様な法を制定することができるという、「制定」の聖書的基础は、どこに求めたらよいのでしょうか？

これについては、「神の最初の被造物としての知恵」に言及している箴言が根拠となり得ると思われます。

当掲示板では以前、法の「制定」に関わる人間の理性能力と、箴言の「知恵」との問題について、[「聖書釈義に基づいた政治的一般恩恵について」](#)と題して論考したことがありました。

そこでは、次のように考えたのでした：

—以下引用—

「知恵」を擬人化して描いている箴言では、知恵自身が、知恵の働きを、次のように述べています。

「わたし（知恵）によって王は君臨し、
支配者は正しい掟を定める。
君侯、自由人、正しい裁きを行う人は皆
わたしによって治める」（箴言8:15-16）

このように、政治的統治行為に携わる人間としての王、君侯、自由人、裁判官は、「知恵」によって、その必要とする理性能力を付与され、統治行為を行うことが可能とされる、と言われています。

上記聖句で知恵は、王（支配者）に権力の正統性を付与する（君臨）だけでなく、国家の公法を正当に定める権能をも付与する（正しい掟）と言われており、さらに知恵は、世襲の王だけでなく、君侯、自由人、裁判官にも、統治行為を行う同様の能力を付与すると言われていきます。ここから、王制に限らず、＜人間の立てた制度＞としての寡頭制や共和制においても、「知恵」が統治行為に必要な理性能力を付与する、と考えることが出来ます。

—引用以上—

上記のように、諸国家の法の「制定」に関わる人間の理性能力が、神の第一の被造物としての「知恵」によって付与されているものであるとするならば、わたしたちは、またもや、二項対立の図式を捨てて、三項図式で物事を考えるよう求められていることになります。

すなわち

「恩寵」 + 「一般恩恵」 + 「自然」 = 「世界」

という図式であり、さらに

「神の永遠法」 + 「聖霊の照明」 + 「人間の良心」 = 「衡平」

であり、さらに

「神の永遠法」 + 「知恵の照明」 + 「人間の理性」 = 「制定」

このような「制定」と「衡平」によって諸国の法が成り立っているのであれば、司法律法が廃棄されたことにより生ずるとされる、いわゆる「真空の中間領域」というようなものは、はなから存在し得ないこととなり、キリスト者は「自己の良心のために」（ローマ書）、また、万物の創造者であり・それゆえ・知恵の創造者でもあられる「キリストのために」（ペトロ前書）、「諸国の法」に服従することが出来るのです。

 **950** まったく馬鹿げている！

[山谷](#) - 2005/12/03 15:29 -

カルヴァンはその大著『キリスト教綱要』の第4巻の20章において、「国家と法」の問題を詳細に論じています。それを読むと、カルヴァンの立場は明確な「反再建主義」である、ということがわかります。

「諸国の法」に関するカルヴァンの主張の要点は、以下のようなものです。

- (1) 国家が定める公法には、法の「制定」(Enactment)という要素と、制定の根拠としての「衡平」(Equity)という要素がある。
- (2) 神は、人間の心に「衡平」の法感覚を刻み込まれた。これがすなわち「自然法」であり、それはまた、旧約律法中の道德律法と同一のものである。
- (3) 国家は、「衡平」という目的に適う限りにおいて、その時々が必要に応じ、多種多様な法を「制定」することができる。
- (4) 国家が定める公法が、「衡平」という目的に適っているのであれば、諸国の法が如何に

多様であろうと、キリスト者がそれらに反対する理由はない。

(5) 「殺人」「盗み」「姦淫」「偽証」について、ある国の法は、厳格な死罪を適用するが、別の国の法は、それに比して、情状を酌量した刑を適用する。このような「法の多様性」が諸国の間に存するにもかかわらず、その目的とするところは同一である。すなわち、多様な諸国の法は口を一つにして、「殺人、盗み、姦淫、偽証は、神の永遠法に反する」という事実を、宣告するのである。しかし、違反に対する刑罰の内容については、諸法の間で見解が異なる。なぜかといえば、時代や土地によって、厳格な死罪を適用しなければ治安が維持出来ない場合もあるし、逆に、情状を酌量した刑罰を適用するだけで十分治安が維持出来る場合もあるからである。

(6) 「司法律法が廃棄され、諸国の新たな法がそれにとって代わる事態は、聖書律法に対する冒涇である」と主張する者がいるが、「まったく馬鹿げている」。

(7) 主なる神は、「世界の諸国が遵守すべき法を、モーセを通してはお与えにならなかった」。神はただ、ユダヤ人の国家を選んで、特別な保護下に置いて指導し、神御自らがユダヤ人のために法を制定されたのである。

以上のカルヴァンの主張によれば、再建主義というのは、「まったく馬鹿げている」（『キリスト教綱要』第4編20章16節）のです。

 御言葉の適用について (2)

[山谷](#) - 2005/12/01 22:09 -

さて、御言葉は、キリストが再臨し、キリスト者が復活し、世の終わりが来るのでなければ、世俗的政府（主権・位・支配・権威）が滅ぼされることはないし、また、キリストが諸国家を直接統治なさることも、起こらない、と明言しているのです。

それでは
キリストは、すでに再臨されたのだろうか？
キリスト者は、すでに復活させられたのだろうか？
世の終わりは、すでに到来しているのだろうか？

答えは、NOであります。

そうであるならば、御言葉を現代の世界に適用する限りにおいて、再建主義の主張は、絶対に成り立ち得ないのです。

しかし、もし、再建主義者が、パーシャルプレテリズムの立場を捨てて、フルプレテリズムの立場に移行するならば、再建主義の主張は、成り立ち得るかもしれません。

なぜなら、西暦70年にキリストが再臨し、全キリスト者が復活し、世の終わりが到来し、現在は新天新地であるというのであれば、わたしたち「王の系統を引く祭司」としてのキリスト者が、キリストの肢体として、諸国家を征服し、諸国家を統治することは、御言葉に適っているように思われるからです。

しかし、フルプレテリストが信じていることが全面的に正しいのであれば、フルプレテリストは、それでもなお、現代の世俗的國家に司法律法を適用することが不可能になってしまうのです。

なぜなら、フルプレテリスト再建主義者は、「古い天と古い地＝旧約律法」と捉えているので

すから、古い天と古い地が過ぎ去ってしまって、いまが新天新地となっている以上、もはや、司法律法を適用することは不可能であるからです。司法律法は「過ぎ去ってしまった」ゆえに、もはや、その一点一画すらも、残っていないことになるのです。

948 御言葉の適用について (1)

[山谷](#) - 2005/12/01 22:07 -

再建主義者は、「御言葉をあらゆる領域に適用しない人間は、理性過信のリベラリストだ」と主張しているようです。

しかし、小生が考えるに、御言葉に記されていることを現実の世界にあてはめて考えていないのは、むしろ、再建主義者の方ではないかと思うのです。

御言葉には、キリストが高挙の出来事によって律法を廃棄し、かつ、位・主権・支配・権威を従属させた、とされています。すなわち、エフェソ2:15が言うように

キリストは、規則と戒律づくめの律法を廃棄されました。

その上で、エフェソ1:20が言うように

神は、キリストを死者の中から復活させ、天においてご自分の右の座に着かせ、すべての支配、権威、勢力、主権の上に置き、今の世ばかりでなく、来るべき世にも唱えられるあらゆる名の上に置かれました。

上記の御言葉を現代の世界に適用するならば、「現経綸において司法律法は廃棄されており」かつ「世俗的政府（位・主権・支配・権威）はキリスト頭首権に従属する『キリストのしもべ』である」ということになります。

では、司法律法が廃棄されている今、世俗的政府は、何によって主権領域を統治すればよいのだろうか？ これについては、御言葉は、万人の心に神の指によって「法」が刻み付けられている事実を指摘しています。この「法」が有効に機能することにより、社会の秩序と安寧を維持し得るのです。すなわち、ローマ2:14が言うように

たとえ律法を持たない異邦人も、律法の命じるところを自然に行えば、律法を持たなくとも、自分自身が律法なのです。

この「自然法」によって、世俗的政府は、主権領域を統治すればよいのです。

それでは、自然法によって統治する世俗的政府に対して、キリスト者は国民としての諸義務を果たすべきなのだろうか？ これについて御言葉は、次のように言うのです。すなわち、ペトロ2:13が言うように

主のために、すべて人間の立てた制度に従いなさい。それが、統治者としての皇帝であろうと、あるいは、悪を行う者を処罰し、善を行う者をほめるために、皇帝が派遣した総督であろうと、服従しなさい。

つまり、キリスト者は、自然法によって統治する世俗的政府に対して、主イエス・キリストのために、服従することが出来るのです。

なぜなら、御言葉が言うように、世俗的政府（主権・位・支配・権威）は、キリストのしもべであり、自然法は神の指によって万人の心に記されたものであるわけですから、政府は「人間

の立てた制度」に過ぎないとしても、なおかつ、「キリストの王国の奉仕者」であるのです。

ところが、再建主義者は、御言葉を現代の世界に適用しようとするのではなく、むしろ、御言葉を次のように改変しようと目論んでいるのではありませんか？ すなわち

主のために、すべて人間の立てた制度を征服しなさい。それが、統治者としての皇帝であろうと、あるいは、悪を行う者を処罰し、善を行う者をほめるために、皇帝が派遣した総督であろうと、それらを征服し権力を奪回して、司法律法を厳格に適用しなさい。司法律法を適用しない制度は、それがなんであれすべて「悪魔が立てた制度」であるからだ。

しかし、御言葉には、そんなことは、書いてないのです。

むしろ御言葉は、わたしたちの主イエス・キリストが再臨されるまでは、世俗的政府（位・主権・支配・権威）が滅ぼされることはないし、また、キリストが諸国家を直接統治なさることもない、としているのです。なぜなら、コリントー15:24が言うように

キリストが来られるときに、キリストに属している人たちが復活します。次いで、世の終わりが来ます。そのとき、キリストはすべての支配、すべての権威や勢力を滅ぼし、父である神に国を引き渡されます。キリストはすべての敵を御自分の足の下に置くまで、国を支配されることになっているからです。最後の敵として、死が滅ぼされます。

[「再建主義大論争を回顧する」へ](#)